

初雁健児ゲートル時代の回想

遥かなる日々

飯能初雁ゲートル会

飯能初雁ゲートル会の歌 始蘭風 作詞

(1) 初雁わたる川越の

城趾に学ぶひと達が

巻ゲートルも漕ぎしげに

偽らさ白線 戦士帽

思ひあはるか若き日を

思ふ飯能ゲートル会

(2) 箱根山から入間川

川中むまぶ通学路

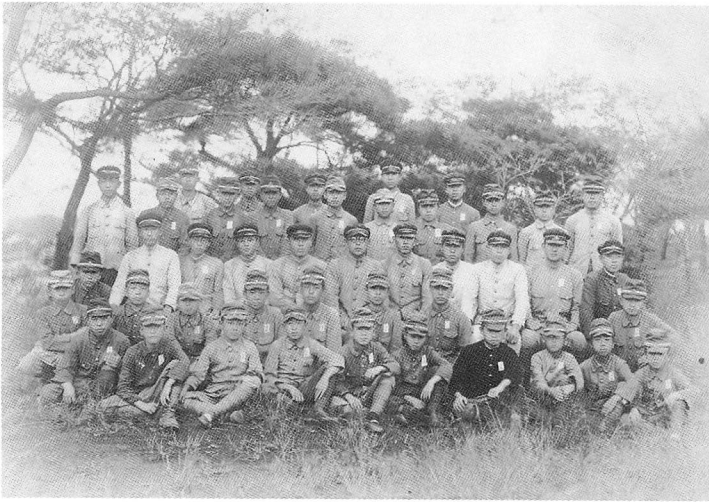
花のあしたを武をまき

もみじの夕べふみ読めど

純情多感の胸がすく

きびしくはかき青春よ

稲荷山公園をゲートルを巻いて歩いた人達



〈飯能方面からの通学者・稲荷山公園にて〉

白線を巻きし帽子にゲートルに
若き日俣ばゆ 飯能初雁びとの

〈松田蘭風〉

ゲートル会のスタート



〈第1回飯能初雁ゲートル会 S51.10.16 於 岩清水〉

参加者：来賓 松田丑二先生、横田稲吉先生、市川宗貞飯能市長(前)
会員 31名 市川宗貞様には、飯能初雁会長として多大のご支援を頂きました。

会員小山誠三飯能市長 誕生



〈第3回飯能初雁ゲートル会 H3.11.24 於 雨だれ荘〉

横田先生「奥武蔵の植物」出版記念



〈第4回飯能初雁ゲートル会 H4.11.22 於 梅そば〉

奥武蔵の植物



〈横田先生の最も愛された奥武蔵の植物研究の集大成〉

H4.10.10

松田先生 叙勲並びに米寿記念



〈第6回飯能初雁ゲートル会 H5.12.12 於 浄心会館〉

蘭風逍遙



〈私の教育人生の眩き—松田蘭風著作集〉

S59.7.1

赤田健一氏出版祝 並びに 松田先生卒寿祝



〈第7回飯能初雁ゲートル会 H7.10.15 於 岩清水〉

赤田健一氏 作品



歌集「榛野」	S52.12.25
歌集「谷の空」	S4.9.16
ぼくの軍国少年期	H6.11.5
写真集〈明治、大正、昭和〉	S60.6.30

小山市長激励 並びに 松田先生「文化賞」受賞祝



〈第8回飯能初雁ゲートル会 H8.12.15 於 梅そば〉

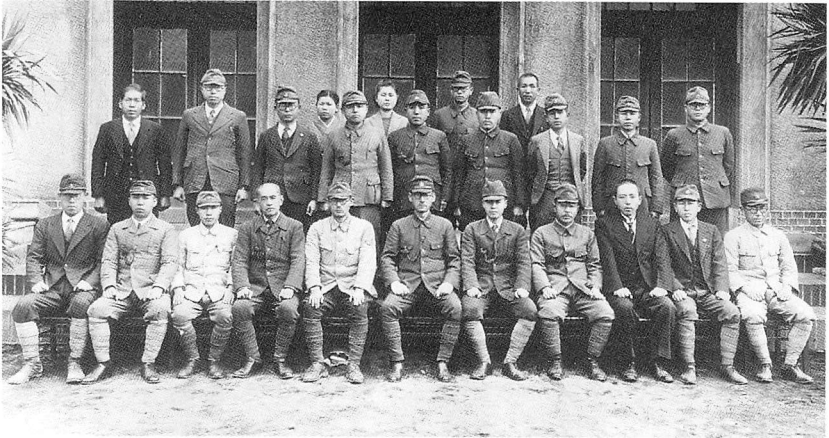
最近のゲートル会

(特別会員 関 眞氏 日高市長就任祝)



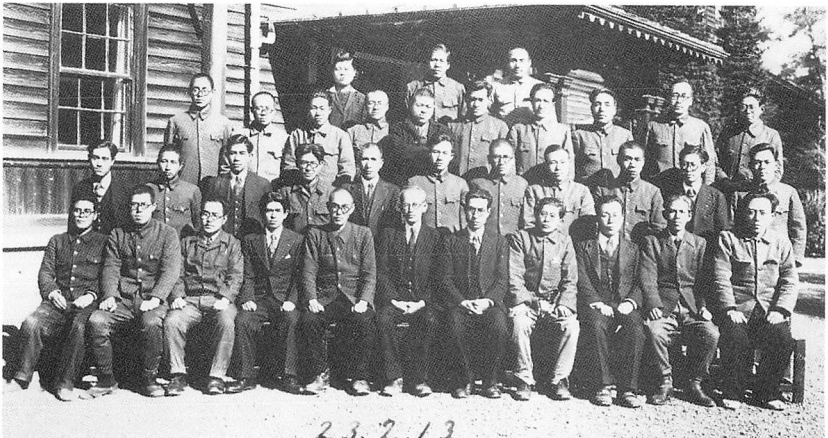
〈第11回飯能初雁ゲートル会 H11.12.12 於 梅そば〉

戦時中の川中教職員



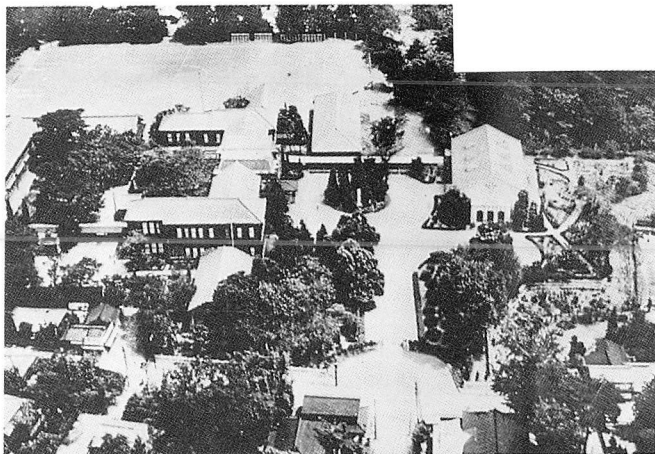
〈S 19.5.15 小島承一校長〉

戦後の川高教職員



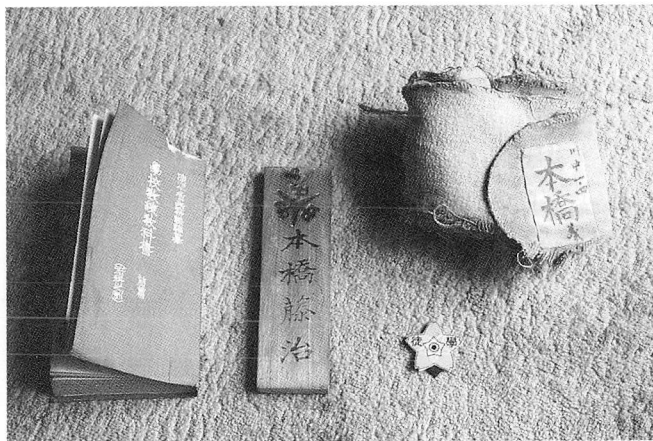
〈S 22.7.11 日新義虎校長〉

戦中の母校校舎全景（航空写真による）



〈S 20 頃〉

入学当時生徒の必需品



〈S 19.4 入学 本橋藤治氏提供〉

まえがき

飯能初雁ゲートル会

会長 関 谷 昭

この会が始まって何年になるだろう、途中何年か休んだ年もあったが二十数年かな、松田先生が会名を「ゲートル会」と命名してくれた。その先生も、稲荷山と一緒に歩いて通った横田先生も今はもういない。会員の年令も還暦どころか古稀前後の年令となってしまうのだから時の流れを感じずこの頃である。昨年暮のこの会の席上、加藤眞三君より提案された。会員一人一人の胸の中にしてある宝物を集めてみよう。六十年近い昔の思い出のころもろが入った玉手箱がこの小冊子ではなからうか。浦島太郎は箱を開いて白髪になってしまったそうだが、この本を何回か読むと髪の毛が再生し白髪が黒髪になると云う冊子ではなからうかと思う。発刊にあたってお骨折りいただいた諸兄に感謝すると共に宝物を提出下さった会員の皆さんにお礼を申し上げる次第である。

二〇〇〇年十二月八日

発刊に寄せて

川越高等学校同窓会

会長 洪 谷 健

毎年八月になると広島・長崎原爆、そして終戦記念日等が続き、かつての戦時中の悲惨な想い出が蘇ってまいります。しかし、これらはもう半世紀も前のこととて、いまの若者と言うよりも国民の多数にとつては生誕以前の出来事で、記憶の外にあり、単に歴史を通じて学ぶ第二次世界大戦中の一齣程度になってきているのが気になります。そこで、その当時を思い出し、日常の出来事を一冊に纏め、子や孫に語り伝えるのも、当時を生き抜いてきた人間の責務との考えからこれが発刊されたと思います。飯能初雁ゲートル会（主として飯能から、戦中戦後、川越中学・高校に通学した者が、関谷会長を中心に結成した会）が企画し、諸準備、編集、そして出版等々に大変なご苦労いただいたと拝察され、心からの御礼を申し上げます。

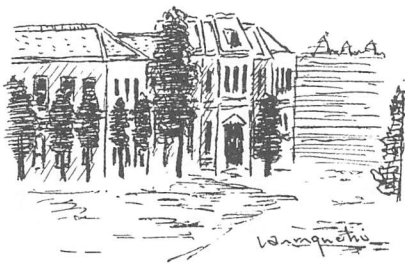
私ごとになりますが、川中には昭和十八年四月入学、終戦の昭和二十年八月までの約二

年半を戦時下の生徒として送り、言わば旧制中学校の約半分をゲートルと共に共存生活をしてきたことになりました。「欲しがりません、勝つまでは」等と言った合言葉を中心に、若き青春時代を耐乏生活の中に送った私達には、今の若者達の自由・奔放さが羨ましくも思えるし、また、将来を考えた時これで大丈夫かと言う不安感が横切ります。勿論、再び戦争の惨禍をもたらしてはならない事は当然であります、このままの状態で平和ボケからくる浪費・我儘・非常識等が幅をきかせることには危機感を持ちます。何とか、よい意味での緊張感を与えることが人生には必要だと痛感いたします。

戦後五十五年を経て、戦争体験や戦時中の耐乏生活経験者は少数派になってまいりました。そんな中でいまだに第二の人生を私立高校での教育現場で送っている私にとって、最近の好ましからざる世相の数々は決して他人事とは思えず、教育者の一人として責任の一端を身にしみて感じております。十七・八歳の青少年による常識では考えられない多くの行動や規範に対する反抗……これが、最も優れた青少年を育てた国、最も安全な国だと称賛されたわが国の置かれている現状です。この風潮をどのように改善すべきか、これらに如何に対応すべきか等々、思案は乱れます。出来れば私達の歩んできた道、戦時中や戦後のどん底生活、辛かった苦節時代の一部等を赤裸々に後輩に伝えることによって、些かな

りとも今日の課題の解決に向かう一助になれば幸いです。また、これらの中身を機会を見て私の学校での朝礼等で引用させていただくことで、現代の若者にながしかの影響や指針を与え、何かを感じ取って貰えれば幸いです。

ご苦勞賜った多くのご関係者各位に心からの感謝を捧げ、発刊に寄せることばといたします。





発刊を祝して

— 往時を偲ぶ —

飯能初雁会

会長 大沢 正敏

今回、ゲートル会々員諸氏の川中在学中の思い出の文集をつくるこのことで、大変有意義なこととお喜び申し上げます。私も昭和十五年卒業ですからほんの少し先輩ということですが、往時をしのび御祝いのことばとしたいと思います。

当時の川越バスは現在の丸広の所が飯能の車庫で、川越は久保町が終点でした。電車の場合は稲荷山公園駅から歩いて入間川駅で乗り通学しました。

私はバスケットをやっていたので、帰りが遅くなり稲荷山公園で秋には鈴虫やくつわむしをとったことがありました。またバス通学ではおそいときは久保町のバスの車庫の隣のそばやで、禁止されてはいましたが裏口から入って食べたことなどありました。

またバス通学では、いまの飯能斎場から少し先の左側の山へ乗っていたバスが転落し、二人ほど怪我人が出たこともありました。

大雪の朝バスでやっと学校に着いたところ、暫くして全員下校が告げられ、何事があったのか分からず、家へ帰ってから分かった二・二六事件も、中学時代の思い出になります。

最も忘れられないのが中学三年生の時のことです。飯能のバス通学の石井泰彦君(故人)・平山岳生君・鈴木敬次郎君(故人)・私の四人で一学期が終わった直後行った日光への三泊四日の自転車旅行です。

学校から帰宅するとすぐ旅行の準備にかかり、今のように便利な物はなかったが、それでも缶詰やら野菜やらテント暮らしの出来るような品物を揃え、二丁目の石井宅へ皆親の自転車を借用のうえ集合しました。いよいよ午前〇時飯能を出発しました。当時の道路は殆んど舗装はなく砂利道でしたので、途中相当苦労しながら走りました。明け方利根川を渡り、いよいよ暑い真夏の砂利道を古河・鹿沼・今市と、途中休憩をとりながら走りまわりました。しかし今市へ着く頃はかなり疲れ、私と平山君・石井君と鈴木君とかなりの間隔がありました。そのまま最初の宿泊地の日光へと進みました。そして東武線上今市駅前で石井鈴木両君を待ったが中々こない。時間は過ぎ真つ暗になる。テントは私達は持つていない、やむなく平山君と私は自転車を駅に預け電車で日光へ行きました。日光駅へ着くと丁

度防空演習で通りは真つ暗、旅館をさがしても中々みつからない。大したお金もなくまた中学生でもあり、やっと木賃宿をみつけて泊りました。

翌朝は早速電車で上今市迄もどり、二人づつ別れてしまいどうしようかと思案している
と、今市の方から石井・鈴木両君が「やあいたい」と言いながらやってきてやっと一緒
になりました。彼等二人は今市でかなり離れ、鈴木君が疲れてふらふらしているのとて
もこれでは日光迄行けないと今市から電車で日光へゆき、大谷川の川原にテントを張り、
近所の人に助けられて野営をしたのでした。それから四人揃って日光の大谷川のテントの
所へゆき、そのとき世話になった人の所へ自転車をあずけてリュックを背負い、東照宮・
ケーブルカーそして中禅寺湖畔へと行き、湖畔にて一泊。その時見廻りの人からこの辺は
熊が出るから気をつけなさいとおどされ、びくびくしながら休みました。

翌日は男体山へのぼり奥の院を拝礼、あと無事下山し戦場ヶ原寺へ行き、その後途中一
泊し、その後は疲れながらも楽しく帰飯しました。

四人のうち石井君・鈴木君はなくなりましたが、今でもその時のことは、苦しいこと楽
しいことが入り交って青春の思い出として残っております。お二人の御冥福をお祈りして
終ります。

発刊に際して

飯能市長 小山 誠 三

この度飯能初雁ゲートルル会の方々が、戦時下の体験をまとめられ「遙かなる日々」と題して記念誌を出されたことは誠に喜ばしく、かつ意義あるものと思います。

さて飯能市におきましても、戦時下の体験をさまざまな形で記録・展示し、次世代へ語り継いでおりますが、市内には戦争の傷あとがまだ残されておりました。過般精明下川崎地内に残存された不発弾は自衛隊の手で無事除去することが出来、市民の不安がなくなつたことは幸いでした。この不発弾は戦時中B 29爆撃機が近くの高萩飛行場を標的としたものといわれています。実はその飛行場へ当時中学生の私も仲間と共に学徒勤労動員令で、戦闘帽にゲートル姿で参加して居りました。正に戦時下の厳しさと、不透明な当時の世相の中で青春を過ごしたことになります。今は感無量の思いです。

この記念誌が激動の世紀を生きた若者の記録として、新世紀への若者のために少しでも役立つことを期待する次第です。

発刊までのあゆみ

加藤 眞 三

飯能初雁ゲートル会は昭和五十一年十月十六日、三十余名で発足しました。この会は飯能市を中心に在住する川中・川高出身者で、戦時中（特に昭和十六年～二十年）学帽・戦闘帽をかぶりゲートルを巻いて通学した仲間達で作られています。会長は関谷昭氏（中四十四回）で現在会員数は六十名を数えています。市内在住の今は亡き恩師松田丑二先生・横田稲吉先生をお迎えして、毎年一度の例会を開いていました。この会はさまざまな情報交換が行なわれ非常に有意義な集いとなっています。

平成十一年十二月十二日第十一回ゲートル会の席上、参加者全員に往時を偲び体験したさまざまな出来事の中から「私の一言」として発表して頂きましたが大変好評でした。中には時間が足りなくて十分話せなかったと思われる方もたくさんおりました。そこで皆さん方に「懐かしのゲートル時代」に体験したこと、感じたこと、当時の世相、又は今にして思えば……等何でも結構、私たちの青春時代はこんな事があったということを、文字に

託して残しておこう、「二人一人の記憶を仲間の記録にしよう」「冊子にしてみよう」と当日参加の皆さんにおはかりしたところ、全員の賛同を得たので早速準備に取りかかりました。現会員はもとより未加入の仲間たちにも呼びかけたところ、主旨に賛同されたくさんの寄稿を頂きました。呼びかけてから約半年（メ切は七月末日）五十余篇の寄稿文が集まりました。そして漸く上梓のはこびとなりました。

寄せられた原稿はゲートル時代に關しての回顧（入学期、動員期、恩師、学校、生活全般）、追憶（亡き恩師、級友）、随想（当時及び戦後の世相等も含めて）等多岐に亘り、戦時下の若者たちの生き様が克明に記述されておりました。私たちは編集効果を挙げるべく色々その方法を考えてみましたが、結局学年順に掲載させて頂くことに致しました。

写真は新井幸一氏のお力を借りまとめました。各例会時に彼がこまめに撮影したものを中心に、各学年に關わる会員提供のものを使用し掲載致しました。又伊藤豊氏（川高百周年記念行事・記念誌発行の立役者）には、編集・写真提供等ご協力を頂きました。尚編集委員については各学年より一〜二名をお願いしお力をお借り致しました。

冊子タイトルについては、編集委員並びに一部会員より提案されていたものを含め、年度の編集会議で協議した結果、

- (一) 多数の人が「ゲートル時代」は欠かせない思い出の言葉である。
- (二) 川中・川高時代を過ごした者として、「初雁健児」は使いたい。
- (三) 「青春・思い出・回想」は「遙かなる日々」に統一出来る。
- ということ、その中からタイトル・サブタイトル組合せにより表記のタイトルが決定致しました。尚参考として応募タイトル案は、
- ゲートルへの回想　　奥武蔵・初雁健児
 - ゲートルの思い出　　奥武蔵軍国少年時代
 - ゲートルの熱き想い　初雁健児の足跡
 - 奥武蔵の青春　　ゲートルを巻いていた頃
 - 遙かなる日々　　ゲートル時代の回想
 - 奥武蔵初雁健児の青春賦
 - 銃後の中学生　　ゲートルを巻いた日々
 - われらかく学べり　ゲートル時代を生きて　　などでありました。

二〇〇〇年十二月八日

目次

題字 関谷 昭

カット 原口幸雄

口絵

まえがき……………飯能初雁ゲートル会会長 関谷 昭 1

発刊に寄せて……………川越高等学校同窓会会長 洪谷 健 2

発刊を祝して―往時を偲ぶ―……………飯能初雁会会長 大沢 正敏 5

発刊に際して……………飯能市長 小山 誠三 8

発刊までのあゆみ……………加藤 眞三 9

―わが母校―……………17

―川中校旗と校歌―……………18

第一部―会員寄稿より―

第一章 如雪会―中四十三回―

ゲートルについて……………新井 照三 21

岐路に立って……………入子 祐三 23

第二章 如月会 — 第四十四回 —

ゲートル あれこれ……………佐野陽太郎 29

初めての問刈あいがり……………関谷 昭 38

回想茶話……………細田 久夫 40

思い出……………町田 成夫 45

主として稻荷山公園通りの思い出……………山影 裕昭 48

青天の輝き……………山岸 悦二 54

第三章 火工廠の青春 — 中四十五・六回 —

中学生時代に思う……………鈴木 浩 61

悪童……………原口 幸雄 65

思い出二題……………宮岡 正治 72

私の戦中、戦後……………山川 健夫 77

戦闘帽の一年生……………増島 成郎 81

第四章 遠い飛行機雲 — 中四十七回・高一回 —

人間万事塞翁が馬……………新井 隆夫 87

五年間あれこれ……………大野 勝男 89

わがゲートル時代……………	加藤 眞三	92
川中時代の思い出と自己紹介……………	川邊 信武	103
必敗の戦争から学んだこと……………	久保多太男	108
共に生き共に歩んで……………	小山 誠三	115
戦時下の中学生生活……………	澁谷 健	118
ゲートル通学の思い出……………	清水陽太郎	122
海洋訓練の思い出……………	関 眞	124
「ふるさと」考……………	西澤 孝	126
ゲートルの思い出……………	茂木 宗孝	130
思い出あれこれ……………	山崎 節夫	136
準会員……………	吉野 重彦	138
第五章 あゝ軍国少年―中四十八回・高二回―		
少年の日よいずこ……………	浅見 敬一	143
戦時中の思い出……………	石井 勝己	146
私のゲートル時代……………	海野 武人	150
アンビリーバブル……………	及川 湍夫	158

稲荷山公園の思い出	小川 哲也	163
「ゲートル事始」の地訪問記	菊池好太郎	164
川越市駅の広場	岸 昭夫	170
懐かしのゲートル時代	高橋豊二郎	172
「ゲートル街道」	土屋 保三	176
戦争による変革期	中島 一	181
通年動員は「火工廠」	本橋 藤治	186
あの日、あの時	八鍬 幸彦	200
カラムシ採り	山口 恭男	207
思い出——今は亡き赤田先輩のことなど——	吉田 稔美	211
第六章 おーい楠の木よ——高三回——		
半年の体験	浅見 茂男	217
B-29の空	内沼 一雄	219
思い出すままに 十二〜三才の頃	赤田 康二	225
懐かしのゲートル時代〜初雁少年青春の一コマ	角谷 文昭	230
ゲートルの思い出	加藤 博	234

懐かしのゲートル時代……………君塚 功 236

回想……………双木 貞夫 239

第七章 最後の川中生―高四回―

奥武蔵駅伝追想……………浅野 光明 245

呪縛の世界……………伊藤 継善 248

川越中学校入学前後のあれこれ……………大浦 一郎 253

私のオリンピックと飯能……………齊藤 博 262

第二部―恩師・級友を偲んで―

松田先生を偲ぶ……………新井 照三 269

担任 横田稻吉先生……………加藤 眞三 272

赤田さんのこと……………海野 武人 276

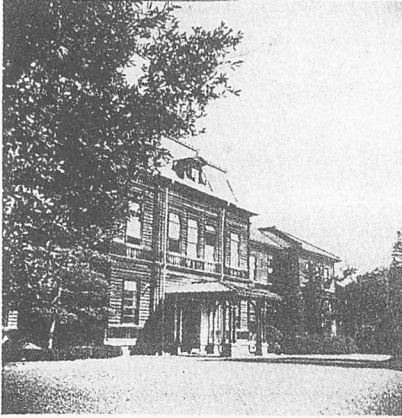
あとがき…………… 279

編集風景(アルバム)…………… 284

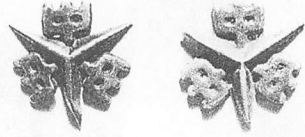
あれから五十年…活躍するゲートル会の面々…………… 285

飯能初雁ゲートル会 名簿…………… 289

— わが母校 —



3. 旧校舎・本部



1. 中学・校章



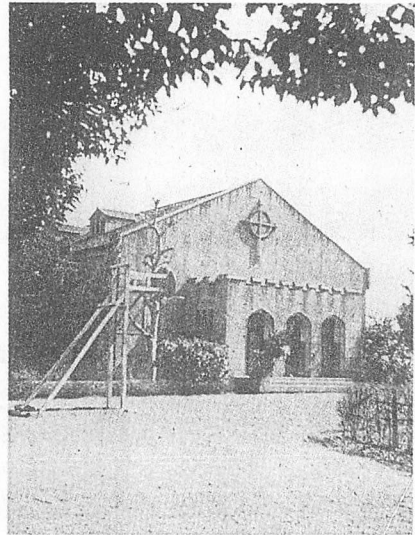
2. 中学・ボタン



5. 高校・校章

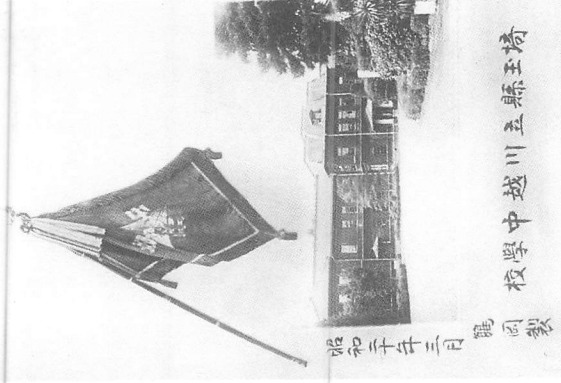


6. 高校・ボタン



4. 旧講堂

一川中校旗と 校歌一



栗岡前校長

小島校長

校歌

紫句一
天與深川越野

確据名規操廣越野

入斜合十學舎含

調合水の来長し

城高城大聖營
の學和事物三
址の學に西文通

城高城大聖營
の學和事物三
址の學に西文通

師幼弟情一
皆華美編才麗潔然

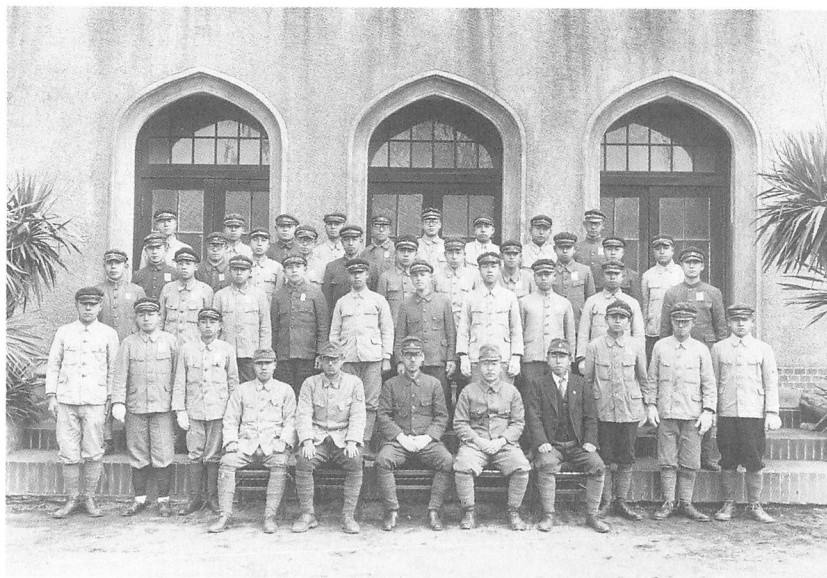
社教風三編才麗潔然

理安風三編才麗潔然

第一部——會員寄稿より——

第一章 如雪会

——中四十三回——



坂田先生

松田先生

小島校長

牧野先生

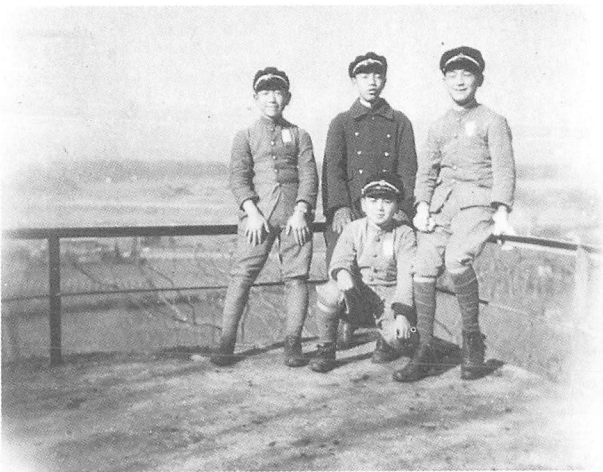
那須先生

ゲートル会の顧問格一両脇に



新井照三

入子祐三



若き日の純真さ溢れて…秀才たち

ゲートルについて

新井照三

小学校の頃は半ズボンをはいてすねは丸出したが、中学に入ったら長ズボンをはいてゲートルを巻かなければいけない。先輩もみんなその恰好をしているし、軍国主義の時代に育ったからそんなものだと思つて疑つたことはない。

巾が5センチか6センチで長さが一メートル半か、せいぜい二メートルまでの布切れを両足のすねに巻く。くるぶしのところから巻き始めて、巻き終りは細巾のひもがつき、ひざの下まで巻いてそのひもを二・三回まわして外側から止める。

我々が入学した頃は物資不足の時代になつていたから、布切れは麻袋のような生地だったが、兄貴のお下がりを使う生徒はいい生地のを巻いていた。教練の時間に競争させられた記憶もある。

いずれにしてもゲートルと言えばなつかしい思いが盡きない。

そこでゲートルの語源をさぐってみようと辞書を引いてみた。先ず英語の辞書と思ったが、いろいろあるからその内の一つをあげることにする。

gaiter n. covering of cloth, leather, etc. for leg below knee, for ankle, or for part of machine etc. [F. *guêtre*]

末尾にある記号からすると、語源はフランス語らしい。明治のむかし、日本で陸軍を創設するのにフランスの軍制を倣った。海軍はイギリスに倣ったらしいが、フランス陸軍の兵隊はこのゲートルを巻いていたのだろう。

そこでついでのことに、佛英辞典を引いてみる。

guêtre s.f. Gaiter, legging, spat

とあいそがないが、女性名詞らしいのが面白い。

さらについでにプティ・ラルースを引いてみる。

GUËTRE n.f. (du francigüe). Bande de cuir ou de tissu qui couvre le bas de la jambe et le dessus de la chaussure

とフランス語が語源のように書いてある。解説は英語の辞書と同じだ。

川越商業は中学や工業と違って、白い広巾の布切れを巻いていた。そして上下方向何ヶ

所か皮帯で止めていたような記憶がある。あれの方がカッコ良かったなと思ひ出す。

岐路に立つて

入子祐三

戦中、川越中学校で学んだ思ひ出は、数限りなくある。

○稻荷山公園駅から入間川駅までの徒歩通学はかなりきつい毎日だった。

海軍兵学校へ行った一井君は、知力・体力が優れていて、マラソンをして、一電車先のに乗り継ぐことをやっていた。

稻荷山公園の草むらに呼び込まれて、先輩から殴られた事もあった。どうして殴られたのか思ひ出せない。また、入間川農事試験場に忍び込んで、いちごを食べたこともあった。○勤労働員も忘れられないものがある。名栗の山林の手入れ作業は辛かった。日の丸弁当と大きな鎌を担いで山に入り、あい刈り作業を一日中した。蜂に刺されてもろくに薬もなく困ったのを思ひ出す。おまけに杉皮を背負つての下山も苦しかった。

戦争が激しさを増すにつれて、学校へ行くことが無くなった。朝霞被服廠通いが始まったのである。毎日トロッコで荷物の運搬作業をした。「ドッコイ、コオラ、コラサンヨ」の掛け声は、今も耳に残っている。女学生から食券を貰って、腹いっぱいうどんを食べることが出来たのは、せめてもの慰めだった。

戦中の進学は、非常に厳しいものだった。軍関係への希望もしたが、うまく行かず随分悩んだ。岐路が幾つかあったが、高等商船への道を選んだ。

清水高等商船学校に合格して、仲間から送別会をしてもらったのも、被服廠の倉庫の二階だった。当時は、何の疑いもなく戦勝を信じて、黙々と動員に参加していた。

○終戦後、清水高等商船学校から戻り空白の日々が続いた。

軍関係の学校の者は、専門学校や大学への転校手続きが進められたが、高等商船は、廃校か、存続か、なかなか決まらなかった。漸く希望者は転校の指示がでた。私は、戦争で多くの船舶を失い、先の見通しが無い海運界の状況から、転校することにした。

敗戦のすさんだ気持ちから重い腰を上げて埼玉師範学校へ出向き、編入学試験の申し込みにした。しかし、すでに編入試験は終わった旨で門前払いされた。やむなく傷心帰宅することになった。

赤羽經由で池袋から二輛連結の飯能行に乗った。途中大泉学園駅から、偶然にも川中時代の親友荻野茂君が乗ってきたのである。

お互いに元気で会えた喜びの挨拶を交わした後、次の様な会話をした。

「貴様、何をしているのか。」

「埼玉師範で門前払いをくつての帰りだ。」

「そうか、俺は大泉師範の編入試験を受けての帰りだ。」

「結果はどうだった。」

「追って知らせがあることになっている。貴様、師範希望なら、今から大泉へ戻って試験を受けさせてもらえよ、駄目でもともと交渉してみろよ。」

「そうだな、よし行ってみよう。降りるよ。」

と保谷駅で飛び下りた。何と一区間での会話であった。

そして、大泉師範学校の門を叩くことになった。師範学校の職員室に入って事情を説明して、今から試験を受けさせて欲しいと熱弁をふるった。(自分でも驚く程に熱く語っていた。)

採点中の先生方も迷惑顔で、珍入者に困惑している様子だった。その内に代表の先生が

立ち上がり、「話は分かったから暫く待ちなさい。」と言われ、関係書類を受け取ってくれた。代表の先生の所に、採点作業を中断して先生方が集まり、額を寄せて協議をされた。

その結果、

「高等商船だから頭も悪くないし、健康も心配ないな。試験をやったことにして合格にする。」と言うことになった。何とも寛大な決断だった。そして、編入学することになったのである。勿論午前中に試験を受けた者全員と一緒に編入学することになった。

大泉師範学校に入学後は、寮生活、専攻科目、教育実習のコース選択など、全く荻野君と同じにした。学校帰りには、荻野君の家に寄り飛行機用燃料を、アルコールご馳走になった。

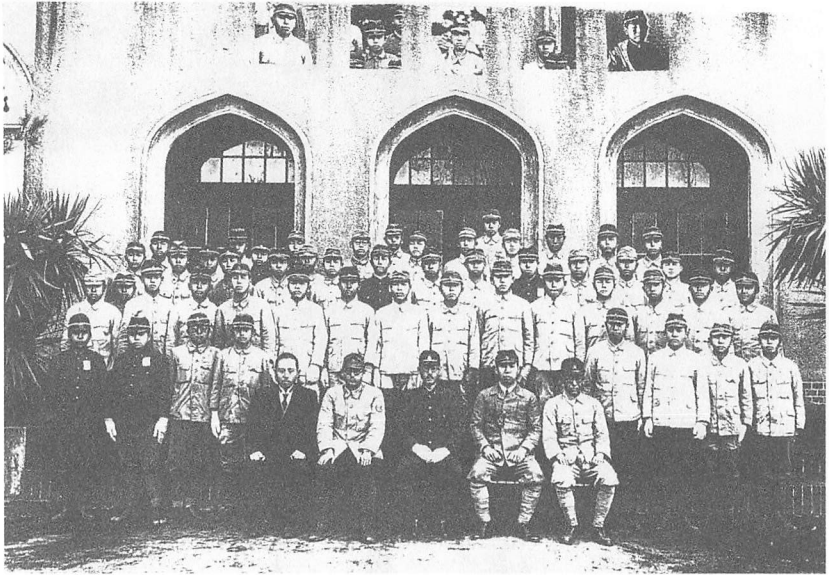
卒業後、荻野君は中学校の教師に、私は小学校の教師の道を進むことになった。

私が教職の道一筋に過ごせたのは、荻野君との車中の出会いによって道が開けた訳である。岐路に立った友人への助言を惜しまない初雁出身者の限らない友情と、出会いを改めて思い起こしている。

両名共、当然のことながら教職を一緒に退職した。退職時はからずも、開進三小校長の私が文部大臣表彰を受賞することになり、私に内定していた東京都教育功労賞が開進一中校長の荻野君へまわる形になって、恩返し出来たことを嬉しく思っている。

第二章 如月会

— 中四十四回 —



横田先生

掛原先生

小島校長

牧野先生

佐々木先生



大僧正（山影氏）の法話？



細田^々氏の手拍子で



関谷会長のあいさつから…

ゲートル あれこれ

佐野 陽太郎

平成八年の五月某日、母の三回忌を済ませ、ボツボツ遺品を整理しようと思ひ立ち、戸棚から柳行李を引張り出して開けて見ると、私達兄弟が子供の頃着た和服類がゴツソリと出て来た。明治の人間の物持ちの良さに驚いたり呆れたりしながら、これ等を保存する分と廃棄する分とに分別して行くと、行李の底からカーキ色のゲートル一組がヒョッコリと顔を出した。

手に取って見るとそれは紛れもなく私が中学在学の四年間使用した物だった。端の方にホツレのあるこのゲートルとの再会は数えて見れば五十年振りの事、これを着用して過した四年間の思い出が文字通り走馬燈の如くに脳裏に甦つて来た。

一、稲荷山公園横の桜

(一) 入学式の朝、母に起こされ、ぬむい目をコスリ乍ら起き上がる。憧れの中学への入学

初日のこと、喜び勇んで飛び起きるのが普通なのだろうが、早起きが最大の苦手の私に取っては六時起床は苦痛の極み。寝起きの悪さの故か、その後朝食を取り、服を着、ゲートルを巻いて通学の電車に乗った筈だが、その辺の記憶は残っていない。記憶は飛んで、稲荷山公園駅を降り、暫らく歩いてからの風景に辿り着く。

道は上り坂となり、この坂道を登ると突然道の両側に桜の並木が現れた。それ等はヒョロヒョロした若木ながら我々の中学入学を祝福するが如くに咲き誇っており、何か気持ち晴々とした事を覚えていゝる。そしてこの桜並木はその後三回春が巡り来る度に我々の目を楽しませてくれる事となる。

(二) 昭和二十一年一月某日、冬休みで弘前から帰省した私は、川越での中学のクラス会(五人の小集会)に出席する為、かつて通い慣れた稲荷山公園横の道を入間川駅へと急いだ。昨年六月に友と別れて以来半年振りの再会であり胸を躍らせつつ朴歯を鳴らして歩を進めると、やがて上り坂にかかる。この坂の上にある桜の木々は春に備えてエネルギーを貯えている事だろうと思いつつ坂を登りかけた私の足はハタと止ってしまった。

そこにある筈の桜の並木は見当らず、目を凝らすと何たる事か！桜の木々は数十本全てがキレイサツパリ根本から切り取られ切株だけが寒々しく点々と残っているだけだった。

誰がこんな事をし出かしたんだろうか。いくら燃料が不足しているとは言え桜の並木を切り倒すとは！ その後の足取りの重かった事。

ところが後刻聞いた所によると、この犯人は飛行場に進駐した米軍で、桜の枝が軍用大型トラックの通行に支障を来すからとして伐採してしまったとの事！

畜生！「勝てば官軍」とは言え米軍の奴等めやりたい放題をやっちゃあがって。桜をこよなく愛でる日本人の心情を知らねえのか！ 怒りは弗々と湧き上り、杜甫の詩「春望」の一節「国破れて山河あり」なる件りが脳裏を過ぎる。「草木深い春」にも増して『嚴冬の稲荷山の桜の切株』は痛々しく、米国に打ち拉がれた日本人の姿をそのまま写しているが如くに思われた。多感な青年の激情はその極に達し、「米国の奴等め、この恨みはいつか必ず晴らしてやるぞ！」と齒噛みしたものだ。

尤もこの時の激情も、その後米軍は、「日本の伝統文化財を守ると言う見地から京都・奈良は敢えて空襲の対象から除いた」との報道に接するに及び何時とはなしに雲散霧消してしまっただが。

二、お説教

(一) 入学して間もない或る日、授業が終り、帰り仕度をしていると、五年生がやって来て、

「西武線通学者は階段教室へ集れ！」と咆哮して立ち去った。

これが音に聞くお説教か、と同級の山岸君と目くばせしつつ、階段教室へと急ぐ。教室は各クラスから集まった一〜四年生で埋まる。ここで登場したのが我が郷里の大先輩増岡さんだ。いきなり「お前達の行動はまるで成ってないぞ！」と甲高い声で一喝され、黒縁の眼鏡を掛けた「物静かな文学青年」とでも言った雰囲気を持つ増岡先輩の、あまりの変り様に思わず首をすくめる。

私としては「何処がどう成っていないのか自覚症状を覚えぬまま」兎に角上級生は怖いものだとの印象を脳に焼きつけて教室を出た。以後年度が変る毎に時の最上級生から喝を入れられ、一年の幕が開く事となるが、翌年期初のお説教の際には、これも我が郷里の大先輩島村さんが「お説教ちゅうのはな、五年生の特権なんだから！良いも悪いも無いんだ。兎に角俺達の言う事を聞け！」と喝破され、この一言で一年生の時の疑問が解け、表面神妙、内心ニヤリとしたものだ。

(二) 昭和十九年の秋だったと思う。西武線で通学する「四年生」によって西武線通学の我々三年生が剣道場に集められた。これぞお説教の番外編、五年生が軍事教練で数日間学校を留守にした間の出来事だった。

三年生は一人づつ剣道部の部室に呼び込まれ、やがて私の番となる。部室に入るとズラリと四年生が並んでいたが、その内の一人で所沢出身の某氏が「笑ったな！」と叫ぶや否やイキナリバシーツと平手で頬を殴ってきた。

とその瞬間である。「佐野は真面目だからいいや、帰れよ！」と声が掛かる。これこそ天の声、こんな処に長居は無用とばかり一礼して部屋を飛び出した。私としては上級生の輪の中へ「笑顔で」入って行った覚えは更々無く、恐らく、部室の上部にある小窓から差し込む西日に目が眩み、緊張が加わって顔面がヒキツレてでもいたのだろう。夫にしても、いきなり殴るとは理不尽な！と今これを記してもその時の怒りが甦ってくる。

それより何より大事な事をすっかり忘れておりました。「天の声」の主はこの時のお礼を言上していない事に気づきました。持つべき者は良き先輩かな！「その節は急場を救って頂き本当に有難うございました。今となつては余りにも遅きに失した嫌いはありますが、改めて心からお礼を申し上げます。『本当に有難うございました。新井照三さん！』」

三、勤労働員時代

(一) 昭和十九年七月下旬の或る日、終業式に臨むべく我々四年生一同は一団となつて稲荷山公園横の道を入間川駅に向つて歩いていました。明日から夏休みと思うと思わず足取りも軽

くならうと言うもの。

すると背後から足早やに歩いて来られた横田先生が我々を追い抜きざま「君達明日から勤労動員だぞ！」と囁やいて行かれた。それを聞いて我々一同は思わず顔を見合せた。五年生は既に四月から朝霞の陸軍被服廠に動員されていたが、まさか我々まで動員されるとは。夫にしても夏休み無しとは殺生な！ と半信半疑で登校した。

案の定『明日から朝霞の陸軍被服廠に動員』の指示があり、やはり横田先生の一言は冗談では無かったのかと足取りも重く帰路についた。

(三) 昭和二十年三月、我々は中学を四年で卒業させられ、挙句の果に次の学校への進学が決っているのに「指示ある迄、引続き動員先で就労の事」と言う指示（文部省？）により中学校での卒業式を終えたその翌日から（一級上の五年で卒業した人達共々）また朝霞の被服廠で就労すると言う誠に不可思議な形の労働を強いられた。

唯一の例外は第一高等学校で、同校からは四月に入ると間もなく入学の連絡があり我が学年のホープ（今は亡き）新井利一君は早々に被服廠を後にされた。

四月も終ろうとしている或る日の午後、その新井君が学帽姿でサッソーと被服廠に現れた。新井君は高等学校生活につき色々と話してくれたが、最後に先輩の言葉として、「高等

学校の生活で大切な事は真贋を見極める術を体得する事である。真なるものを如何にして見極めるか。避けるべきは既成概念を盲信する事である。全て之を否定せよ。然る後に肯定出来る要素を見出し得た事物のみを真とせよ！」とブタれ、その例として「天皇制をもまずは否定せよ！」と言われ驚いたと。

この最後の件りには私もそれこそ脳天をハンマーで殴られた様な衝撃を受けた。―昭和二十年四月の時点で天皇制を否定すると言う発言の大きさ、重さ、はゲートル协会会员諸賢には十分にご理解頂ける事と思う。―そしてこのあたりが世上第一高等学校を「第一級の高等学校」と評価する所以なるかなと感じ入った次第。

(三) 昭和二十年五月某日、中学は卒業したのに次に進むべき学校からは入学の指示が来ず、依然として勤労働員に明け暮れる日々嫌気が差し、一年先輩の打木氏の誘いに乗り、土曜を一日サボって吾野の岩田氏（打木氏と同学年）宅を根城に奥武蔵の山野で浩然の気を養う事とし、三者飯能駅で落合ったうえ吾野へ向った。

当時外出時は「ゲートル着用」を厳命されていたが、今日は人目の無い吾野の山へ出掛けるのだからと三人ともゲートルは省略、吾野駅で下車して人通りの無い吾野宿の街並みを抜けて高山不動尊隣の岩田氏宅へと急いだ。

すると前方から一目で夫と分る「出征兵士を送る一団」が現れた。ご苦勞様な事だと思いつつ近づくと、あろう事か出征兵士は国民服に氏名を記した白い襷を掛け、ゲートルを巻いた我が「横田先生」では無いか！

我々三人は仕事をサボッタと言う負い目から声を發する事も出来ずその場に立ち止まり敬礼して先生を見送る。先生は我々を認めて近寄つて来られ、「行つて来ます」の一言を残されて一行と共に吾野駅へ向われた。

せめてゲートルでも巻いていれば「岩田さん宅の山仕事の手伝いに……」位の言い逃れは出来ただろうが、ノーゲートルではサボリはバレバレ。互に顔を見合せ、異口同音に呟いた。「悪い事は出来ないもんだ。」

一晩明ければ昨日の悪夢？も何処へやら好天のもと裏山の関八州の展望台へと繰り出した。展望台から見下す関東平野はうららかに晴れ上り、春霞のため海岸線はやや霞んでいたが絶好のハイキング日和、一汗かいた額をなでる風は誠に心地良く、鶯の谷渡りが戦局を忘れさせてくれ、一時の安寧をもたらしてくれる。

とその時である。「おい、ありゃあ空襲じゃあねえか！」と言う岩田氏の声にはるか南方の海岸線に目を凝らすと一か所白煙が上っており、その上空を豆粒程の飛行機らしい物体

が、キラリキラリと春の陽光を反射しつつ旋回している。この時期になると日本の近海に米空母が出没し、沿岸の都市は艦載機による空襲を受ける様になっていた。「ああまたやられてゐるな。何処だろうか。」と一行は大して気にも止めず展望台を下り始めた。

春の陽光を浴び、野鳥と鶯の鳴き声に送られて鼻歌まじりに茅戸を下って行く。とその時である。「バリバリっ」と言う機銃の発射音と同時に頭上をグワーンと急上昇する飛行機の爆音。トッサに三人は脱兎の如くに前方の杉木立の中に走り込み、下草の上にガバと倒れ込む。息を殺すこと数分。飛行機の爆音はそれっきり。三人は恐る恐る顔を見合せ、お互いの無事を確認、立ち上って一息つく。

恐らく南方の某都市（後刻横浜市と判明）を空襲した敵機のうちの一機が吾野上空に飛来、我々を発見して機銃を発したものだろう。何れにしても三人とも無事で何よりとヒンヤリした杉木立の下の小径を岩田氏宅へと急いだ。

そんな訳で我々の休養プランは「往復ビンタ」を喰う格好となり、浩然の気どころか何とも意気の上らぬ結果に終始してしまった。悪い事は出来ないもんだ！

古行李の中から出て来たこの使いふるしたゲートルは私にとっては青春時代の汗と思ひ

出の詰った言わば分身とも言える代物だが、そんな話を子供達にしても、フーンと生返事をするだけでサツパリ興味を示してくれなかった。そんな訳で例えこのゲートルを母の様に大事に保管して置いてもその後の運命は言わずと知れたもの。私の分身は私限りとし、私の手で処分してやるほかはあるまい。さあて、どんな形で幕を引いてやろうか。

初めてのあいがり間刈

関 谷 昭

「金鶏輝く日本の」で始まる紀元二六〇〇年の歌、今でも耳の奥に残っている。日支事変が拡大し大陸へ大陸へと進む日の丸。昭和十五年十一月十日、小生小学校六年生。その式典が日本全国で開かれ、その時に制定された戦闘帽に国民服、その姿で十六年四月に川中へ入学をした。その一年生の時は丁組であった。甲乙丙丁の四クラス。朝礼は剣道場の下見に取りつけてあるスピーカーから流れる軍国調のメロデーに乗って全校生が校庭に並ぶ。我々一年生だけが国民服、二・三・四・五年生は霜降りの学生服に黒の帽子、一度

でいいから我々も被つてみたかった。そうこうしているうちあの十二月八日が来た。それから日本は大国を相手にしての戦争となった。

十七年の夏（二年生）は名栗の柏木眞八氏の要請で川中生八十名位が飯能駅から無蓋のトラックで名栗の中央小学校へ。二教室に分かれての雑魚寝、村の婦人会のおばさん達の作つてくれた日の丸弁当を腰に、今日は伊豆ヶ岳の中腹、明日は有馬の山へと、五・六人一組で山の間刈り。真夏のジリジリした太陽の下での仕事、五尺位の柄の先についた鎌で下刈りをする毎日。首に山蛭が吸いついたり、時には蜂の巣にふれて蜂の空襲を受けるなど大変な作業だった。

名栗の奥の白岩山から掘った石灰石を、ゴンドラの中に入れて吾野駅の集積所まで運ぶ作業を下から見上げる。櫓の上で廻る滑車へグリスをつけにくる作業員が、ゴンドラの中から櫓に出ている竹竿にヒョイと飛びつき、腰についた缶から滑車へグリスをつけ終ると空のゴンドラにのつて次の櫓へ移る猿のような作業を見あげながらの小休止。今思うとなつかしい光景である。作業が終り宿舎の小学校へ帰る時軍歌を歌わされ、佐々木太郎先生が引率の時など「中村真太郎行くては暗き興安嶺」の「太郎」を特に大きく歌ったなどなつかしい夏の勤労働員の一コマである。

秋が過ぎ次第に戦争の拡大と共に日本が苦しい戦いを強いられるようになった。勉強よりも学徒動員の命が降り我々は四年生中頃より朝霞の被服廠への動員となった。

回想茶話

細田久夫

最近、急激に記憶力が落ちてきたようである。しかし、青年期までの記憶は極めて鮮明である。出来事の経緯やかかわった人のようす、周囲の情景や感情などまでも、それは正に昨日のこのように思い出される。

しかし、詳細に吟味してみると、確かさを信じていた記憶も、思い込み、美化、混同、省略、転移などによる、極めてあいまいな記憶が少なからずある。しかも、その中には死と直面しての体験さえ含まれている。

それらの記憶の中から、他のかたにご迷惑をおかけしない範囲で、「私はこのように記憶している」ことがらを選んだが、多少のことは、年寄りの茶話としてご容赦願いたい。

【ウラジロ物語】

どうか学校に慣れてきた一学期の中ごろのことである。理科の時間に、「人間地方には、ウラジロというシダは見られない。」と松本先生がおっしゃった。不審に思ったので恐る恐る手を挙げ、「高麗にはたくさん生えている所があります。」と発言したことから、次の日曜日に、先生をその場所へお連れする羽目になった。ちなみに、進んで授業中に手を挙げたのは、入学以来これが初めてである。

高麗小学校前のバス停で先生をお迎えし、日和田山の男坂への山道をたどり、問題の場所にご案内した。

子どもの背丈ほどもあるウラジロの群生をご覧になった先生は、「まだ学会に報告されていない。これを私が報告してもかまわないかね。」とお聞きになったので、「この辺の人たちはみんな知っていて、お正月用に採って行きます。ここだけでなく、梅原山にも有りますから、別にかまわないと思います。」などと、何とも無責任なことを答えた。

それがどうなったかは知る由もないが、私は博物の勉強が好きになり、その先生から大変よい点をいただいていたのは確かである。

【武器庫での誤解】

二年生の夏休みが近づいたころ、柔道部の練習帰りに外から武器庫を覗いたら、なぜか入口が開いていて、人の気配は全く感じられなかった。仲間と二人でそと中に入っていると、太い白木の角材で造った保管場所に、三八式歩兵銃がずらりと並んでいた。

二人のどちらからともなく銃を手にして、自分で号令を掛けながら、担いだり撃つ構えをしたりして遊んでいたが、銃身の汚れが気になったので、近くにあった布できれいにふいた。ほかにも汚れた銃が何丁か目だったので、ついでにそれらも布でふきだした。

しばらくして、二人の教官が入口でこちらを見ているのに気づいた。途中でやめるわけにもいかないで続けていると、名札を見て記録し、もう遅いから帰るようにいわれた。

武器庫を出た二人は、意外にも叱られずに済んだことを喜び合いながら駈け去った。

その翌日、朝礼の最後に二人が呼び出されて、全校生徒の前に立たされた。間違いないくお仕置きだと思い、もうだめだと観念していたら、教官から模範的行為だと紹介され、大変なお褒めをいただいた。その後しばらくの間は、気がとがめて小さくなっていった。

このことがあってから、教練の成績がいつも最高点だったのは、この誤解のお陰だと考えると、なんとも複雑な心境だった。

【横志飛第三四八三五号余録】

これは、私の海軍兵籍番号である。昭和十九年六月一日から、敗戦によって現役満期になる昭和二十年九月二十日まで、この兵籍番号は私の全人格を代表する固有記号である。

私が海軍甲種飛行予科練習生に出願した経緯はいまだに不明であるが、現在では、受け継いだ遺伝子によって、武士道に駆られた選択だと自分を納得させている。

当時、ある生徒は、父親の立場をおもんばかって、自分の志望を断念して出願したという風評を耳にした。

予科の教育が修了間近になったころ、分隊長室に呼ばれ、他の教育機関への推薦を受けた。そのため、推薦書に添付する出身学校の卒業証明書、または卒業見込み証明書が必要になった。早速、隊の事務部から学校に請求してもらったところ、いずれの証明書も発行できないということであった。

昭和二十年三月に、学校に残っている仲間たちの卒業と一緒に、私たちも卒業扱いが受けられると聞いたのは、国運に殉じようと意気込んだ少年の幻覚だったのだろうか。そのとき、戦死した場合のことをふと考えた。

【有情無情】

終戦直後の最も強烈な精神的打撃は、復員で帰郷する電車の中で、軍国主義のお先棒担ぎだと非難されたこと。世の中の人々が一斉に民主主義の信奉者になったこと。自暴自棄から反社会的行動に走った仲間たちが、「予科練くずれ」と侮辱されたことである。

当時は、道端の犬までも「裏切り者」「ひきよう者」の仲間に見えた。

短期間復学して補習し、昭和二十一年三月二十五日付けの卒業証書を頂くことができたが、復学にご尽力下さったかたがたに対する感謝の念は今も変わらない。

復学した私たちをお世話して下さった松田先生に、どこにもやり場のないうつぶんを聞いていただいたとき、混乱の時代を生きた先人の例を引用なさりながら、「私は、古書・古典に英知を学びたい。」とお話し下さった。

補習組の人たちも、最初のころは不平不満や厭世的な話題が多かったが、そのうちに将来の抱負や夢を語り合うようになった。

その後の私にとって、松田先生のお話と、幾つか年齢差のある補習組の人たちとの語り合いは、精神的立ち直りや人生の指針を定める上で、極めて重要な意義を持っている。

半世紀以上もたった今、こんな話ができる仲間の中に自分は生きている。その幸せに浸りながらしみじみと回想している。

思　い　出

町　田　成　夫

昭和十六年三月の始め、高萩小学六年の卒業を間近に控えて進学の喜びに胸を膨らませていた放課後、六年生担任の森田豊先生から四月からの進学の決った者に、君達は戦争の影響で修学旅行にも行けなかったので、今度の日曜日に日和田山に行くから皆自転車で学校に集まれとの話があった。

その時高萩小から進学の決っていた生徒は川越中二、川越商二、川越農二、豊岡実五、飯能実五の合計十六人と記憶するが、皆喜んで参加した。当時森田先生の友人が高麗小にいたので高麗小に自転車を置き、その先生の案内で日和田山に登り、山頂から遙か所沢や川越方面を眺望し、更に峰づたいに物見山まで行き、山頂で車座になり弁当を食べ終った時、先生が進学したら何をやりたいか話してみると言われた。

当時の中等学校では剣道と柔道のどちらかを選択して正課として受けることになってい

たので、ほとんどの者がそのどちらかを選んだ。私も兄が剣道をしていたので剣道をやり
ますと答えたところが先生はお前は陸上競技部に入ってみると言われ大変驚いた。

小学五年と六年の時飯能一小校庭での飯能地方の運動会では優勝したが、田舎者の私は
中学校に陸上競技部があることさえ全然知らなかったのだ。そんなことがあり四月の入学
式も終り幾日かたった後、同じ通学バスで通う高麗川からの加藤君と二人でおそろるおそろ
陸上競技部室に行き入部の希望を申し出ると、「よし」と言われその日から練習に参加する
こととなった。

当時の川中には上級生に高跳びの西郊さん、短距離の沼田さんなどがおり、同級生では
私と前記の加藤君のほか飯野君、小川君、吉田君、関根君、谷口君、根本君、佐野君（途
中退部）などであった。練習は放課後約二時間、先輩たちの後についてトラック十周のジ
ョッギングの後百米を十回位流し、次いでスタート練習、その後は専門種目の練習となり、
最後にトラック五周のジョッギングで終るのが日課だったが、当時の部長先生はスパルタ
教育で有名な秋山先生だったので、先生の出で来られた日は先輩達も緊張し平常の二倍ぐ
らいの練習量になるのが常だった。然し一、二年生の時は大会への出場機会はなくひたす
ら練習に明け暮れるのみだった。

三年生となり、秋の県下中等学校陸上競技大会が大宮競技場で開催され、中学生として初めての大会出場が決ったが、戦時中のためスパイクは禁止、しかもタイムレースで決勝戦はなく順位を決めるという大会だった。幸いにして百米を十二秒八のトップで通過し、三位に入賞することが出来た。四年生になった時先輩から「吾々は勤労働員で練習も出来ないでお前がキャプテンとして引っ張って行け」と言われ責任の重さを感じたが、間もなく吾々にも勤労働員の令が下り私の中学での陸上競技生活は終りとなった。

昭和二十年四月法大に入學し、八月十五日の終戦は群馬の山の中で知り、十月から学校が再開された時、中学時代消化不良で終った陸上競技が大学でも通じるかどうか試して見たいと思い陸上競技部に入部したが、法大の競技場は食料増産のための畑になっており使用出来ず、他の学校の運動場や大宮公園の競技場を借りる始末だった。昭和二十三年頃からやっと自校の競技場が使えるようになり、幸いにして二十四年からは学生も出身県から国体に出られるようになり、二十四年の国体予選に四百米の県記録で勝ち第四回東京国体に出場することが出来、二十五年の国体予選にも自己の県記録を更新して優勝し第五回愛知国体に出場することが出来たほか、全日本学生、全日本選手権大会等にも出場することが出来、最終年はキャプテンもつとめ、昭和二十六年三月卒業とともに私なりの悔いの無

い競技生活を終わることが出来た。森田先生のご期待に応えることが出来たかどうかは疑問だが、その間に指導下さった多くの方々、応援して下さい下さった方々に感謝申し上げたい。

主として稻荷山公園通りの思い出

(旧姓 犬竹)

山 影 裕 昭

二回も催促くって大周章で起承転結を考える文才も余裕もなくメ切りに間に合うか、あと一週間。取り敢えず始める。

入学の年に太平洋戦争（大東亜戦争）が勃発、終戦で中学も終り。戦闘帽とゲートルで始まって終ったからゲートル会員として全く適格である。

昭和十六年一月末に豊橋の小学校より加治小学校六年に編入、在校二か月弱で川中へ。

この年度から入試は学科が無くなり口頭試問と小学校の内申書如何に変わった。また服装も緑色の制服・戦闘帽・ゲートル着用となり、終戦間際の召集兵より余程ましな兵隊らしく見えた。しかし三年もたつと衣・食・教科書・教科などは学業とは言えない状況となっ

てきた。言い尽された事だから止める。

とにかく限界状況の毎日となり、五十年も過ぎると人も年月も不確実と忘却の彼方となる。でも幾つか羅列してみる。

毎朝の矢嵐から駅まで（昔の道）の上り下りの駆足は足を強くした。駅までの道の半分は駅の裏側（今の南口）から枕木の柵を摺り抜け「車掌さん待ってくれえー」とホームを攀じ上ってドアをしめる（自動ではなかった）。ホームまで二〇〇米足らずの滝沢先輩（五年生）は殆んど裏口から車内に飛びこんで、坐ってやおらゲートルを巻くのが常であった。上級生はいいなあと眺めていた。（なぜかわかりでしょう。）

小学生の時、短距離はちよつと速かった。一番になったことはないが毎朝の駅までの走りに脚力がついたらしく川中での毎年十キロマラソンは上位三分の一あたりにいた。

入学後の体力検定（投・走・泳だったか？）を陸上部の誰かが見ていたらしく、当然か、陸上部室へ出頭命令。あの薄暗い部室に参上する。部長らしいのが入部を強要。陸上は慣れていない、剣道部に入る（剣道は小学校からやっていた）からと拒否。我が生涯で我意を徹した珍しい例である。この強要した上級生は四一回の故土屋亮晃さん（数年前歿）で、戦後は坂戸市多和目の真言宗の寺の住職、川高の野球、陸上を指導していた頃、私も飯高

の教員で久し張りに会ってあの時の「脅し」の話をしたらもう勘弁しろと笑い合った。富士見高校の校長を定年を残して奥さんの看病の為に退職された。間もなく亡くなられたが奥さんはご健在と聞いた。

最近発刊の同窓会名簿運動部の項を見ていたら陸上と剣道の両方に私の名があった。二股かけていないし、陸上は断つたのになぜ名がのつたのか。もう土屋さんにも聞けない。私の思い出の中心は稲荷山公園駅から入間川駅（現狭山市駅―以下二駅間とする）がそれとなる。

一つ上の一井さんは二駅間をよく走っていた。一つ前の電車に間に合ったからである。私は自発的に走ったことはない。タマに仲間と走った。一つ前に乗るよりは靴の破損を恐れた。替りがないから。そんな時代だった。

走る事を多く書いたが、それと因果関係があったのか教員時代に陸上部顧問、時にはフールド競技の審判に狩り出された事もあった。

そして今は駒沢大学（出身校、曹洞宗立大学）の陸上競技部後援会を組織して十二年、やっと箱根で芽が出るようになった。

入間川駅から本川越行に乗る。（当時朝夕ラッシュ時二輛連結、以外は一輛―会社も貧乏

だつたらしい) 川中生等の男子生徒は前、川越高女生等の女子生徒は後の車輛のきまり。川越行には川中・農・工・商業の生徒がみんなのからぎゆう詰であつた。最後部はいつもポツカリ空間があつた。(前後車輛の連絡通路はなかつた。) そこに一つ上の川中生が腕組みして睨んでいる。誰も近寄らなかつた。他校生にもおつかないのがいたが彼らも寄りつかなかつた。戦後、私が駒沢大学に通い始めたら何とこの先輩がいるではないか、恐る恐るご挨拶するとニヤリ。それでも昔の記憶は消せない。その後毎年数回顔を合せるようになり、ついこの間、ある寺のお施餓鬼法要で会つたのでこの件を書きますよと申しあげたら勝手にしろとの由。この人は所沢の長源寺住職の松永さんである。

入学早々の頃、航空士官学校の土手で花を指さし「ああこれはきないだなあ」周囲の同級生は一斉に「なんの事だそれ」。飯能では「きない来ない」。三河弁ではきないは黄色。黄色い花とだけのこと。私は今でも純粹の飯能弁も三河弁もしゃべれない。この事は時には不利になることもある。

入間川ゴム工場近くを歩いていた時、亡き富沢淳一郎君がべつと吐いた痰が折からの北風に煽られて山岸悦二君の胸にベタ。(今となるとどっちだったか忘れてる) 当然のように喧嘩となつた。結末は覚えがない。

思い出より強い思い入れとなったのは航空士官学校生徒の飛行訓練である。尤も我々が見ていたのは狭山、高萩、坂戸の三分教場で基礎飛行訓練（いわゆる赤トンボで）が終つて本校での実戦機訓練を見ていたわけである。

坂戸飛行場では川中生のグライダー訓練が行われた。私も一、二回飛んでおつかない思いをした。教官（海北配属将校？）は立場上無理して高く飛んで降下時は失速状態でガクンガクンと階段を下りるようであった。みんながあれは巧いのか下手なのかと評し合った。

その時誰かがエロ草紙を家から持ち出してきて格納庫の陰でみんなで覗きこんでいた。私は初めて目にしたもので見たいような見たくないような何となくキョロついていた。

二駅間の通学は健常な限り徒歩（バスはなかった）である。約二キロをテクるのは夏よりも高台を吹き抜ける冬の空っ風が辛かった。手袋、ポケット手入れ禁止だから。

一度だけ所沢まわりをした。背中に大きい腫物をつくり背囊が当って痛い、微熱もあつて歩行困難となったからである。体操の時間に見学を申し出たら「よし見せろ」と秋山先生。みんなの前で背中を捲る。「ウーン、これはでかい」と許可になった。

二駅間の歩きはじめはバラバラであったが、戦局急を告げる頃にはより川中生らしく上級生指揮のもと隊列行進となった。そこへご出勤の航士校長遠藤三郎中将や後任の菅原

道大中将の車が将官旗(黄色)を付けて通りかかると「頭あ右―かしらみぎ」と声がかかった。菅原中将の事は戦中は敬礼した程度の知識だったが戦後は名誉市民、簡素生活であったことでご存知の方も多いだろうが、私がいろいろ知るようになったのは近々十数年前からである。

陸士五十七期は実戦に出た最後の将校であり、最も犠牲が多かったのもこの期の航士卒の士官であった。同期最初の死者(殉職第一号)は大河原山中に落下傘降下未開事故で死んだ佐藤力少尉である。二百六十余頁の鎮魂録が遺されている。(昭和十九年十月発刊)そこに校長菅原中将の弔辞が載せてある。これを見てから菅原道大という将官に興味をもつようになった。この一連の事は数年前の新聞でご記憶の方もあろうかと思う。このお二人の遺品は入間基地内の修武台(昭和天皇命名)記念館に納められている。

佐藤少尉のご遺族(姉、妹)とは今でも交流がある。菅原中将のご子息は飯高定時制教員を二十八年から三十年まで勤められていた。

その時一緒だった坂元先生はこの七月に宮崎から三十年ぶりに来飯されて思い出話に夕飯一刻を過した。

私にとって戦後はまだ終わっていないようである。

青天の輝き

山岸悦二

「校舎は古びれたれども、歴史と伝統の輝きは燦然。幾多の逸材を輩出し……」と、誇り満載の文言が脳裡に甦る。もう、遠い昔のことゆえ、新聞の学校紹介記事であったか、校内掲示の入学を祝う檄文であったかはその記憶は定かでない。

昭和十六年四月、憧れの白線帽をかぶって川中生となる。胸奥は希望にふくらんでいた。私もその逸材たらんとして。しかし、現実はさにあらず、実に厳しいものであった。並みいる面々は、赫々たる学業の功績を示す秀才ぞろい。こちらの健気な奮闘や努力も、空振りに終わることが多く、残念ながら、牛後に甘んじ、後塵を拝するのみであった。

忘れもしない愚事を三つ。

植物の写生の時間であった。校庭に散らばって絵筆をふるう。絵画は得手の分野であった。作品は我ながら上出来。得意満面にて先生のもとへ走る。しかし、「何だ、これは、描

き直し」の酷評。「どこが、どうすれば」を発問して指導を望めばよかったのに、全く予期しない言葉に辟易し、尾を巻いての後退。今にして想えば、悔悟の極みであった。

それから数十年を経た定年間の爆発的な画作へのほとばしりは何と評したらよいか。あの愚事の汚点、それに憤懣を、一挙に払拭、解消するための企てであったのか。

油絵第一号作品は、最終勤務校の校長室に掲額されている。それから、「水墨画」「はがき絵」と趣向の手が伸びていった。すべて、二流の域を超えることはできないが。いずれ、「加治百景」を手がける所存でいる。

教練のときであった。「歩調とれ」の号令で隊伍が足音高く堂々の行進となる。朝礼台上で指揮をとっていた教官が一直線に飛んで来た。顔は鬼瓦のようであった。「誰か、しくじったのか」と思ったとたん、「コラッ」の罵声。そして、指揮棒でピシャッ。腿に一発。堪え難い屈辱であった。足あげの形が、余程異常なのかと、その後もずうっと気にしたものだった。教官としては、「国民皆兵」の時代の要請に応えた当然の一挙であったに違いないが、惨めさを超え腹立たしい想いを増幅させたものだった。「軍人勅諭」や「戦陣訓」を覚えなかったのは、その反撥か。(怠惰かも。)

しかし、このことが、予科練行きを断念する要因の一つになったのだ。とすれば、行方

定めた運命の一閃。醜の御楯として殉ずることを急がずに済ませたことになり、幸いと言うべきであったか。

時代の趨勢が、反転したからいいようなものの、さもなくば、「意気地無しノ異端児」として後世まで、世の誹謗を受けるところであった。

英語の時間。指名を受けた級友の語訳の最中。文中のアバウトの語句に一寸逡巡。咄嗟に座席より立ち上がって、「ジャツカン」（水中への飛び込み＝飯能方言か）をする真似をしてしまったのだ。このアドバイスが、教師の目にとまり、えらい叱責に及んだ。キツネの格好に見えバカにされたと思われたのだろうか、授業妨害と判断されたのか、何やら流暢な英語で一くさり、最後に、日本語で、「お前は、将来碌なものにならない」と結んで、廊下に立たされてしまった。茶目っ気が徒になった一幕。

休み時間になっても許してもらえず、醜態の大恥をさらしてしまった。心中に「碌なものになるか、ならないか見てろ」と、意を高ぶらせたが、犬の遠吠えであったようだ。

幸いにも、朗を楽しむ性格ゆえ、苦境に立たされても、いずれどうにかなるだろうと、樂觀的に振舞ってはいたものの、成行きが、胸奥に描いた夢とはほど遠い現実との遭遇に心晴れぬ日も。学び舎の象徴であった楠の緑陰に身を寄せて安らぎのひとときを得、心の

憂さを癒やしたこともあった。見上げた樹間に青天の輝きが目に沁みたのを覚えている。

戦時色は日毎に緊迫の様相を呈し、息苦しい時の流れにあえぎつつ、繰り上げ卒業（若人の臨戦体制速成）という幕切れで中学校を終えた。低迷の域を脱却せぬままに。

でも、一縷の望みは、上級校への狭き門を突破できたことであつた。これは、歴史と伝統の燦たる母校の風格のお陰かと拝謝している。

ある夏のこと。母校を訪れる機会を得たので校内を一巡した。校庭にしつらえたベンチに身を寄せて、球児の練習を見ながら、あれこれ往時を回想した。時の経過は、厭な出来事も懐しい一齣に変えてしまうから不思議だ。

広い校域に往時を偲べるものは、あの楠のみであつた。大抱えに育つた巨幹が天空に伸び、その緑陰は、遠き日の情景を甦らせて感ひとしおであつた。

翌日のこと、前山への散策の折、小径のかたわらで楠をみつけた。まだ、生育して一年ほどのものだ。ひき抜いて持ち帰り、庭の片隅に移植した。

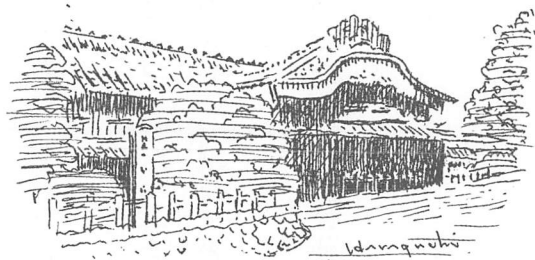
それが今、背丈を超えるほどの高さになっている。大樹に育って欲しいものだ。

新しい世紀の風波が、もう、そこまで来ている。望んだ青天の輝きを伴って。

人生まだまだ。

飯能市を支える人たち

〈活躍する議会人〉



第三章 火工廠の青春

— 中四十五・六回 —



初雁健児ここにあり
〈天覧山にて〉



校歌ならまかせておけ…



はて？ 誰だろう…

中学生時代に思う

鈴木 浩

中学生時代を今懐かしく思い出しておりますが何分にも半世紀前のことであり、当時の資料は何もなく、多くを忘れ、記憶も定かではないのですが何かと思ひ出して綴ってみたと思います。しかし記述に私の錯覚が多いかと思ひますがお許し下さい。

私は旧制中学四十五回の卒業、当時は五年制でしたので昭和十七年より二十二年までの中学校生活でした。当時は日本にとって戦争そして敗戦という歴史上最悪の出来事のため世の中が全く混沌とした暗黒時代でした。

小学校六年生の十二月に第二次世界大戦が始まり、その四ヶ月後が中学校生活の始まりでまだ戦況はなばなく日本中喜びに沸返っていた時です。私達も脚にゲートルを巻き、戦闘帽をかぶり、背のうを背負い毎日通学していました。

学校生活は勿論今日のような充実した学習環境ではなく、学校生活も当然軍事色が濃く

教練や長距離行軍などが取り入れられ、今は厭な思い出となりました。

一年生半ば程より、アメリカの猛反撃により戦況は日増しに暗雲がただよい、私達も次第に学校生活を離れ、農家への奉仕活動、日清製粉工場での粉袋運搬、更には坂戸飛行場での飛行機格納のための土手づくり、そして三年生の二期頃からだったろうか遂に「勤労動員令」が下り最悪の時代へと突入したのでした。(昭和十九年八月二十三日飯能市では学徒動労令が公布され各学校では各事業所に生徒が動員される：飯能市史より)

私達の学年の動員先は上福岡にあった火工廠でした。火薬を使用した武器の心臓部の製造工場だったので。

その一つは「風船爆弾」でした。そしてもう一つは飛行機や戦車の破壊に使われたという「破こう爆雷」であつたようです。

風船爆弾を一万発製造し、茨城県附近より対流圏まで打ち上げ、対流圏の偏西風にのせてアメリカ本土まで飛ばすとの構想だったので。戦後雑誌ネイチャーにその記事が掲載されていましたが、何発打ち上げられたのかは不明ですが実際には一発のみがアメリカ本土の山に落下し、山火事を起こしたに過ぎなかつたようです。

こうした常に危険の伴う職場での作業故に残念ながら同窓生にも多大な犠牲者が出たの

です。尊い命を失った生田氏、プレスで指を押し潰した川島氏、又私と同じ職場で電気雷管（直径一・五cm、長さ十二cm位の管に火薬をつめ導火線を取りつけたもの）の不良品の手直し作業中左手に握っていた電気雷管が暴発し、手首から先を吹き飛ばされ、僅かに皮の部分のみが残されていた高篠氏。たまたま私達は遅番だったので部屋に着いたのは事故の直後でした。部屋中に飛び散った肉片などの処理にあたった事が思い出されます。何ともいまいましい痛ましい事故でした。その外にも乾燥していた火薬の一部を小鉢に移す作業中摩擦で発火し、顔など大火傷をした後輩（確か赤星氏）など。

しかし当時は何よりも全力で働く事が私達に課せられた使命だったので。

よく働いた人は大勢の前で表彰され、他の人がハツパをかけられたのです。表彰された人には勿論賞状などではなく、「一杯のうどん」が与えられたのです。

そして、いよいよ一年生後半頃より日毎に情勢は悪化し、遂に硫黄島全滅(昭二十・二)、沖繩本土に上陸・占領(昭二十・四〜六)を最後に本土への空爆も益々本格化し、激しさを増し、本土決戦まで叫ばれるようになりました。職場でも防空壕に飛び込む回数が多くなりました。かくして八月六日、九日の広島、長崎への原爆投下が決め手となり八月十五日終戦を迎えたのでした。職場ではただただ茫然とするのみでした。

かくして再び学校生活に戻る事になったものの時すでに四年生の半ば、敗戦により暗黒の中に放り出され、これから今までの空白をどう取り戻せばよいのか全く途方に暮れ、ただただ慌てるのみでした。

さて、先日テレビで知ったのですが、風景の求道家東山魁夷が描いた「道」と言う絵は、雑草のおい茂る舗装されていない一本の道で、こぼこ道の荒野で、絵心のない私などいささか平凡な絵に思えました。しかしこの絵には、戦後道を失った人々の心の風景「絶望と希望」の道をイメージし、絶望を捨て、希望の道を求めて荒野を力強く前進して欲しいとの切実な願いが込められていたのだそうです。

今思えば戦後の動揺していた私達への力強い示唆の絵だったのです。

しかし、この頃の私達の心の動揺は激しくこの苛立ちがなした技だろうか、いささか横道にそれた幾つかのハプニングもあった。

火工廠内の火薬庫を囲む土手の中でタバコを吸ったというK氏。火工廠内から持出した電気雷管を砂とびんに詰め、爆発させて魚を捕ったというI氏。学校帰りの稻荷山公園で進駐して来たばかりの米兵守衛にタバコの火をもらいに行き、いきなり銃を構えられ思わず肝を冷やしたI氏、などなど。

さて私達の中学校生活を振り返って見ましたが、確かに茨の道の中学校生活でした。しかし私が知っている範囲内でも同窓生の活躍が目立ちます。

ご存知の元NHK解説委員の岡村和夫氏をはじめ、立教大学で活躍された船戸英夫氏（数年前死去）、母校を含む多くの高校で活躍された方々も多い。前述の高篠氏もその一人でした。

逆境の中、耐え忍び雑草のように力強く這い上がり活躍された同窓生を思うとき、お互いの頑張りに拍手を送りたい。

私達一生には幾多の障害を克服しなければならぬ時があります。私は中学生時代の体験が生きる時があるものとプラス思考で日々を過ごして来たのでした。

悪童

原 口 幸 雄

「オス、今日の敵さんの情報は」東飯能駅に着くなり、俺は級友達に挨拶がわりに、こ

の様な会話をするのが極り文句になっていた。

戦況は三月十日の、本所、深川の上空襲以来、連日の様にB 29は、日本全国に容赦なく爆撃に飛来して来る。八高線も車輛不足のせいか、客車は一輛位しかついておらず、後は屋根付貨物を七・八輛連結して走っている。無論、我々はその貨物車に乗る事が、常識になつてゐる。椅子など無論なく、肥料の匂いが鼻をつく家畜並の待遇である。我々は、学徒動員令に基いて、上福岡の（南古谷駅下車）陸軍直属の火工廠に配属されていた。始めの頃は、学徒には危険作業はさせないと云う訳であつたが、一部の問題学徒数人は（その数人の中に俺は入つている）、何時の間にか、腹に胴布団と云う真綿の厚い前掛を下げさせられて、一寸油断をすると火薬が爆発する様な、超緊張を要求される作業に従事させられていた。故に一たび空襲が来ると、逸早く工場より退避させられていたので、遠方の飯能方面から通勤している我々は、空襲がありそうだと、出勤しなくても良い事になつていた。増島は、「今朝がた、御前崎上空より先鋒のB・29が一機偵察に来て、警戒警報が発令されてゐるよ。」と言う。先触れのある時は、決して上空襲になる確率が高かつた為、皆心配そうに協議に入る。半分は真剣に、半分はチャンス（敵國語は禁句で、使つてはいけぬ事になつてゐる）とばかり、出勤は中止!!と即決してしまつた。

さあこれからが大変、何しろ軍事産業の仕事をサボル訳だから、確実に空襲があるか、及至は鉄道が止まらない限り、言訳が通らない。幸い級友の中に堅物の、級長角田がいるので、或る程度は、先生は信用してくれる。又非常に危険作業に従事している俺がいるので、先生の方も、強い事は言えない状況にあった。それを良い事に、出勤を取り止めるのだから、全員行動しなくてはならない。嫌がる角田を強引に引き込み、一日団体行動をする事にした。皆列車を尻目に取り敢えず、天覧山に向った。

これから空襲があるかも知れぬと云うのに、空は紺碧に澄み、早春の麗らかな太陽が皆を包み、何んとも云えぬ開放感に、皆、喜々としている。戦況は日毎に芳ばしからず、生活物資は極端に窮乏し、特に食料事情は食べ盛りのこの年代には、困り果てていた。しかし未だ未だ精神的には純粹なもので、「我が神国日本は、負けない」「本土決戦に備え、牙をといでいるのだ」「欲しがりません、勝つまでは」「いざ来い、ニミッツ、マッカーサー」等々宣布工作を信じ、負けるなどとは、露思^げっていないなかつた。実に教育（今で云う洗脳）とは、恐しいものだとしみじみ感じている。

しかし全員で、天覧山に登ったと云う事は、何とも言えぬ後ろめたさも有り、反面言い知れぬ開放感があつて、戦争など忘れさせる頗る愉快な一日であつた事は、間違いない。

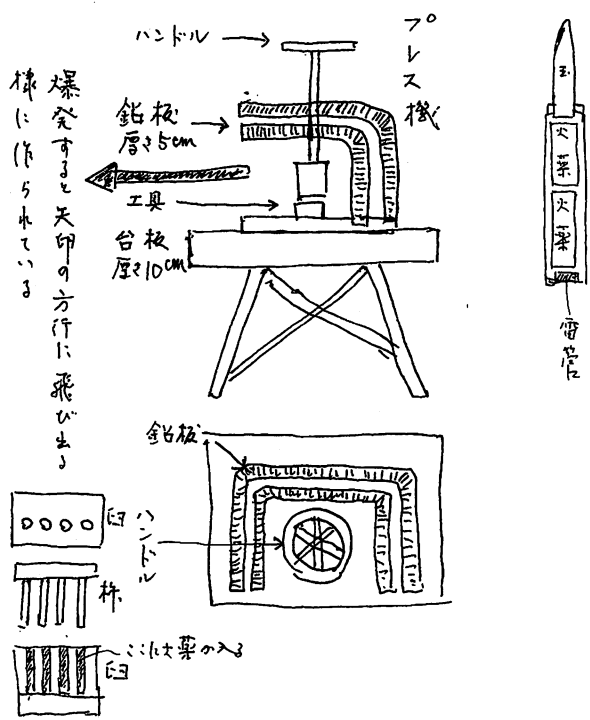
(暴発)

火工廠での作業は、先づ火薬について書かなくてはならない。火薬と云つても、ピンからキリまであつて、液体のもの、粘状のもの、顆粒状のもの、粒状のもの等四種に分かれている。火薬の性質は、ショックや熱に敏感に反応するものと、鈍感で叩いてもある程度熱してもあまり反応しないものに分けられている。何れも圧縮すると、猛烈な威力を発揮する。又敏感な火薬と鈍感な火薬では、その爆発は、敏感なものより鈍感な火薬の方が、一たび反応すると数十倍の爆発威力を発揮する。故に作業は、鈍感な火薬の方は、事故は先づ起こらないので、学徒はその方の作業に従事していた。しかし俺達五・六名の問題児は、従業員との折合が悪く、廻し廻わされて、遂にその工場の最も危険な作業場に派遣されてしまった。所謂、信管の火薬の充填作業と云うやつだ。弾丸の一番底にあるのが雷管で、鉄砲でも拳銃でも機関砲でも、引金を引くと撃芯が外れて、その弾丸の雷管に先づ当り、ショックで発火する。そして次の薬莢の中にある鈍感な火薬に誘発して、玉が飛び出る仕掛になっている。

弾丸の仕組みと作業場の説明を次頁に記す。

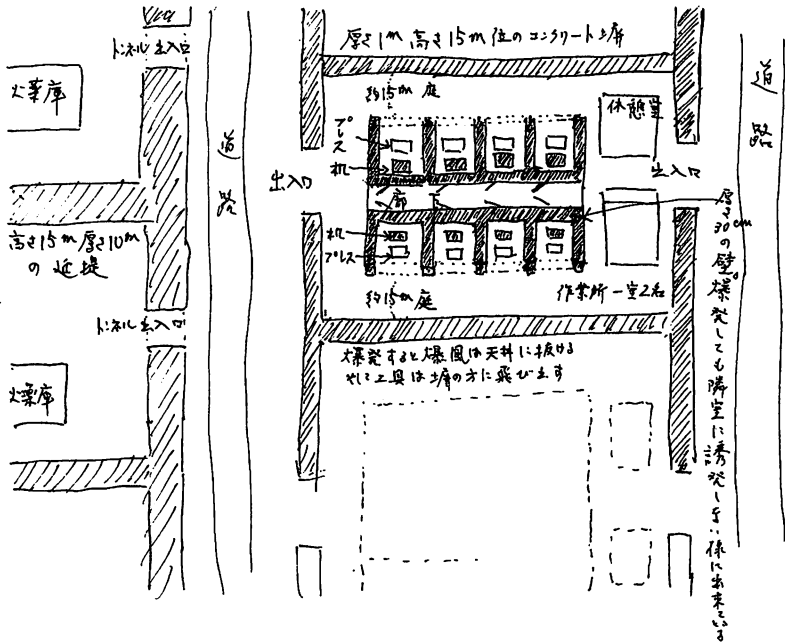
半世紀以上も前の記憶で、正確さはいま一つであるが、忘れる事が出来ない作業である。

何しろ火薬を、コンクリート床に罌粟粒位落し、その上を堅い底の靴で踏んだとすると、先づ足の指は飛び、及至は肉が裂けてしまう威力がある。故に藁草履が支給されて、それを履く事になっている。そして作業中爆発すると、工具は窓側に飛んで行き、人間は鉛の二重の防壁の後に必ず避ける事になつていたので事故は防げる様になつている。しかし工具の出入中に爆発した場合は、完全に手首は飛びバラバラになる。何しろ指一本いくらと補償基準がある位の危険度である。その上更に室の火薬に引火した場合は、その室のみに被害を止めるため天井に爆風が抜ける様に、屋根と天井は簡単なので覆われているだけである。現に一年に一度位の割合で事故があ



り、隣の号屋で二名の死亡事故を目の当りにした。でも、悪い事ばかりではない。作業は生産性は二の次で、先づ事故防止に重点をおき、作業はあまりきつくない。そして夏は冷房、冬は暖房の快適な状況にしてある。現に、作業に慣れた後半は、一日で三日分位の能率を上げて、ノルマ通り納めた後は、天井裏に隠しておいた本を取り出して一日中勉強？又は読書三昧にふける事が出来た。

作業は、敏感な火薬「ライコウ」「チツカ」と云う粉状のもので、一定の量を容器に移して、計量器で掬いゴム状の棒でこいて臼の中にオチ



ヨコを通して入れる。そしてプレスの中に装填して、鉛板の覆いの後に移動してハンドルを廻し乍ら杵を下して行く。そして一定の所で止まる迄圧縮する。次に白の下に圧縮した火薬に、杵を下して型から抜くと云った作業の連続である。しかしその杵と白が長い間出し入れするうちに鋼鉄製なるが故、磁気を帯びて来て入口に一寸吸いつき、そのまま下すと白を削り乍ら杵が入って行く為、火薬が爆発する。俺も一回その様な事故に遭遇し爆発の憂き目に会った事がある。物凄いい音響とともに、工具がカーテンとガラス窓をその儘スポット型通り通過して庭方向に飛び出し、外壁に当って窓下まで跳ね返って来た。「事故だ」とばかり号屋の作業員が皆駆け付けて来た。青くなって、呆然として震え上っている俺達を見て、何事もなかった様に「気を付けてくれよ」と云ったきり散開してしまった。その事は、先生を始め、上級将校には内緒の出来事で片付けられた事は、作業の不手際を内聞にする同志心以上に、些か腹が立った。と同時に情けなく思った。

今考えれば、人と人との出会いは一期一会と云うが、この様な生死を境に、油断と無理は厳禁で慎重を期する作業をさせられた俺にとつて、掛け替えのない経験との出会いが、今までの様々な難しい事に対処出来たのだと思っっている。

思い出二題

宮岡 正治

お説教

一年生の六月末、富沢君（故人）から「明日稲荷山公園へ集れとよ」と言われた。当時飯能方面からの通学者は稲荷山公園駅から入間川駅（現狭山市駅）まで二Kの路を朝夕歩いて通うのが通例だった。二十人くらいはいたろうか、そのうち一年生が一番多かった。

鬼の五年から呼ばれるなんてお説教だ、その他には考えられない。それにしてもお説教される様な悪いことをした覚えは無い。なのに何故殴られるのか。

翌日ビクビクしながら下校時指定の場所へ出掛けた。集まったのはI君（故人）、T君、H君、それと私、その他にまだ誰か居たようだが思い出せない。全部で五、六人だったかな。「何で此処へ呼び出されたんだ」と聞くと直ぐ富沢君が答えた。「あれだよあれ、帰りに此処で休んだ時ゲートルを外したろう、あのことを誰かが告げ口したんだ畜生!!」

ああそうか、やっと思い出した。悪いことをしたという意識は全く無かったので忘れていた。あの時誰かが緩んだゲートルを巻き直すつもりで外したらああ急に楽になった。「あと稲荷山から飯能までの少しの間だけだから、このまま帰ろうか」というと、そうだそうだが、こんなものを足にぐるぐる巻いて暑いし窮屈で仕様が無い、外したまま帰ろうと衆議一決し皆が外したまま帰ったのだ。

待つこと二十分、指定の時刻より遅れて鬼の五年がやって来た。私達一年はサツと立って一斉に敬礼した。M先輩、O先輩、T先輩（何れも故人）その他に二人居たようだったが名前までは失念した。

先ず口火を切ったのはM先輩「お前ら何だ。下校途中でゲートルを外すとは、一年のくせに生意気だ。俺達五年は今までに一度もそんなぞんざいなことはしたことが無いぞ。お前らだらけきってる」との趣旨をながながとチョボくちして捲し立てた。それもその筈同先輩の綽名はチョボくちの「チョボ」だった。そのあとT先輩ともう一人の先輩が同意味のことを喋った。こゝらで鉄拳が飛んでくるなど覚悟したがそれは最後まで無かった。私の家の近所に住むO先輩は最後まで一言も喋らなかつた。

一般に「お説教」とは上級生が下級生に対し何とか難癖を付け、殴ることによって優越

感に耽けることである。但し同じ町とか同じ地域同士であれば、そこには身内意識が働き、匙加減があるようである。

私達も同じ通学班の弟分ということの身内意識の配慮があつて痛い思いをしなくて済んだのだなと思う。

火工廠

戦争も激しくなり、私達三年生も勤労働員ということで学年途中から陸軍造兵廠東京第一製造所川越工場、俗にいう上福岡の火工廠で働くことになった。既に県立高等女学校（現川越女子校）の生徒も此処へ動員されていた。

三年生二二〇人が二乃至五人づつ第一工場、第二工場へ分散配属された。

私は十二ミリ機関砲の信管を取り付ける仕事。二人一組で一人は直径八ミリ程の器へ小さな匙で火薬を一グラム量り、他の一人がこれをプレスにかけて圧縮する作業だった、プレスの前には五〇ミリの厚い鉛板でガードしてあった。

もう仕事にも大分馴れた頃休み時間にちよつと悪戯を試してみた。プレスでこんなに強く固めても撥ねないものが、何故信管を突いたぐらいで弾丸を打ち出せるのかなと。

出来上った信管をドライバーでそっと突いてみたが、こんな弱くては何とも無い。もう少し強く突いてみた。何だこれでも弱いのか、不良品ではあるまいなと思いつながら三回目には相当強く突いた。途端にガーンと大音響と共に火薬の匂いが部屋中に充満した。

「どうしたどうした、怪我は無いか」と作業棟中の者が飛んで来た。

幸い厚さ五〇ミリの鉛のガードがあったので、どこも怪我は無かったが、騒ぎが大きくてそっちの方が驚いた。「プレスの上に置いたドライバーが落ちて下にあつた信管に当たってしまったのです」とその場を取り繕った。

それから一ヶ月程過ぎた頃、同窓の生田君が爆発事故で死亡した。その日は丁度欠席だったので事故の様子は分からない。後になつても具体的なことは分からなかった。箝口令が敷かれたのかも知れない。後日陸軍伍長に任官したと聞いたが死んでしまったのではないかと複雑な気持だ。

その後戦場が変つた。此処での仕事は、直径一センチの導火線を七〇センチに切り、その片側に雷管を糊付する作業だ。

「これは風船爆弾の一部で、これを大きな気球に付け偏西風に乗せてアメリカ本土を爆撃する兵器だ。この風船爆弾でロッキー山脈は大火事になっている。」と聞かされたが、本

当かなこんなもので、と即座には信用できなかった。戦後聞いたところによると途中で撥ねてしまつて破れた風船だけが偏西風に運ばれ幾つか届いたと聞いている。

年が明け、四月から地元の小学六年生（当時は国民学校）までが動員され工場に通つて来ていた。あんな小さな子供まで工場で働かされるようでは日本は勝てないと思つた。そんなこと口には出せないので一人心に仕舞つておく以外になかつた。

案の定夏頃からは艦載機の飛来が激しく、空襲警報が頻繁に発令され、その都度近くの林に逃げ込んだりしてとても仕事にはならなかつた。

そんな時期本省や本廠から視察と称して金筋の多い将校が来ては、雷管で川魚を捕り天麩羅を揚げて酒を飲んでいたとか。今で言う官官接待である。

他言は出来ないが、こんなことではこの戦争は絶対に勝てない、負けるだろうなと思つた。

その後間もなく終戦を迎えることになつた。

私達は学業途中で何のために報われない作業に青春を投じたのか。

未だに残念でならない。

私の戦中、戦後

山 川 健 夫

昭和十九年の中学三年一学期も終り、夏休みとなり毎日水泳にあそびに熱中しておりました。夏休み中も時々登校日があり八月初旬の登校日に学校へ行ったら、八月十五日から勤労動員で上福岡の火工廠へ行く事になったからと担任の小川先生（あだ名カバさん）から話があり、これからは週一回だけ学校へ行けば良いとのことでした。もとより勉強はあまり好きではなかったので内心しめしめと思ったりもしました。しかし火工廠へ行ってみれば、火薬をあつかう仕事なのでかなり危険で、私のクラスでも一人死亡者がでたり、他のクラスでは片腕なくした者もできました。火工廠のことは誰か書いている者がおると思いますので他のことを書いてみます。

当時私達が一ヶ月工場で働くと五拾円の手当がたものです。二拾五円は強制的に貯金させられ二拾五円が手元にきました。しかし買うような物資は何もなく、使いみちはあり

ませんでした。それで休みの空襲のなさそうな日をねらって、東京の御茶の水や神田あたりの運動具屋へ行って、疎開の準備が忙しいので値段なんかあつてないようなので、私に将来野球ができるようになるなんて先見の明があつたわけではありませんが、子供の頃から野球が好きだったので持てるだけ買って帰つたようにおもいます。道具は布でできたプロテクター、マスクからはじまつてファーストミット、バット、ストッキング等を買つて帰りました。(参考までに飯能―池袋間の電車賃は八拾三銭だつたと思います。)

話は前後しますが私は戦前のプロ野球(当時は職業野球)が好きで、小学五年のころから日本放送協会(現NHK)ラジオの第二放送で中継があり、スコアブックをつけながら聞いてあそんだものです。叔父に連れられ後樂園へも見にいきました。二階のスタンドに高射機関砲が備えつけられた時代で、ストライクワンは良し一本といつてました。写真で見の方もおられますが、ユニフォームは着ていましたが帽子は戦闘帽というスタイルです。お客もあの広い後樂園に二三百人位しか入っていません。

よほど好きだったのでしよう。それから間もなく終戦復学ということになり、九月の中旬だったか野球大会が出来るという話がどこからともなくあり、増島君、山川憲男君、私と大宮の関君、川越の名坂君等と練習を始めました。しかし大会は軟式野球で、困つたこ

とに道具がありません(特にバット)。学校にあるのは一億一心なんて刻印のある戦前の硬式のバットが二、三本とノックバットが一本。しかし何が幸いするかわからないもので、ノックバットが軽いので軟式野球にピツタリ、我々の体力も食べもののあまり無い時代ですから重いバットでは振れないのです。私なんか体重が四十キロになったことはありませんでした。

それでも練習をやり、山川憲男君がサウスポーでかなり早い球を投げていたので、かなりのところまでいけるのではないかと内心は思っておりましたが、彼が急に発病し、練習にも学校にも来なくなり困ってしまいました。それで左ききということで急仕立てで関君に投げてもらおうことになりました。ところが案外彼の球が速く、これなら結構いけるといふことで十月の大会にのぞみました。

一回戦は与野農商でこれは楽勝(スコア不明)。二回戦は深谷商業、情報では深商の佐藤君と本庄中学の中田君がピッチャーでは双壁といわれていましたので苦戦と思われていましたが、先取点がとれ、五回か六回に私がスクイズで加点でき、二対〇で勝てましたのでいまでも記憶にのこっています。いまとちがって勝ちすすむと一日に三試合ぐらいは普通でしたので、準決勝となり、熊中と対戦することになりました。二時頃プレイボールだっ

たと思いますが、試合前に野球部長の吾野の横田稲吉先生がふともらした言葉に「これに勝つと帰れなくなってしまうな」といいました。たしかに宿泊する予算なんかいまにして思えばあるわけではないし、帰りの汽車（大飯線）の切符を買うのも大変なのです。試合は二対一で進み、ところが一本しかない軽いバットが折れて、あとはとても振り回せるしろものではない硬式のバットしか残っていません。それでも関君ががんばってタイスコアで進みましたが、何回だったか、レフトを守っていた私の頭上にライナーがとんできました。今では考えられませんが、当時はスパイクはもちろん運動靴もない時代です。私は親戚の農家からゆずってもらった地下足袋をはいて守っていたのですが、守備位置の足もとが悪くそれですべってころんで頭上を抜かれ、それが決勝点になり二対一で負けてしまいました。帰りに横田先生になかなか芸がこまかいなど変なほめられかたをされたのを今でもおぼえております。

あまり長くなりますので硬式大会なんかの話はまたの機会に、この辺でペンをおきます。

戦闘帽の一年生

増島 成郎

紺の上着に半ズボン、坊主頭の一人の少年がはるばる飯能から西武線に乗って本川越駅に降り立った。

憧れの県立川中へ入学を志して小学校の先生に引率されてやってきたのだ。

時は太平洋戦争が勃発して数カ月たった昭和十七年の三月始めのことだった。

駅を降りると数段のコンクリート階段があり、その下には舗装された広い駅前広場がありそこには一段高くなっているバス停が目についた。その先には道の両側に歩道のついた幅広い通りがはるか遠くまでつづき、回りにはいろいろな商店が立ち並ぶ市街地を見て、天覧山と飯能河原を遊び場として育った者にはただ驚くばかり。

これが今でも記憶に残っている川越の印象である。その他のことは何も記憶にない。

また、その日が昭和十七年三月七日であったことは後になって知ったことで、同期の同

窓会名簿に添付されていた「昭和十七年度入學志願者心得」を見てそこに「入學の選抜は三月七日（土）より同十日（火）に至る四日間の中に本校に於て行ふ、志願者は午前八時三十分迄に出校すべし。考查第一日（三月七日）は志願者全部出頭すべし、この日缺席せる者は受考查資格を失ふものとする。」（原文のまま）とあるので考查第一日目の三月七日のことであったと思料される。

考查の内容は殆んど覚えていないが、唯一、太った口ひげを生じた先生（浅野光良先生）がにこにこしながら軍用機の模型を指しながら多分飛行機の名前でも質問したんだろうと思うが、その先生の印象と模型飛行機だけが鮮明に記憶に残っている。

合格発表は、前述の「志願者心得」によると三月十二日三時とあるが、どのような発表の状況であったのか記憶はない。

入学式は、これも前述の「志願者心得」によると「入学式は昭和十七年四月六日午後一時より入学式挙行につき必ず父兄保護者同道にて出頭すべし、若し当日不参の者は入學を許可せざる事あるべし」とあるがどのような入学式であったか記憶は定かでない。

希望に胸膨らませ、国防色（カーキ色とは一寸違った濃緑色）のファイバーの制服に白線に金色に輝く校章をつけた戦闘帽をかぶり、ゲートルを巻いてさっそうと校門をくぐっ

たことであろう。

黒帽に白線、三中を型どった校章、しもふりの制服の憧れは叶えられなかった。一年先輩の二年生から国防色の制服に戦闘帽とゲートル巻きに変わり、上級生と服装がハッキリと違っていた。しかしながら、時代が時代であったからこの服装に誇りをもっていた。

ちなみにこの服装の値段は、夏服十三円八十五銭、冬服十六円八十五銭、戦闘帽三円二十銭、編上靴二十円、ゲートル三円等で被服費は全部で八十九円七十銭であった。(「志願者心得」による)その他背のう式靴九円五十銭なども必要であった。

なお特別なものとして、一年生から五年生まで全て報国団費十一円がかかった。ちなみに授業料は月額四円五十銭であった。

当時、毎朝の通学は、駅を降りると上級生の号令で隊列を組み歩調をそろえて学校まで行進した。途中、先生や上級生に会うと、「歩調とれー、かしら右」という号令がかかり一斉に行動をとった。学校に着くと先づ正門の前に三八銃をもった上級生が歩哨に立っている。「歩調とれー、かしら右」をして通過した。

正門からは誰も出入りすることはできなかった。正門から少し離れたところの通用門が唯一出入りのできる門で、少し入ったところで「全体止れ、解散」という号令で全員敬礼

をしてそれぞれの教室へ散っていったのである。

正門に比べ寂れた通用門であったが、毎日登下校の際通り抜けていた門で本校の長い伝統と歴史が滲みこんでいるこの通用門は、この学校に学んだ者だけがなつかしい想いに浸ることのできる場所である。

通用門を入ると左手に自転車置場、古びた掲示板、正面右手に檜の古木があった。

今や本校のシンボルとなっている二本のくすの木は、本校の歴史を語るうえでかかせない存在となっているが、通用門の檜の木は本館校舎にかくれるように常緑の枝を大きく広げ登下校のときや、運動場と教室の出入りのときなど常に身近にあつて馴れ親しんだもので、この檜の木のその後の経過については語りつがれていないのは誠に残念だ。

戦中、戦後の激動の中で過ごした川中時代の五年間は、正にわが青春時代そのものであった。通学途中稻荷山公園の道を走ったこと、上級生のこと、勤労働員で過ごした上福岡の火工廠のこと、部活動（野球部、登山部）のこと、学友のこと、恩師のこと等走馬燈のよう駆け巡る思い出はつきない。

第四十五・四十六回卒業という二度の卒業式を経験したわれわれは、本校の歴史の中でいつまでも残る特記されるべきものであると思う次第である。

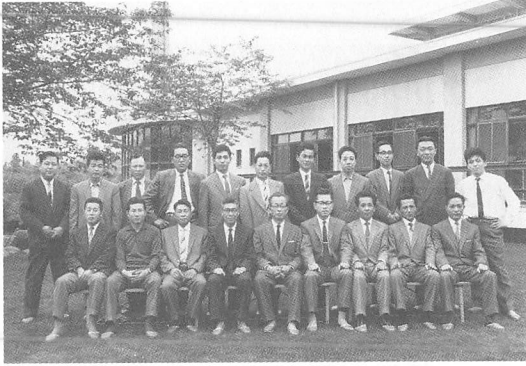
第四章 遠い飛行機雲

— 中四十七回 —

高一回 —



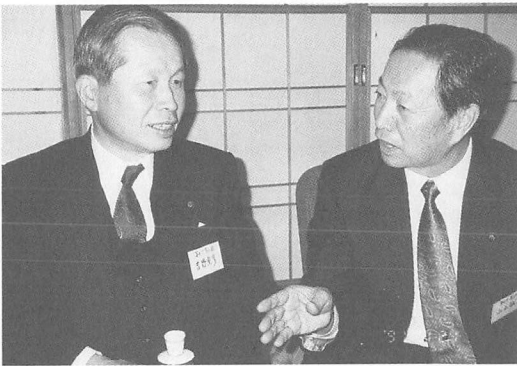
西島先輩海兵入校を祝って同期の友と 〈S 20〉



恩師(佐々木信、横田先生)を囲んで〈飯能覧山荘にて〉



師弟の情思濃かに
切偲の友誼亦厚く…
〈校歌をうたう仲間たち〉



行政と経済界の大御所二人…

人間万事塞翁が馬

新井隆夫

それは「異様」としか表現のしようがない、「音」だった。いや騒音というべきか。五十有余年の歳月が流れた今でも、耳底にこびりついている。

昭和二十二年二月二十五日。四年生に在籍しちょうど期末考査中であつた。試験監督の寺島天海氏が試験中に突然発言した。

「この中に川越線を通っているものはおるかな」静かに手をあげる。

「けさ高麗川駅付近で重大事故があり多数の死者が出たらしい。川越線は不通だそうだしさあ大変、帰りの足がない。どうやって帰ろうか。まず頭に浮かんだのは歩いて帰るということ。しかし我が家までは四里十六キロの道のり。どこまで行っても穴ぼこだらけの砂利道だ。その上朴歯の高下駄、それに常にすきつ腹をかかえていた。

ポケットをまさぐると多少のかねがあつた。本川越―所沢―飯能―高麗と乗りついで四

十分歩けば我が家に着く、運賃もどうやら足りそうだ。このコースを利用する。順調に乗りつぎ東飯能駅に到着。ドアが開いた瞬間ものすごい音。〃何事ならん〃と乗客の目は一斉に駅前広場へ（この広場といえない広場は二年前までは当時と全く同じであった）、〃音〃の主は釘を打つ金槌のそれであった。飯能中の大工さんが全部集められたと思われる人たちがこの真冬に汗を流しながら作業をしている。〃柩〃作りである。この光景をみて事故の大きさを改めて実感した。

やっと自宅にたどりつき現場に行ってみる。立春を過ぎようやく伸びはじめた麦畑の上に客車が折り重なるようにほうり出されている。こちらの麦の上には多数の遺体が横たわっている。何という無残な光景だろう。遺体には殆んど損傷はない。恐らく圧死であろう。終戦から、わずか一年半。きのうピンピンしていた人が、きょうはこの世の人ではなくなるのが日常茶飯事だった戦中ならともかく、やっと手に入れた平和な世の中の思わぬ事故死。みな無念の表情でよこたわっている。遺族のすすり泣きの声の中、静かに手を合せ現場をあとにする。

それにしても機関車とそれにつづく一両目は高麗川駅に無事到着という奇妙な事故だった。〃人間万事塞翁が馬〃ということばが頭をよぎった。

五年間あれこれ

大野 勝 男

川中時代の思い出といつても半世紀以上も前の事であり、記憶もさだかではないが、我が国の歴史の中でも、最大級と思われる激動の五年間を過して来た世代として、断片的ではあるが、思いつくままに幾つかの事に触れてみたい。

私は昭和十八年四月の入学であり、総勢二百名であった。入学当時、四・五年生が学帽で三年生以下が戦闘帽、服も背のうもカーキ色で、しかもゲートルを巻いた格好であった。固くしめると歩く時痛いし、ゆるいとほどけてしまうので慣れるまで大変で、稲荷山の片道二軒の徒歩があるだけに容易な事ではなかった。本川越駅から学校まで一年生を先頭に四列縦隊の登校である。市内の商店も、凡ての物資が統制下にあつたので、櫛の歯が抜けするように閉店状態になって、欲しがりません・勝つまではのポスターだけがやたらと目につくようになっていた。

例の「軍人に賜りたる勅諭」の暗誦を職員室の配属将校の前で、一章毎に述べて終了印を押しもらう訳だが、横におられた外の先生方は、どんな気持でその異様な光景を見聞していられたか、感慨無量のものがある。当時、海兵・陸士・予科練等の軍関係への進学希望が時節柄特に多く、伝統的風習？も加味してお説教も日常茶飯事で、夏休みなど二階の三年生の教室、或いは階段教室などへの呼び出し命令が多かった。しかし、昨今のような陰湿さはなく案外さっぱりはしていたが痛い事だけは云うまでもなかった。

一年生の夏、西伊豆・戸田での鍛錬実習があった。往路、箱根峠から三島までの旧東海道、歩いて歩いても歩いても仲々に到着しない長行軍は、肩にくいこむ重さも含めて今でも覚えていゝる。農作業も数多くあつて、行先の農家の食物の待遇に一喜一憂したのも懐かしい思い出である。二年生になると戦局も一層厳しくなり、上級生は次第に勤労働員に刈り出され校内も淋しくなつて来た。そして、いよいよ我々にも動員命令が発せられ、早春二月から三ヶ所に分かれて行く事になった。二・三組は高萩の飛行場で始めは比較的楽な作業であつたが、五月、航空士官学校の満州移転に伴つて飛行場の空気が一変して、特攻基地の性格を帯びて来て厳しい現実を肌で感じるようになった。九州が最終基地だけに、どこからか到着して何時の間にか居なくなるような日々であつた。その中で今でも印象深い

のは、広島高師と小樽高商出身の航空士官に木蔭で話を聞く機会があり、その時ポツリと「君達には明日という日があつていいね」と云われたことだ。これは、我々の胸にズシリと深く響いた言葉で、私も兄を学徒出陣で亡くしているだけに、戦争というものの悲しさを虚しさを痛切に感じた。

八月十五日は、朝、空襲警報が発せられ途中で引き返し、自宅で終戦の報を聞いた。我が家でも疎開家族が四組住んでいて、その中の退役陸軍少将から、今日の敗戦は、陸軍の科学を軽視した精神論一本槍の結果で、陸軍軍人として心から反省しなければと涙ながらに自戒されていた事をこの日になると思い出す。当時の事は、我々の還暦記念誌「遠い飛行機雲」に集約されており、普通の学生生活にない尊い青春の一コマそのものであったと云つても過言ではない。

昭和一桁生れの少年も、早や古希の大台に達してしまった。母校も、内外の整備が進捗して面目を一新し、往時の面影を残すものはくすの木の木だけである。恩師の先生方を始め、同じ吾野から共に通った三人を含めて鬼籍に入った級友も残念ながら少なくない。激動の中に青春を送った過ぎし日々を偲び、鎮魂歌としての思い出を綴つてみた。

わがゲートル時代

加藤 眞 三

私にとってゲートル時代と呼ぶ時期は、昭和十八年四月県立川越中学校入学より昭和二十年十月ゲートル廃止の日までである。人生において、最も多感な青春時代幕明けの時に体験したそれは厳しい束縛された「心の緊張」を持続した時代だったともいえる。では全く厳しさだけだったかという、必ずしもそうではなかった。この二年七ヶ月の間に非常に得難い青春時代のノスタルジアを体験している。それは中学入学から二年間の学校生活。二十年二月よりの勤労働員生活。(高萩飛行場六ヶ月間)そして二十年八月終戦よりゲートル廃止までの二ヶ月間。これらの生活体験により心の奥底に焼きついたさまざまに思い出が、今になって折々思い返されて来るのである。そこで思い出すままに十七文字の短詩に託して、往時をたどってみることにしよう。

●ゲートルで軍国少年脚固め

国民学校から中学校に入学した私たちにとって、最も変わったもののひとつにゲートル(巻脚絆)が挙げられる。このゲートルこそ児童から生徒への変身。それは戦時下の生徒として日常の行動を容易にし、かつ絶えず気を引締めるためにも先づ足元を固めることが最適だったに違いない。配給された上下服、背囊、ゲートル等いづれも戦時中ゆえ粗悪な生地で作られたペナペナ製品、中でもゲートルには苦勞した。強く巻けば足が痛く歩きにくい。一寸ゆるく巻くとすぐにとけてしまう。始末におえぬものであった。恰も竹林の筍のように見映えのよいもの悪いもの、太め細め等何としても不揃いな新入生のゲートル模様であった。そのため毎朝の起床時刻は、ゲートル巻きの時間をとるため朝の五時半が日課となった。それ程脚固めでは苦勞したものだ。た。

●ゲートルの痛みこたえるポンのよし

毎朝行なわれる全校朝礼は厳しいものであった。五年生から順に一年生へと各学年が中隊編成で校庭に整列する様は見事であり、それを束ねる大隊長格の教頭は非常に威厳があった。然しこの朝礼に遅刻した者は悲惨であった。全員整列し終った後に一分一秒でも遅れて来た者は、理由の如何を問わず先づ教頭に敬礼した後「遅れました」と申告する。すると教頭は即座に「よし」とうなづく。これでよいかとそうではない。直ちに全員

の見ている前で階段教室の横の北向きの地面に坐らせられるのである。朝礼が終り全員が各教室に入るまで、その場でくどくどお説教をされ漸く解放されるのである。夏場はともかく冬の寒い朝、霜柱の立つ地面に坐らせられた時の苦痛は大変なもので、私も一度だけ体験した記憶がある。寒さとゲートルを巻いた足にくい込む痛みは、恰も難行苦行に耐える修行僧の様だった。未だにあの時の教頭のいとも簡単な、一見許すがごとき「よし」の一言は忘れることが出来ない。その人の名は吉川教頭——綽名はポン公——だった。

●ゲートルも声をあげ解ける夏農場

川中には二つの学校農場があった。一つは川越市内境町にある境町農場と、もう一つは古谷村地内入間川河岸の荒川農場である。当時農業実習は数ある教科の中で、時局にマッチした有力な授業であり心身の鍛錬と共に、農作物収穫の喜び（むしろ食糧増産は先生への一助）を生徒に課していたのかも知れない。然し境町農場はともかく荒川農場での作業は大変辛いものであった。農場まで片道約六粒（一時間半）の道程みちのりを学校から鋤鍬をかついで炎天下歩いて行くのはひと苦勞、夏の暑さは衣服を汗びっしょりにし、ゲートルも声をあげて紐がゆるんで解ける始末であった。まして私たち飯能組は稻荷山の二粒を歩いて来ているので尚更辛い農場通いだった。こうして現地に着くとそこは入間川河岸ゆえ水も

なければ木陰もなく、只黙々と我慢強く働く戦時下の中学生の修練道場と化していたのである。その時の体験が現代生活の中に時折「潜在的耐久力」として出て来ることに感謝する次第である。

●ゲートルが歴史を語る稲荷山

稲荷山（西武池袋線稲荷山公園駅から同新宿線入間川駅までの約二軒の道）は私たちに
とって終生忘れ得ぬ思い出の通学路の一部である。川中入学以来卒業まで六年間の学校生活の中で数々の喜怒哀楽がもたらす精神状態を、時には高揚し、抑制し、昇華してくれた青春時代の思い出の道だった。春になると満開の桜並木と化す稲荷山の道は、私たちの生き様をじっと見守っていたことだろう。さて先輩諸兄の間に混じって只管ひたすら遅れまいと狭い歩幅を無理に広げて駆け歩いた稲荷山では、さまざま先輩のお世話になった。新入生の目に映った当時の方々のプロフィールにふれてみると……「稲荷山家の素描」

五年生（長男）……雲上人。何かおかし難い存在、然し優しさが感じられた。総じてゲートルの巻き方は大ざっぱ、黒帽が貫禄を示していた。特に平山（石井）峻さんの包容力を秘めた優しい目。がちりした肩に背のうをかけ颯爽と歩く柳戸勝明さん。そして幾分右肩をあげ前かがみの学究タイプの船山一郎さん。豊岡の池谷さん、中村さんの姿も懐か

しい。バスケ先輩木村徳行さんは忘れ得ぬ存在。

四年生（二男）……一寸近寄り難いが話しは出来た。少し離れた存在であったが入子祐三さん、佐野一男さん、小林茂さんは気軽に言葉をかけてくれた先輩であった。一井さん、新井さん、大野さん、いづれも皆勉強家に見えた。

三年生（三男）……安心して相談出来る身近かな存在。随分世話になった先輩がいた。颯爽と竹刀を肩に、特製シートの背のうを背に歩く長身の関谷昭さんは流石三年生のリーダー的存在であった。柔道衣を片手に小股歩きの佐野陽太郎さんには種々教えて頂くことも多く、柔道衣も頂戴した。山影（犬竹）裕昭さん、武藤裕文さん、山岸悦二さん等世話になった先輩は多い。吾野南川の遠隔地より精勤した終始明るい笑顔で接して頂いた木下典一さんは今はない。（弟の木下和二君は私たちの同級生であったが同じく早世した。）通学路は異なったが西島陽、平井昭、町田成（金子）諸先輩にも運動部活動を通じて教えを受けた。尚双柳の滝田輝夫さんは稲荷山を歩きながら時折話しかけられ気さくに色々と話が出来たことが今では懐しく思い出される。

二年生（四男）……兄弟でいえずすぐ上の兄貴分で絶えずいじめられたり、時には喧嘩する相手、何かケチをつけられないかと意識しなければならぬ存在である。然し稲荷山

の先輩は親切なよき相談相手であった。前島（五十嵐）薫さん、増島成郎さん等若干こわもて顔なるも親身になって接してくれた。バスケの先輩粕谷文雄さん、原口幸雄さん、加藤勉さんには殊の外お世話をかけた。飯能からは鈴木浩さん、宮岡正治さん、西沢正治さん、古莊智典さん、小谷野俊治さん、そして現在飯能市自治会のリーダー山川健夫さんもよき先輩として忘れることが出来ない。総じて稲荷山家の兄貴達は、小山をはじめとする新入生達にとって非常に暖ったかい面倒見のよい人達であったことを感謝している。先輩のことはかり書いたが稲荷山通学には最高の目付役が同行していた。横田稲吉先生である。吾野のご自宅から学校まで毎日ご一緒出来たことは本当に幸せだった。まして一年四組私の担任でもあった。当時先生は恐い先生で知られていたが、私たちにとっては細かい所に気をくばり親切に然もユーモア混じりの話し方で指導して頂いた先生のイメージを今も忘れることが出来ない。

●ゲートルを解いて青春蘇える

（試胆会）……たしか入学した年の夏休みの或る日のことだと思う。飯能在住の川中生全員に夕方飯能一小校庭に召集がかけられた。入学以来ゲートルを解いて集まる会合は少なかったので幾分軽い気持ちで参加した。最上級生の中から着物姿の木村德行さんがこれか

ら行なわれる「試胆会」について説明をはじめた。確か白緋に紺袴の恰好は夏の夜の行事にふさわしいと思われた。試されるのは主として新一年生、嚇かす仕掛人は四、五年生だった。道順は一小校庭↓観音寺墓地↓諏訪沢↓諏訪神社↓グラウンド↓天覧山中段で現在とちがい殆ど真暗い闇の中。三年生より順に一人ずつ、一定の間隔を置いて出発した。所要所の道の悪さに諏訪沢に落ちる者あり、時々お化けならぬ先輩のおどし等々新一年生ゆえの恐怖心と好奇心が混ざりあつて緊張した一時であつたが、若干楽しさも感ぜられた試胆会であつた。私は先輩が後輩を嚇かす、いふなれば強者が弱者をいじめめる一種のいじめかと思つていたが、然しその中にゲートルを解いた人間同士の普段着の共通の体験が、ほのぼのとしたコミュニケーションを醸し出させてくれたことに感謝したい。闇の中にボトと明るさを感じた青春のひとつままと記憶している。

(壮行会) ……戦況我に利あらず、戦火益々拡大する中、上級生の特に三年生以上の軍関係学校への入隊入学が顕著になつた。私たち籠球班の西島陽先輩の海兵入学が決まり、小山、神田、清水、久下、加藤そして茂木等の後輩が西島先輩を送る会を持つた。酒ならぬサイダーに酔いながら、懐しい童謡を、戦時歌謡「学徒動員の歌」など、又勇ましい軍歌は声張り上げ、そして最後は川中校歌で心の一体感を図り別れを惜しんだ。高麗清川橋

の下で西島先輩を囲んでの記念写真（茂木宗孝君撮影）をみると先輩後輩がゲートルを解いて外見上はリラックスした姿で撮られているが、心中は全員が中空の一点をみつめる眼差しから察して親しき人との別離の悲しみを秘めたものと思われる。肉親の間にも似た感情の暖かみを体験した青春の一瞬であった。

（壕の中の青春）……さて私たちにも、二十年二月に勤労働員令が下り高萩飛行場（飛行機掩体壕作りと飛行機整備）での厳しい、戦時下の動員生活が始まった。いく度かの空襲にも見舞われ、時には戦場の気分を味わわされる場面もあった。然しそうした緊張した中にあっても私たちには若干の青春があった。私の配属された器材庫は豊岡の航空士官学校本校へ隔日に器材交換（気化器等）に行く係で、使用するトラックの荷台に乗って行くのが楽しみであった。行幸通路と呼ばれた修武台への舗装道路をトラック上とはいえ走り行く爽快感は今も忘れない。器材庫の脇に、飛行場常駐の通信隊の地下壕があった。壕の中には普通の木机の上に数種類の通信機器が置かれて居り、数名の通信兵が他部隊との連絡通信をしていた。その中に渡部、五味両兵長さんが居た。始めは恐る恐るのぞいて居た私であったが「入ってこいよ」といわれて大胆に一人で壕の中に入ってみた。昼休みになると両兵長さんも休憩時間に入るのか、ゲートルをはずして何か緊張感を感じない状態だ

つたので、私もゲートルを解いて壕に入ることにした。色々と話しをすることが楽しかった。学校のこと。家族のこと。自分の町のこと。今考えていること。何故か今行なわれている戦争のことは話題にふれなかった。彼等は少年通信兵出身と聞いた。二十才前の年令だ。私にとっては身近かな兄貴と思えた。特に渡部兵長さんは千葉県出身で非常に気が合
い色々なことを気兼ねなく話すことが出来、兄貴兄貴と慕い続けた。当時私の兄も特攻隊の一員として疾風（四式戦）で戦場を駆けめぐっていたので、会えぬことへの反動もあり、身近かな渡部兵長さんに兄貴の姿を求めていたのかも知れない。然し今にして思えば彼は少年通信兵として戦時の逼迫した悲壮感のウラハラにある感情の憩いの一時として、私に接してくれたものと感謝している。人を慕い、兄と思い焦れた青春の心の揺らぎを忘れることは出来ない。（注、戦後渡部さんは千葉市貝塚に帰り復学したと聞く。幾度か手紙のやりとりをしたがその後の消息は定かでない。）

●ゲートルに響くビンタの同士打ち

ビンタ（殴る）……先生が、親が、先輩がそれぞれ下の者に対し殴る。これは意味はどうあれ当時は日常茶飯事のことであった。然し私たちの仲間同士でのビンタは一寸異質のものであった。今にして思えば、戦時中の一種の狂気じみた集団自虐行為で、何の目的か

ハッキリせず、只々自己満足を充たすに過ぎないものであつたと思われる。「最近たるんで
いるぞ」誰いうとなくそんな言葉が囁かれると、直ちにお互い精神状態を正す意味で行な
われた行為である。——飛行場へ動員された飯能班(飯能方面より高萩駅で下車する一団)
でその集団対向ビンタが行なわれた。日時は定かでない。多分戦雲急を告げはじめた頃と
思う。何の目的か勿論明かでない。朝高萩駅を降りてすぐの細い林道に、小山以下十数名
お互い向い合つた二列横隊が出来た。「精神を鍛え直そう」誰かの合図で級友同士殴り合う
様は、第三者からみれば奇妙な光景に映つたことであろう。相手から殴られれば痛さを感じ
ず。その痛さ以上の力で今度は相手を殴る。又殴られる、殴る。数回殴り合つた後に何
が残つたのか。若干スカツとした気持になるかも知れないが何とも納得し難い思いが残つ
たのは事実だ。頬への平手打ちが下肢のゲートルにまで痛みを感じさせた対向ビンタは、
或る種青春時代特有の憂うつ感の払拭法だつたかも知れない。

●ゲートルが解けて自由の風通る

昭和二十年八月十五日(水)……その日はやけに暑い日であつた。「学生は帰宅すること」と指示され動員先からの帰途、たしか高麗川駅辺りで「終戦」の玉音放送が流れたと記憶している。さあそれからが大変だつた。高萩での残務整理が終りしばらくの夏休み、九月

一日復学、てんやわんやの数ヶ月が続くわけだが、十月ゲートル廃止の指示が出て本格的にゲートルを解く日が来た。

進駐軍が来るから教科書の一部をスミで消せ、軍国主義が民主主義に、大声が小声に、叱声が猫なで声に、先生方も大変。私たちも大変。でも「自由」が少しづつ感じられて、何となくホツとした空気が学校に漂って来たのは事実だった。

思えば、ゲートルをきつく巻いて稲荷山の道を、先頭を切って上級生に抜かれまいと、一生懸命歩いた日々、その道は終戦と同時に進駐した一見怖そうで少しやさし気な米軍歩哨を横目でみながら歩く日に変って行つた。西武新宿線は前の車輛に男子、後車輛に女子という分離乗車のきまりは、戦後徐々に変って行つた。本川越駅を降りて学校迄の整列行進を指揮した五年生神山光司さんの口元をキチツと結んだ英姿はもはやなく、各自自由通学に変って行つた。束縛から解放へ、正にゲートルの紐が解かれ自由な時代へ突入し今日に至る。

昨今の余りにも解放された学生たちの生活をみる時、ちよつぱり時には身体のどこかにゲートルを巻くことも必要かなと思ふことしきりである。

川中時代の思い出と自己紹介

川 邊 信 武

私は昭和五年に飯能駅東方約三・五KMの精明村双柳新田（現椿本チエイン工場敷地の東北角）開拓地の貧農の長男として生まれ、昭和二十三年川中を卒業し上京する迄の十八年間を此処で過ごした。精明小学校時代は小川での小魚釣り、家の近くの林でメジロ捕り、蕨や茸狩りに明け暮れし楽しかった思い出ばかりだった。川中受験は親父の勧めだったが、合格発表時には「中学卒業までは親の責任として全費用を出すが無ければ以後の金は出せないから、卒業までに自分でよく考えて好きにやれ」と念押しされたのを今でも覚えて居る。

川中通学は、東飯能駅、元加治駅、仏子駅の中で最も家から近い元加治駅（約二KM）を選び殆どの期間を西武線にて稻荷山公園を人間川駅へ歩き又西武本川越へと飯能方面の人達と一緒に結構楽しい通学だった。但し学徒動員の高萩通勤（否通学）は、東飯能駅（約三KM）から乗車した。元加治迄の農道に接して垣根も全くない開放的なお墓があった。

この道は畑仕事の人が明るいとときに使う道で、陽が落ちると誰も通らず当時十二歳の私には何ともいやな場所だった。特に鈴木先生の怪談話のあった冬の日に暗くなつて通る時などこわさで身がすくみ、大分回り道となるが仏子駅に変えようかとさえ思い悩んだものだ。その後、一年生全員が静岡戸田港の海洋訓練に行った夜、試胆会があり宿の近くの墓地を一人ずつ廻ってきたが落伍者が出たとも聞かなかつたので、みんなに負けてはならないと元加治通学にも気も強く持ち直して、お墓の前を往復して居る中にそんな意識も少しずつ薄れてゆき通学路は最後まで変えることはなかつた。

此処で、一つのエピソードとして『まんじゅう事件』にふれよう。それは昭和十八年八月中旬のこと。私が、小さな農村入間郡精明村の小学校から独りで川中に入りやつと親しい友達が出来はじめた頃の話である。私の村では年一回の夏祭りには、うどんやそばのご馳走の他に必ず大型でふくらとした「甘酒まんじゅう」を大量に作る習慣がある。出来上がった翌朝おふくろが「川中の町の友達に持つていってあげたらきつと喜ぶよ」と本や用具は他の袋に入れて手で持ち、カバンに思い切りそれを詰め込んでくれた。私は何となく「も頭を横切つたが友達が喜ぶ顔が浮かび、そのまま待つていった。学校へ着くなり市内の友達を中心に一つ宛て配つたら皆喜んでくれた。ところが昼近い鈴木先生の時間

に誰か一人食べ始めてしまい、それが見つかり叱られてその場は納まったかに見えたが昼休みに職員室へ呼ばれて、調べられて居る中に、当然私を持つてきたことがばれてしまい、大勢もらつたことも解つてしまった。放課後私も職員室に呼ばれて事情聴取をされた上、先生は「授業中に食う奴は先ず悪いが学校へ持つてくる奴も悪い」とごつてり絞られて、その日は終わつた。翌日何か書類（始末書？）を提出して一件落着となつたが「川邊のまんじゅう事件」として新入生間で相当話題になつたと思うが私の居た一年一組だつた人の中には思い出される人も多いかと思う。

戦争の為に食糧事情の悪化が急速に進んだ時期の何とも切ない事件だつた。

一学期を終わつて初めて成績表を受け取つて、後から数えた方が早い「席次」には、びつくりしたが親父に見せない訳にはいかず、意を決して差し出したら意外にあつさり、「まあ、こんなものだろう。お村の大將も大都市の川越に出ていったのだから。根気よくやつて行けばその内にもつと上がるだろう」と言つたが私には「せめて真ん中まで頑張れ。そして中学後は就職したら！」とも聞こえた。

私達の川中時代とは入学↓（二年四ヶ月）↓敗戦↓（二年六ヶ月）↓卒業と半々の別世界を体験した学生生活だつた。前半はマインドコントロールが充分効いた戦争を是とする

実習の日々、後半は学生の本分である勉学と、前半で空白となった勉学不足分の合計を取
得し、戦前の先輩に少しでも近づこうと必死に勉強する学生生活を、みんなよく頑張り通
した時代に二分されると思う。

そんなことで中学卒業の見通しが立ち始めた頃、親父から金欠宣告も受けて居る身、中
学卒で就職するか、それとも進学かと悩んでいた時「調査書」と言う表題で校長名印のあ
る教科成績や身体状況及び出欠、などが記入された書類の片隅の「最終学年序列欄」には、
入学直後の成績表を見て親父の言った「その内に、上がるだろう」どころではなく、私も
びっくりするほど上がった成績と席次が記されていた。その脇の「在学中の活動状況」に
は恐らく白井先生が書いてくれたと思われる、「校友会所属美術工芸班班長で絵画製図工作
には大いに趣味あり」と入っていた。趣味ありとはまことに消極的表現で先生の本心は「よ
く書いていたが下手だった」と思うが、然しこの場所を読むなり、私の悩みは吹っ飛び、
建築科を持つ学校への進学と建築技術者を職業にする事を決意した。そして万一受験する
ことになったら、と調べておいた早大理工学部建築学科を受験し幸いにも合格したので、
直ぐ親父の所へ報告と必死にがんばるが万一の時には宜しくと頼んだところ「それはよか
ったな。今から五年間のことはお互いに何とも言えないがなんとかする」との意外な反応

には驚いた。そして親父は江戸川橋在住の親しい友人に下宿代はお米で支払う約束で大部屋を借りてくれた。又、飯能高女を出て地元で勤務していた姉が上京して、私を助けてあげ度いと飯田橋の銀行に転職し、勤務しながら家事をしてくれた。又、お袋は「お米・野菜・芋など何でも持っていきなよ」と家族全員で支援体制をとってくれた。又親父も次第に金欠宣言を解いてくれて「バイトは程々にして学校の時間を大切にしろよ」と折に触れ送金してくれたので私は教養や選択科目は欠席しても専門科目の時間だけは絶対欠席することなくバイト料の代替に当て親父の厚意に報いる様にした。

この様にして苦しい大学生生活を五年間続け、昭和二十八年に何とか卒業して直ちに戸田建設にも入社出来て、発展途上の福岡支店に配属となり、半月ばかり支店内で新入社員教育を受けた後九州各地の工事現場の所長や工事主任に引き渡され、その工事が終わると直ぐに次の工事へと、それが繰り返された。そして昭和三十三年には一級建築士資格を、又、六十年には一級建築施工管理技師資格を取得した。平成八年リタイアするまでの前半は戸田建設、後半は早大の同級生が社長の黒川建設（本社／東京・神田）に代表取締役・副社長として招かれ、工事部門を一括担当して四年前の平成八年完全リタイアし「毎日が日曜日」の生活に入った。

必敗の戦争から学んだこと

久保 多太男

昭和十六年十二月、早朝のことである。登校の仕度も終り、ラジオの第2放送に耳を傾けていた。すると突然番組が中断、「帝国陸海軍は、本八日未明、西太平洋において、米英軍と戦闘状態に入れり」が流れてきた。強烈な電流に触れたときのようなショックが全身を駆け抜けた。「やったぞー」と思わず台所にいた母に向かって叫んだ。母の答えはこうだった。「電気や飛行機を発明した国に勝てるはずがない。どうなるんだらうか」

昭和十八年四月、私は川越中学に入學した。吾野から川越まで約二時間半位かかったと思う。暗いうちに家を出た。戦闘帽にゲートルを巻いて稻荷山を歩いた記憶は鮮明に今も脳裏にやきついている。

人生七十余年を経て、あの時、開戦を決断した人々の心の中はどうだったのだろうか。とふと思う。必敗か屈辱の平和か。それでも平和の彼方いい展望が開けるのか。思い巡

らす。そして、西欧キリスト教国によるアフリカ、中近東、インド、東南アジア、中国などの植民地化や南北両アメリカ蹂躪（一九九八年に訪れた仏海外県で、カリブ海にあるマルチニク島では、その博物館の資料によると、島の原住民はヨーロッパからの植民者により皆殺しにされたと記録。現島民はアフリカ系である。）などの事実に思い当たる。キリスト教徒が異教徒を絶滅させなければやまない執念を持っていることに気付く。日本史にもそれらを裏付ける事実のことかかない。豊臣秀吉の時代、大村純忠、有馬春信、大友宗麟らキリシタン大名の領内では、『神仏はキリスト教の敵だから神社仏閣はすべて薪にしまえ』という怒濤が荒れ狂った。スペインのフィリッペ二世は、詔勅のなかで、明確に日本に対する領土的野心を表明、その先兵に宣教師を充てていた。（NHK八月二十三日放映、『その時歴史が動いた キリシタン禁制 宣教師の日本征服計画』）。キリスト教徒にとっての平和は、次の侵略を準備する期間にしかない。そう、彼らは結論付けたのではなかったらうか。

開戦の決断を下したとき、関係者は、必敗の中に、一条の光を見たとき、私は思い描く。とにかく、ある期間、死力を尽くして消耗戦を戦い抜けば、キリスト教国の軍事力は大幅に弱体化、植民地拡大の欲望と、異教徒絶滅の気力は間違いない、格段に、衰えていくの

ではないかと。その後の世界における事態の推移を見ると、まさにこの通りに事が運んだと言える。『一条の光』は、戦後、巨大な火の玉となり、民族主義の嵐となって、旧植民地を席卷、開戦時（一九四一年）六十数か国しかなかった世界の国々が、一九六九年には一四三か国、そして九三年には一九一か国に増えている。ハルノート（一九四一年十一月二十六日に突き付けられた米の最後通告）で日本軍の大陸からの完全撤退などを要求した時、米側は日本が必敗の戦争に突入するはずがない——と思っていた節がある。今でも、米国の新聞記者のなかには、この点が、どうしても飲み込めないと指摘する人を時々見かける。愚考するに、彼らには『公』という思想が理解できず、従って、『公』を掲げた必敗の戦争は正気の沙汰ではないのである。

確かに、キリスト教の世界で、必敗の戦争を敢えて試みたのは、トラピス大佐率いるデービー・クロケット、ジム・ボーイらが守るアラモの砦の戦だけとされている。明治以後、また、廃仏毀釈が荒れ狂い、脱亜入欧が叫ばれて、日本は一段と洋風化したのが、仏教に根差す『公』『私』の二元論は地表下で確固として生き残ってきた。一方、キリスト者は『私』という一元的なスタンスでしか世界を見ない。個人の私利私欲、国の私利私欲に直面しても、驚くほど括淡としている。そのため、西欧の大国は何回となく良心の呵責に苛められ

ずに、『私』をぶつつけあい、殺しあいを繰り返してきた。同じことを異教徒が行うと、『文明の敵』とか、勝手な理屈を付けて、臆面もなく偽善者の仮面を被り、正義を振りかざし、断罪する。その厚顔無恥ぶりはあきれるを通り越して、驚嘆するしかない。キリスト教徒はもういい加減目覚めて、『公』の感覚を教義のなかに取り入れてもらいたいものである。もつとも、戦後、新憲法で、キリスト教の説く『私』はおおむね日本人に定着、個人尊重の気風は世界に誇れるところまでできたように思う。ただ、『私』がはびこり過ぎ、国の格調をおとしめるところまでできてしまったのも事実。この点、廃仏毀釈はキリスト教徒の思惑通り、ものの見事に成功、日本では、公的には、もう少しで仏教絶滅までいきかけている。これは、換言すれば、『公』という思想の消滅でもある。ただし、後にきたキリスト教にこの喪失を補うものがあれば、なにかいわんやである。キリスト教にはそれがなければならぬ問題なのである。彼らは人間がよって立つ大地は、無限であると考えている節がある。この考えは、もう、地球の現状に合わなくなってしまった。地球の現状にも合えば、経済運営の基本ともなる世界観としても望ましいのは、『公』の導入。それは、人口も、経済も無限に大きくなることは、地球が許さなくなつた—ということを確認することである。困つたことには、ノーベル経済学賞をもらったような、大御所でも、依然『私』に凝り固まつて

いることである。

例えば、ポール・サミュエルソン元マサチューセッツ工科大教授。八月二十八日付けの読売一面に掲載の論文によると、基調はマイルド・インフレをよしとしており、これは、彼が三十代に書いた論文と変わらない。もう、それから五十年近く経ち、地球環境が変わっているのである。読売の論文で、日本はインフレに陥っておらず、それなのに、日銀は政界、財界、米政府の反対を押し切って、ゼロ金利を解除した。けしからぬ—という趣旨である。ところが、その米国は、毎年多額の国際収支の赤字を垂れ流しており、その総残高は、米国内総生産の三分の一を超えるような水準である。これはいわば、一片の紙切れに数字を印刷するだけで、よその国からものを買っているわけで、自国内にはデフレ圧力、他国にはインフレを垂れ流す。日本におけるドル債権の蓄積は、現状では、インフレ圧力と同じであり、ブームの結果として米国内に高まるインフレ圧力を日本に転嫁して、ガス抜きをしているのとかわからない。日銀が金利を上げる方向に動くのは当然である。米政府が不快感を示すのはやむをえないとしても、日本政府や、一部財界が、対米批判の方は棚に上げて、日銀だけに反対するのは、理解しにくい。しかし、経済学者が米政府のような発言をするのは、なんとしても一番いただけない。ベトナム戦費をちらにしたと

きのように、いずれドル切り下げにでも成れば、馬鹿を見るのは、日本のようなドルの債権大国である。そしてさらに問題なのは、ドル債権は紙屑に帰ったとしても、それと同額の円がそのまま残り、浮遊し、だぶつくことにより、日本経済に悪さを繰り返すことである。悪さをしにくくするためにも、金利は高い方が望ましい。株が上がるだけが国益ではないのだから。

敗戦のお陰で日本は『私』即ち個人尊重ではかなり高いレベルの国になり、大きな収獲を得た。しかし『公』については、実は明治以来、廃仏毀釈を通じて排除を続け、敗戦後はそれに拍車がかかっており、いまや消滅の土壇場まで追い詰められた。これは一大事である。これが私の認識である。

迂闊なことに、私が廃仏毀釈を実感したのは仙台に来てからだった。吾野では有名な竹寺が子の権現の近くにあり、神仏混淆の典型である。小学校に上がった頃までは、四月八日に花祭りがあり、吾野駅の反対側の山の中腹にある巖殿観音まで、稚児さんの行列が出た。校長先生も、駐在所の巡査部長さんも、みんな参加していた。

昔も昔三千年　花咲き匂う春八日

響き渡った一声は天にも地にもわれ独り

小学校に上がる前から、この日、この歌を斉唱させられた。だれから聞いたか忘れたが、この頃から天上天下唯我独尊の話を解説してもらい、『公』と『私』のかかわりあいを知った。私の認識では、神も仏も神仏で統一されていた。同じ囲いのなかの存在だった。家でも、仏壇と神棚は仲良く隣り合わせで、家中みな、必ず双方に手を合わせた。

ところが、仙台では、驚いたことに斧を入れて真つ二つに割るような形で、神仏を分断している。その典型は国道四号から仙台空港へ曲がる辺りにある弘誓寺(ぐせいじ)。弘法大師の勧請開山と伝えられ、本尊は不動だが、廃仏毀釈の際に建物の中央に鋸を入れ、無理無理分断した跡がなお残っていた。神社のほうはその地名をあて、館腰神社とされた。この寺と神社を見ていると、まるでキリスト教徒がやったのかと思われるほど、凄まじい雰囲気漂っている。これが明治以後の日本の近代化の実像なのだと、一種のショックをうけた。

(二〇〇〇年八月二十八日)

共に生き共に歩んで

小山 誠 三

秩父多摩の山々を焦がす夕映えを眺めながら、しばし佇むことがある。あの少年の日から五十有余年、その激動の渦中に身を置いて来たためか、純粹であったあの頃が懐かしく心惹かれるものがある。

あの頃の師も多く身罷られ、身近かな先輩や友人も何人か帰らぬ人となった。思えば私も齢い古稀である。

当時とすれば当然すぎるほどだが、川中進学の目的は、軍人になるの一語につきていた。海軍兵学校予科（予科兵）の受験を志した時、困難な時代に鋭い洞察力をもって、次なる時代を予見なさった軍縮少佐の長谷川貞平先生は、「軍艦や航空母艦を失って、この島国をどうして護ることができるのか、君の今なすべきことは、しっかりと学習することだ」とおっしゃって、動員学徒でもある私たちに次々と宿題を課し、提出すると添削をして返し

てくださった。高萩飛行場で迎えた敗戦の翌日から授業を再開なさったのも先生であった。あの時代に発言することの最も困難な、もし発言すれば身の危険を感じるほどのことを断固としておっしゃった子弟愛に、私は今でも深く感動を覚える。言ってはならないとされることを言つてまで生徒の進路を修正しようとなさる確固たる信念と勇氣に敬服する。

一方で呑ちゃんこと佐々木信治先生は、小説を持参することさえ禁じられた中で、小説を読むことを勧め、許してくださったっていた。当時の厳しい子弟関係の中で恩情溢れる数々の師との邂逅は現在でも尊くありがたいものと思っている。

軍隊と同じように上級生の重みは想像以上であった時代、数学や英語を教えて戴いたり温かい言葉をかけてくださった上級生のあったことを思い出す。今は故人となられた平岡仙之助さんもそのお一人であった。新井照三さん、高橋佑一さんには、稲荷山公園駅での電車待ちの間に宿題を見て戴いた。家の近くでもある前島（五十嵐）さんなど同じ電車通学の往復時、厳しい上下関係が存在したにもかかわらず温かいご指導を受けることが多くあった。戦後のことになるが後の柿沼医院長柿沼英雄さんには郷土班の設立者でもあり多くのご助言を戴き、その後の班の活動にもお力添えを戴いた。

入学してからの勤労奉仕も多かった。農繁期の芳野村の農家の手伝い、荒川での草刈り、

山田村や古谷村の水田の作業もあった。昭和十九年六月には四・五年生が朝霞被服廠に通年動員、八月には三年生が上福岡火工廠にと上級生が学校から消えて行つた。十一月にはB・29の空襲が始まる。B・29の爆音と西の空からの飛行機雲が象徴する空襲警報の中で時間は動き、戦地も内地もない非常事態の中で昭和二十年を迎え、二月には通年動員が開始された。一年生は全員火工廠であつた。二年生の我々は、組によつて違つていた。服部や私は高萩飛行場、赤田は朝霞被服廠、浅野カーリットに行つた組もあり、動員先で三年生に進級した。

敗戦の日まで続いた動員生活の中ではP・51や艦載機の機銃掃射を体験した。その度に松林の中や防空壕に逃げ込んだ。出勤先は異なつたが朝、夕の車中では、上級生や下級生の和やかな会話や交流もあつた。

食糧難の時代の生々しい記憶は、弁当に持参した代用食の薩摩芋を先生や友達と分け合つてひもじさを凌いだこともあつた。そこでは飽食の時代とは異なる得難いものを手にすることができたと思う。

ゲートル時代と名づける時代を共有する者だけに与えられた先輩後輩の紐帯は、作ろうとしてもできるものではないし、この飯能という地域と人間に深くかわるようには思える。

この街に立って緑の山々を眺め、この地に育ったことを、そこに人生を托すことのできたことを、大きなお力添えを戴いて現在のあることをありがたく思い感謝する毎日である。

戦時下の中学生生活

澁谷 健

もうかれこれ六十年近くも前のことだが、昭和十八年四月、埼玉県立川越中学校一年生に入学、白線の入った帽子を着用し、初めてゲートルなるものを足に巻き、何か大人になったような気持ちと、ゲートルの規則正しい巻き方に四苦八苦したことは、いまだに忘れられない思い出として鮮明に残っている。

入学後間もなく、私の属していたクラスは、狭山市の農家へ援農作業に（これが、後に狭山高校長になった時、P.T.A会長をしてくださった方の家だったことが分かり、不思議なご縁とまっているが）、そして、その後勤労働員と言う名で、朝霞にあった工場（後の積水化学の所と思うが）へ風船爆弾の材料造り（これは戦後になって知ったのだが）に駆り

出された。蒟蒻入りの糊を和紙に塗り、その上に和紙をのせて天火で乾かしてまた塗り、更に貼る……と言った作業の繰り返しで、服の袖が糊でかちかちに固まって困ったことが思い出される。

二年生に進級した頃は、戦局ますます風雲急を告げ、遂に学徒動員が広範囲に拡大し、昭和二十年二月からは、私達四組は陸軍被服廠朝霞支廠への動員が命じられた。その時は既に同支廠には先に当時の四年生・五年生が働いて居られ、遅れて新入りでの参加となつた次第。いま、その跡地は、朝霞市役所、市営球場、税務署、公園、朝霞西高等学校をはじめ、多くの公共施設が立ち並んで居り、それから推測してもその面積が如何に広大であったかが分かる。結局ここに約半年、昭和二十年八月十五日の終戦の日までついに学校には登校出来なかつた。仕事としては、当初は編上靴収容の木箱作りで、長い釘を一撃で打ち込む技術を身に付け自慢していたが、その後は軍の被服、レンガ、木炭、角材等をトロッコに積んで場内を搬送する等の仕事に変わった。その際、事故で重傷を負い休学になった級友も居り、それをもってしても結構危険な、苛酷な仕事であったと思う。また、時には防空壕掘りとか、戦争末期には物資の疎開作業等も加わった。そんな中でも、空襲警報下、避難先で松田蘭風先生の漢文や英語（何故か英語も）の授業をしていたのも今

となつては懐かしい思い出だ。松田先生曰く、何れ英語を必要とする時代が来る……と。当時としては先見の明とでも言うべきか。ただ、師の深慮遠謀を知るべくもなく、敵国語として熱を入れなかったことが今悔やまれてならない。

私達川中生の本部は学生班と称する簡素な建物にあり、諸連絡や昼食等にはこれを利用する。動員されて間もなく私は炊事班にも所属するよう命じられた。食事の時間が近づくと、仕事の現場から学生班に戻り、リヤカーを引いて炊飯場まで食糧を取りに行き、盛りつけ等を手伝う。当時としては貴重なご飯（一般家庭では殆ど口に入らない）とうどんが食べられ、唯一の楽しみでもあった。一般家庭ではとんとお目にかかれない物も多く、流石に軍の施設なのだ……などと感心したりして。ただ、醤油は不足気味だったようで、お湯に岩塩を入れ、それに人参（甘み）、更には昆布で色出しをして醤油の感じを出していたように思う。お世辞にも美味しいとは言えなかったが、当時としては貴重だった。

また、学生班の部屋の壁には小さな黒板があり、先生方が適宜問題を出され、希望者はそれを提出し、添削してもらっていたようだ。いまになって思えば、素晴らしいことをして下さっていたのだな……とも思う。

当時にあつては貴重品の保管場所であつた被服廠と言う性格上からは当然なのかも知れ

ないが、門の出入りには厳格な服装検査があった。特に帰りは持ち物検査が抜き打ち的であり、その後隊伍を整えて出門する。しかし、中には、ゲートル生地を体に巻きつけて持ち出した豪の者も居たのだから驚きだ。また、敵機の空襲も何回かは受けた。そんな時には野積みの毛布の山の中に逃げ込み、事無きを得た。何回かは超低空で機銃掃射してくるP-51戦闘機のパイロットの顔も見える程接近してきたこともあった。鉄道線路も被害を受け、電車はストップ、やむを得ず路線を歩いて帰宅したのも忘れられない。

そして終戦、一転して自由な服装、といってもバンカラ風、今の高校生とは一味も二味も違う感じ。しかし、戦争が終わって学校に戻れたと言う喜びは格別なものがあった。決して、勉強することが必ずしも好きとばかりではなかったが、やっと学生生活に戻れ、好きなことが楽しめるようになった点がよかったのではなかったか。そんなことを回想するのも、やはり、老年になったからかな……との思いが強い。

(特別寄稿) (川越高校同窓会長)

ゲートル通学の思い出

清水 陽太郎

日盛りの事務所、机の上にゲートル会名簿を探し出し、さてどんな思い出から書き出そうかと考えていると、傍から息子（三十四歳）が「ゲートルって、なんのこと」と聞いてきた。そうか、もうゲートル自体新しい世代には通用しない物であり、私達自身も忘れ去った遠い思い出、幻のような物かも知れない。「終戦前の兵隊の身に着ける物だが」と言うのと、「解った。膝から下に巻く包帯のようなものかな。テレビか映画で見たことがある。」との答え。やはり半世紀は長かったか。私の青春も遠い昔のことかと考えさせられた。

さてゲートル通学だが入学時（昭和十八年四月）より即、着けていたのか、また終戦と同時に、「ゲートルがとれて自由の風通る。」（*加藤真三君の川柳）のようにすぐ着けなくなったのか、はつきり思い出せないが、とにかく約二年半位はこのやつかいなゲートルを着けて通学したわけである。

武蔵野線で飯能駅―稲荷山公園駅の満員電車にゆられ、稲荷山公園駅から入間川駅まで約二キロの道を歩き、また超満員の西武線で本川越まで荷物状態で送り込まれた。川越の町を歩く道順も指定されていたのか、同じ道順で通学したような気がする。

とにかく電車二線を利用することは普通のことだが、その間二キロも歩くということは特異なコースだ。多分先輩方が時間的、経済的に考えた末の最良の通学経路だったのだろうか。この二キロの稲荷山道（仮称）を往きはなんとなく隊伍を組んで歩き、帰りは授業の終わりがまちまちなので、ばらばらに歩いた記憶がある。この間約二十分位か、今の中学生なら定めし会話は「スポーツ、芸能、衣、食、女性や勉強のことなどバラエティーに富んでいるに違いない。（*現在の自宅が中学校の隣にあり実感中）。当時友人たちと、どんな会話をしたのか記憶にない。多分勉強の話でもしていたかも知れない。将来のゆめなどゲートル着用期間は恐らくなかったか、或いは持てなかったのではないだろうか。国のために生き、国のために死ぬ「海行かば」の精神で国策にそったレールの上に行く以外にない時代だ。赤田君のように綿密な日記でもつけていたならば当時のことを思い出し、感慨にひたり、また多少反省もできるのだが、ほとんど忘却の彼方だ。

稲荷山道の通学は昭和二十年二月で一応終わつたらしい。（*同窓誌「遠い飛行機雲」年

表による。)それから高萩飛行場へ学徒動員である。八高線、川越線、で武蔵高萩までの通学(?)となった。まだゲートルは取れない。飛行機での作業内容もよく思いだせない。防空壕掘り、ベニア板のニセ飛行機作りなどしたことがあるような、ないような、最後の頃は本物の飛行機に計器類を取り付ける仕事をしたような気がする。「勝利の日まで」を信じてロボットのように黙々として働き、合間に少し勉強しようだ。動員生活は終戦まで約半年で終わり、やがてゲートル解放の日となったのであろう。

現在七十歳寸前、先日税理士開業二十五年とやらで税理士会表彰?を受け、前記の息子も税理士五年生となる、そろそろ「老兵は死なず、ただ消え去るのみ」とする時期か。

海洋訓練の思い出

関 眞

私達が入学した昭和十八年は、戦勝ムード一色で、配属将校が幅を利かせている時期であった。

夏休みを利用して、静岡県戸田港で海洋訓練が実施された。日程は五泊六日位だったと思う。一年生の統括は長谷川先生、一年三組の担任は野村先生である。参加する生徒に、前田先生から柔道場で水泳訓練の泳ぎ方の実演や準備、諸注意があった。当時は水泳パンツなど売っていないので禪とのこと。一丈の布でもよし、帯(さんじゃく)でもよいといわれた。実際に禪の付け方を教えてもらった。なぜかという、海にはフカがいるので、フカに出会ったら禪の結び目を解いて、フカより長く大きく見せると、フカは退散することだったのであった。

いよいよ当日となり、強羅まで電車で行き箱根に一泊し、沼津まで行軍で八里の道を歩いた。当時食糧が無かったので、五日分の白米を背負っているので大変疲れた。

歩く自信のない人はバスで沼津港へ先にいった。沼津港での出来事であるが、私の前にいた伊藤君が、乗船するときに、船と岸の間に足をふみはずして海中に落ちてしまったのである。しかし長谷川先生は慌てずに、

「心配するな、必ず一度は浮いてくる、そのときがチャンスだ。」

と。暫くすると海面に浮かんできた。手早く襟をつかみ、みんなで引き上げた。一同喜びと経験の尊さを感じいった。

「ゲートルを解いたら直ちにまき直せ」

と、教官からの教えである。戸田宿舍での三日目のことであつた。訓練を終えゲートルを一纏めにしてカバンの中に入れ、水泳の練習に出かけた。翌日ゲートルが無くなつてゐた。水泳の練習中に教官が調べて、巻き直してない生徒のゲートルを取り上げたのである。私もそのひとりであり、教官に呼ばれ説教された。

内野林郎君の父上が当時、静岡県の高等女学校の校長をしておられて、育ち盛りの私達に、お菓子を沢山下さつたことを、今懐かしく思い出す。 (特別寄稿) (現日高市長)

「ふるさと」考

西 澤 孝

数年前のゲートル会で、同期の茂木宗孝君と話をしているうち、二人とも昔(もう六十年も前になるが)名栗村に住んでいたことがわかつた。私が茂木君と初めてあつたのは川越の中学校に入ったときだから、もう五十年も経っているのに、彼は飯能町の人だとぼつ

かり思っていた。茂木君は昭和十二年に名栗に行き私は同じ年の四月に名栗を出たので、丁度入れ違いだったらしい。その時の会には、たまたま柏木伸六君と浅見敬一君が来ていて、珍しく名栗が四人そろうことになって懐かしかった。

私が川越中学に入学したのは、坂戸の国民学校からだったので、旧友の多くは「西澤は坂戸（現在の坂戸市）だよな」と、いまでも思っているようだ。

父親が学校の教師をしていた関係上、何回か引越しをした。昭和五年八月から十二年四月までは名栗村で過ごした。着物（洋服ではない）姿で、足の方は下駄であったか、草履だったかそれとも、もう靴になっていただろうか定かではないが、山野を飛び歩いていた。蟬指・湯の沢・八か原・白岩・山伏峠など、いま考えると信じられないような範囲である。敬ちゃん（浅見敬一君）と一緒に遊んだのはこの頃のことである。

小学校は、越生町の尋常高等小学校に入った。入って間もなく七月七日に蘆溝橋で事変がおこる。兵隊おくり（出征兵士を最寄りの駅まで送ること）や無言の凱旋を迎えて（戦死した方の）町葬があったりしたが二年生頃までは、まだあまり深刻ではなかった。十六年の夏休みまで、この学校で学んだ。この期間も相当に広い範囲を行動している。自転車に乗れるようになったので、梅園村（当時の）は津久根はもとより大満・黒山・毛呂山か

ら鹿山峠を越えて飯能まで来た。伊勢屋の大福をご馳走してもらうのが楽しみだった。越生町では現在も団扇作りの体験が出来るそうだが、多分団扇の材料の仕入れのあとをくつついてきたのではないか。そろそろ人手不足になっていて、アルバイトのようなこともした。越生の町は古池・大谷・比企郡の明覚（今の都幾川村）あたりまで、よく遊び歩いたものだと思う。

五年生の二学期から坂戸へ転校した。この年の十二月に日本は、米英軍と戦闘状態にはいる。時局も変わっていたのであろう勝呂・三芳野・大家・入西・鶴ヶ島・今宿等（周辺の村々）は歩き回っていない。遠足で行った程度だ。

十八年四月から東上線で川越に通う。いよいよゲートルの登場である。二年生の二月までは曲がりなりにも勉強をした。そしてここから通年の勤労働員が始まるのである。

その後入間川町から豊岡町へ、飯能町を経由して、東京は小石川で十年、現住所が四十年で一番長い。そして今年は古稀である。

ところで、ゲートル通学が廃止になったのは、終戦の年の十月頃らしいから私がゲートルを巻いて稻荷山を歩いたのは、ほんのわずかな期間（たったの二ヶ月くらい）だったという事になってしまふ。情けないゲートル会員で、まことにもって申し訳ないのだが、

推薦して下さった今は亡き畏友「赤田健一」君に感謝している次第である。

ふるさとⅡと言うのを広辞苑で引いてみると、故郷・古里Ⅱ自分が生まれた土地、嘗て住んだことのある土地、なじみ深い土地、古く物事のあつた土地……などがある。

私はどうも考え違いをしていたようだ。生まれた土地で、少なくとも十年以上は生活していなければ、ふるさとは言えないのではないかと……。小学唱歌の「故郷」の歌詞にあるように、如何にいます父母……が居て、志を果たして何時の日にか……帰る家がないと、故郷ではないような気がしていたのだが……。自分の間違いを棚に上げて、言葉というものは時代と共に変わっていくもの——なんて、こじつけて……。

西武鉄道が、冬になると広告の文に「ひだまりハイキング」と言うのを使う。あの言葉を読むたび私は、子供の頃山あいのちよつと広い日溜まりで相撲取りをしたことなどを思い出す。それはある時は名栗だったり越生だったりするのである。今年の冬はそんなところを歩いてみたい。柑子蜜柑や柚子が実り百合の根が採れる、そんなところを……。

古い地名や交通機関がなくなってしまうたりすると淋しい。世の中の動きに抗しきれない難しい問題のひとつなのであろうか。ゲートル会の皆さんは、素晴らしい故郷があつて、

羨ましいかぎりである。これからは、私も入間郡を中心に比企・秩父・北足立から東京までも巻き込んで故郷にしてみまおうと考え直すことにした。

ゲートルの思い出

茂木宗孝

ゲートル会について書くというと、なんとと言っても「ゲートルを巻いて、稻荷山を歩いて通学していた旧制川越中学生時代の思い出」と言うことになる。しかし私は、この厳格な意味での定義からは少しはずれる。なぜなら父の職業の関係で転々と住所を変えており川中への進学は高麗小学校からであった。同級生は「新井隆夫」「新井俊康」の両氏と小生の三人であった。通学は飯能を起点とし川越の久保町までを運行区間としていた帝産オートバスが高麗経由であり他の交通手段に勝っていたため、必然的に利用せざるを得なかった。乗車は家のすぐ前の「高麗宿高麗神社入り口停留所」である。同じ停留所から乗車の川中生は、高麗澄雄先輩、細田久夫先輩と私の三人であり一年後輩に横田弁明氏が加わっ

たのを覚えている。勿論同級生の新井俊康氏も別の停留所から乗車し、飯能からは橋本和夫氏、小林茂氏、遠藤満氏、原口幸雄氏、橋本長治氏の諸先輩がいた。さらには、川商生の林さん（金春経営者）、滝沢さん（滝長店主）などもいて、さながら通学バスのような状況で古いおんぼろの木炭バスで、ガタピシとゆれたり、途中でガス不足となり、木炭を追加してガスが出るまで悠々と釜を養生したりする運転手を手伝いながら（結果として遅刻の常習犯）結構楽しい通学を味わっていた。

後で他の通学コースの話と同級生から聞くと、上級生のすごいのがいて、しごかれたりいわゆるお説教が当たり前にやられていたらしい。しかし、我が帝産バス通学には、諸先輩にはかわいがられこそすれ、お説教やしごきは一切無く、私たちは良い先輩に恵まれたものと感謝している。

入学一年を経ぬうち父の転勤で飯能の中山に引っ越し、引き続き飯能の現在丸広百貨店となっている場所のバス発車所より乗車して通学した。折しも進んでいた太平洋戦争もたけなわとなり、戦局急をつけ我々中学生にも勤労働員令が下り、昭和二十年二月より高萩にある陸軍航空士官学校高萩飛行場への勤労働員が命ぜられ川越線で高萩に行くようになった。

最初に命ぜられた作業は、空襲に備えての指定された場所への防空壕掘りで、それが終わると今度は近隣の山林の中へ飛行機を隠すエンタイ壕（木と竹を骨材として組み上げ、飛行機を入れて隠せるように木や竹の枝を差し込んだもの）作りが日課であった。材料は木材の杭、青竹、しばる材料は縄と藤つるで、小さい手を痛めながらの作業であった。

しかし、この作業もまもなく終了し、作業のない手持ちぶさたな日を過ごしていると、突然航空士官学校が米軍の本土空襲から逃れて満州に移転するということになり、その移動が始まった。我々は学徒でもあり主要部分の作業には関わらず、与えられた仕事は空のドラム缶を飛行場より高萩駅まで運ぶ仕事であった。

ドラム缶の搬送であれば、現在なら当然トラック運送であるが、当時は学徒の人力の使い方としてドラム缶をゴロゴロころがして駅まで運ばせるのが適当な方法と考えたのである。一人一個ずつを受け持たされ転がすが、当時中学低学年の少年の体力（小生は早生まれのため体格はクラスでも前から三番目位で小さかった。）ではなかなかうまく転がらず、やっとの思いで高萩駅まで約一キロ半をたどり着いたことがつらい思い出として残っている。

航空士官学校が満州に移転した後は、格納庫群の半分に立川の航空工廠が移転してきて、

陸軍の軍司令部偵察機の組み立て作業が始まり、我々学徒も引き続き残留し各部署に分散配置されて、作業を手伝うこととなった。軍司令部偵察機といっても最新型の新司偵のようなものではなく、単発複座で固定脚（脚の引き込まないもの）旧式のもので、当時部品が残っていて組み立て完成出来る飛行機はこれくらいしか無かったのではないかと思う。そしてこれも本土決戦に備えて特攻機に改造して使う目的であったのであろう。私はエンジン給油配管取り付け部門に配属され、全く勤労意欲に欠ける徴用工の中に混じって、早く飛行機を仕上げなければ戦に負けると一途に愛国心に燃えて取り組んでいた純情な少年であつた。

飛行場の一部分には航空戦闘飛行部隊が駐屯し「はやて」と呼ばれた四式戦闘機部隊・数十機が訓練をしており、大いに我々少年の興味を満たしてくれていた。興味といえばこつそりと駐機してある飛行機に近づき、操縦席をのぞき込んだりさわったりするのが誠に楽しかった。時々飛行場に別の隊の、一式戦（隼）、二式戦（鍾馗）三式戦（飛燕）などが、連絡か給油のために飛来して注目を浴びていた。

これらの中で鮮烈な記憶に残っているものが、特攻機キ一七型機（名前はまだ付いていなかった）である。当時の情報によれば、残っていた隼のエンジンに小型のブリキで作

った機体。フラップは木で出来ていた。座席の中には、計器は速度計と燃料計のみで、操縦席前方には体当たりの目標にあわせる木の棒で出来た標準器が取り付けてあり、飛ぶために必要最小限のものみの飛行機であった。なお機体下には、一トン爆弾を取り付ける金具が有り、脚は油圧クッションなど全くない鉄の棒に車輪がついただけで、翼の部分に差し込んでピンで止めてあり、出撃で離陸するとピンを抜いて脚を落とし戻れない仕組みとなっていた。正に人間爆弾飛行機で、無理に引き返して胴体着陸すれば、爆弾で吹き飛んでしまうという壮絶なもので、みていて背筋が寒くなり戦争の凄まじさをまざまざと見せつけられた想いが強烈に残っている。

この高萩の学徒動員中には、グラマンなどの艦載機の空襲を数度経験した。この中には高萩飛行場から高麗川駅を機銃掃射されるなど、一連の空襲もあった。このことについては他の方がふれられると思うし、私自身以前川中四十七期の仲間が発行した。「遠い飛行機雲」のなかに記述したので、今回は省略することとする。

戦争が終わり、復学することとなったが、この時帝産オートバスは、車両不足燃料不足で廃線となり、やむなく武蔵野線で飯能駅から稻荷山公園駅まで行き、そこから歩いて西武線の入間川駅まで、更に電車で本川越駅まで行くルートで通学することとなった。従っ

て私は、稻荷山はゲートルを巻いてでなく、戦後の進駐軍のジープが走り、米軍戦闘機のP-51がゴーゴーと飛び交う中での、ゲートルも巻かず、手作りの鞆に、うすつぺらで墨で黒く消し込みのある教科書と、裏白の紙を綴って作ったノート、母の作ってくれた弁当（時にはサツマイモ一本）を肩にして、通学した経験しかなく、「稻荷山をゲートルを巻いて通学した川中生」という正統派条件からは少しはずれたゲートル会会員と言うことになる。

しかしながら我がゲートル会は関谷会長以下同窓会会員諸氏は寛大な基準で加えられ何の隔たりもなく同じ仲間として昔をしのび親交を深める会となつて、我々の心のふるさとの会となつて益々盛会となつている。誠に有難く感謝申し上げる次第である。これからも末永くのご親交を、心からお願い申し上げて筆を置くこととしたい。

飯能ゲートル会万歳！

思い出あれこれ

山崎 節 夫

物資、生活面の欠乏時代、憧れの中学校へ入学、これから勉強、又たのしい学窓生活を
と希望に満ちた時代。戦況の悪化と共に毎日の通学は困難、食糧増産の為農家に応援、農
繁期ともなると週に一、二日の学園生活となり久方振りの全員登校日、校長先生等の話も
軍事色が強くなり、社会は適令期男子に召集令状が来て駅にて戦地に行く人が多く見られ
る様になった。その内私達にも長期学徒動員となり、軍需工場高萩飛行場へと行くことと
なる。毎日飛行機の油まみれの仕事、時折飛行兵の「キ一〇一号」機乗の姿を見る時、若
き命を捧げる若人の姿を送る時、胸のつまる思いがし、何も云わず身を徹して頑張ったも
のである。一日の仕事が終りに近づく頃、空襲警報発令、B-29来襲、大飯線列車はストッ
プ、止む得ず高萩より鹿山峠を経て飯能の自宅までテクテクと歩いて帰る日も多くなつて
きた。同僚達とは空を見、身の危険を感じつつ腹ペコペコにて帰宅、代用食にて満足せね

ばならない日々が続いた。

二十年八月敗戦、お互い一時路頭に迷ったものである。幸いに学校、自宅共戦災にあわず即学業に転換出来たが、世相の不安から一時は茫然となる日もあった。時折学校の休み時間、放課後友人達と講堂のうら庭にて何となく幼き人生哲学を語り合ったものである。

通学中、稻荷山公園駅より入間川駅まで歩く、戦後入間基地に米軍駐留軍の駐屯、その様子をみる折、何ごとも「勝てば官軍」と云うことかと、これからの人生は何ごとも勝たねば駄目だと信念にもえたものだった。

年もかわり学業も平常に戻り、やっと個性ある生活が開けて来た感がし始めた折、ゆとの時間も出来始め、文庫本の購入、図書館行きと自分なりに将来像が出て来た。自由な意見も云える様になり時折会談に夜更かしする時もあった。

旧制中学卒業、社会人となり約半世紀、五年前に自由の身となる、幸い健康にめぐまれお陰様にて残る人生を、たのしく送りたい。諸先輩皆様方のご指導を願いつつお互いに身体に留意しつつたのしみをもちたいものである。

準 会 員

吉 野 重 彦

ゲートル会の思い出をそれぞれ小文に綴ってまとめたらという話があったのは、確か昨年十二月の集まりの時だったと思うが、よく考えてみると、私はゲートル会の準会員の資格しかない。

今、飯能に住んで皆さんのお仲間に入れてもらってはいるが、川越中学当時、私は武蔵高萩駅から川越線で通学していた。西武池袋線で稲荷山公園まで乗って、そこから入間川駅まで歩き西武新宿線に乗り換えるという、ゲートル会の一番大事な？体験を共有していないのである。

当時の川中生にとって通学の路線は、今の自民党の派閥か識別符号みたいなもので、「東上線の何某」であったり、「自転車通学のだれそれ」であったように思う。だから、「川越線の吉野」は、大集団の西武線通学の川中生からみれば別派閥であり、川越線組は終始一

貫マイノリテイであつたように思う。

当時の川越線下りの通学組は総員十名余りで、関君・東君・北野君・平井君と同級生が五人もいたのが不思議な位の小集団であつた。従つて、私は「ゲートルを巻いた川中生であつた」という共通点はあるても、「稻荷山から入間川まで歩いた」という最大の資格要件に欠けるといふ意味で、やはり「準会員だ。」と思ふのである。

しかし、ゲートルといふ不思議な軍装が、いつから中学生の制服の一部に採用されるようになったのだろうか。察するに、ゲートルは行軍・野戦の際に足許を守るばかりでなく、戦地では時には緊急の仮包帯となり、丈夫なゆわえヒモを代用し時には命綱となつて大いに役立つたに違ひない。したがつて日ならずして帝国陸軍に召される筈の中学生たちにも、当然その日に備えてゲートルを巻かせる、しっかりと巻けるように教育しておくといふ発想があつたとしても何ら不思議はない。当たらずとも遠からずといつてよいであろう。

しかし、ゲートルは不馴れな一年生にとつて、誠に厄介な代物であつた。六十年も前の遠い記憶を辿るしかないが、当時のゲートルの布質は戦時下のことで誠にお粗末。よほどしっかりと巻かなければ緩んでズリ落ちてくるような素材で、ゲートルに付いていたヒモも人絹か何かのすぐペラペラによれてしまうものだったように思う。通学の途中で緩んでズ

り落ち、足首のところにとぐまつてしまったりしたことも再々だった。授業に遅れないように——川越線の場合、二時間に一本の列車ではいつも遅刻だったが——半ば駆け足の通学途上でゲートルがほどこけた時どうしたのだろう。恐らく路傍で大急ぎで巻き直して駆け足で追いかけたに違いないのだが……。遠い記憶の糸を辿ってもどうしても思い出せない。ゲートルを巻きはじめた一年生のころ、ゲートルが緩んだりほどこけたりした時の情けない、やるせない思いは、ゲートル会の仲間たちが共有する思い出の一つではないだろうか。終戦後、ゲートルを巻かなくてもよくなった時、何となく足許を風が吹き抜けて行くような頼りなさ、そして、姿・カタチがだらしなく感じられたのも今となっては懐かしい思い出である。

今の子供たちはゲートルの巻き方を知らない。ゲートルという言葉すら知らない。ゲートルという言葉に少年の日の夢を重ねられる世代も古い、時代も変った。今の少年たちは年老いた時、少年の日の記憶を何と重ね合わせるのであろうか。戦中から戦後へと激動の昭和を生き抜いて来た私達は、衣食住すべてに貧しかったが、ゲートルをしつかり巻いて直立不動の姿勢をとった時の、凜とした緊張感を味わって少年期を生き得たことを、幸せだったと思うべきなのであろう。

第五章 あゝ軍国少年

— 中四十八回・高二回 —



富士の裾野集団訓練 (S19. 4)



つもる話を聞いてくれ…



神妙な紳士たち



かたずをのんで…



少し照れるなあ…

少年の日よいずこ

浅見敬一

私は子どもの頃から内気で人前で話をするのが苦手な性格だった。それが戦時下、名栗の山奥から親元を離れてよそに下宿して川越中学に行こうという意気込みがあったのは自分ながら感心している。小学校も当時は徹底した軍国主義の教育で、少年であつても敵兵に竹槍を持って立ち向うような精神教育をたたきこまれていたので、家を離れた生活でもホームシックなどなかつたような気がする。

私が名栗西小から受験する時は交通も不便であり、初めての川越なので父がつきそい、前日佐久間旅館に泊つて受験した。その日学校に下見に行つて風格のある木造校舎に感激し、本当にこの学校に入れたらすごいことになるぞと身がひきしまる思いがした。翌日の試験科目は体力テストが主眼で、百米走・ボール投げ・懸垂等であつた。私は運動には多少自信があつたので運よく合格できたものと思つている。

昭和十九年春の入学当時はひどい食糧難であつて下宿させてくれるところなどなく、何とか親戚先ということで、現在は狭山市当時奥富村の広福寺というお寺にお世話になり、学校まで二里の道を自転車に通学した。

一年一組に入り、飯能では井上・山口君が一緒であつた。私は山村の名栗出身の「山猿」略して「エンちゃん」と誰かが言いはじめクラスの人達に親しまれた。当時は勉強よりも軍事教練や、荒川の学校農場に岡田幹ちゃんに連れられて農作業によく行つた。六月の農繁期には名細の農家に麦刈に、十月には高萩の農家にサツマイモ掘りに行き、お茶の時間にはおいしいお茶菓子がいっぱい出てそれが一番よい思い出である。

入学して間もない五月二十八日、開校記念日に全校（一、二、三年生）マラソンがあり、はじめて長距離を走つたが一生懸命かけたら上位入賞したため「名栗の浅見は速かった」ということで注目され、それをきっかけに山から出て人も人に負けない自信がついた思いがした。

昭和二十年、戦争がますますはげしくなり、二年生になって上福岡の火工廠に勤労働員に行くようになり、下宿を代えたが探すのが大変だった。同じクラスの佐久間春男君宅で旅館をしているので無理矢理頼み、時折押麦（名栗では米がとれないので）と薪や炭の燃

料を持たむ条件で泊めてもらい以後卒業するまでお世話になった。今は亡きおかみさんが恩情のある人で私を家族の一員として温かく扱ってもらい、今でも深く感謝している。

戦時中は男たるものお国のためにつくすよう軍人になることが男子の本懐であった。二年生になって陸軍幼年学校を受験する資格が与えられ、私も軍人になることを希望していたので受験手続きをとり、火工廠の狭い一室で何回か受験の特訓を受け、第一次試験は何とかパスし、第二次は書類審査のため八月十五日名栗村役場に戸籍謄本をもらいに行き自宅に帰宅したとき、天皇陛下の玉音放送を聞いた。あの時ほど不安な複雑な思いにかられた事はなかった。終戦を迎え戦争の犠牲から逃れ、人生が大きく変り、平和な世界に生きられることになる。

昭和二十五年三月高校を卒業、六年間過ごした川越を引きあげ名栗に帰って父の後を継いで林業経営に従事した。当時材木は戦後の復興ブームで大盛況の時代だった。私は迷うことなく広葉樹の山を杉松の人工林の山に代え約二十万本位の植林をし、若い情熱と青春のすべてを山にかけた。雨の降る日もわらみのを着て草刈りをし、北風の吹く寒い日も高い木に登って枝打ちをした。二十才台に植えた杉松は、現在伐期を迎えているが時代が変り山林は底なしの大不況で、立木の価格は驚く程安い。これでは汗を流して育てた木を売

る気にはなれない。若い日の夢は露と消えた。

然し私が少年の時、初雁の校舎に学び六年間過した川越の体験は大きな財産であり、立派な諸先輩や信頼ある同窓生をたくさんもっていることが私の誇りとして常に私自身を支えている。少年の日の思い出がなつかしい。

戦時中の思い出

石井勝己

ゲートルと私

今の若い人にゲートルと言っても分からないと思いますが我々の中学生時代は終戦を迎えるまで日常生活でゲートルは切っても切り離せないものでありました。入学早々に軍事教練の第一歩としての、富士の裾野の楽山荘での合宿訓練はゲートルの巻き方と行進で始まりました。ゲートルの巻き方は手早く巻くだけでなく、巻き上げの終わりを膝下の外側真横にもってゆかなければならず最初は非常に難しいことでした。巻きながら途中で終末

を会わせようとすると、緩んで、歩いているうちに下に落ちてゆき叱られたものでした。巻き始めは軍靴の上からするのが普通でしたが、時間の関係から巻いてから靴を履くとすぐばれて、また叱られたものでした。ゲートルについては様々な思い出がありますが、これを巻くと不思議に気合が入ったように思えました。川越中学に入学してからは朝六時に起きて駅へ跳んで行くという厳しい通学でしたが、時間が間に合わなかったりして稲荷山公園駅から入間川駅まで駆け足をするにはゲートルを巻いていたのがよかったようでした。一方、ゲートルを巻いていて一番大変だったのは今もって理由が何であつたか分かりませんが、ゲートルを巻いたまま校庭に正座させられた時でした。そうでなくても正座をすれば足が痺れるのに、ゲートルを巻いたままではあつと言う間に足の感覚は無くなり、モゾモゾ動けばヒツパタカレルし、地獄の責め苦を味わつたものでした。中学一年生としてはゲートルを巻いて登校するのが一人前になつたような気がしたものでした。また、飯能地区（武蔵野線）の先輩は後輩をかばってくれるとの話を聞き安心したものでした。他地区の先輩にお説教を食らっているのを助けてもらったとの話を伝え聞いたものでした。飯能地区の先輩は成績の良い人が多く、他地区の先輩からも一目置かれているようだということでした。

ゲートルとは関係ありませんが、当時は西武線入間川駅で電車に乗るのに中学生と女生の乗る車両が異なっており、間違っても女学生の車両に乗らないように言われたのも礼記の「男女七才にして、席を同じゅうせず」が規律の一つとして戦時中の厳しい生活の中で行われたもので、今では全く考えられない事態でしたが、終戦後もこの習慣はしばらく続いていったように思います。

学徒動員

一年生の冬からは上福岡の火工廠に動員されて対戦車地雷の信管作りに従事し、戦時下の中学生として国のためとの意識を植え付けられたものでした。学校へは週一日位しか行けず、その時何を勉強したのかあまり憶えていませんが、学校で机を前にすることが無性に嬉しかったような気がしました。火工廠では小さなチューブの中に点火薬を詰めてその中に白金線の付いた発火装置を入れその上をグリセリンで練った黄色セメントで覆い固めて信管を作る仕事でしたが、火薬が乾燥し過ぎると少しの摩擦でも発火する恐れがあり、今にして思えば大変危険な仕事をしていたものでした。ある時グリセリンを誰かが嘗めてみたら甘くて美味しく、皆でそつと嘗めたりして甘さを楽しみました。その後、母にグリセリンが甘かったと話をしたところ、それは浣腸薬だと聞かされ吃驚して、それ以来嘗め

るのを止めました。

空襲になるとラッパで警報が知らされ、全員防空壕に入るので、ある時昼休みの間に同級生の新井君と二人で空襲ラッパの真似を口でやっていたところ、周りがいやに静かになったのに二人で気付き口真似を止めたが後の祭り、全員防空壕に入ってしまった二人の口真似による待避がばれて、後で二人ともピンタを食ったのも今となってはよき思い出です。普段はあまり怒らない鈴木先輩がこの時ばかりは真剣に怒っていたようでした。川越線での帰宅の途中や、上福岡の田圃の傍で米軍機が低空飛行して機銃掃射してきた時に平伏して逃れたのも今にして思えば夢の一こまのようです。

戦時中で物資も乏しく、大変な生活でしたが無事にあの厳しい時代を乗り切る事ができたのは良き先輩や友人に恵まれたお蔭で、今にして思えば楽しくもあり幸せな日々だったと思っております。

私のゲートル時代

海野 武人

今年^は昭和^で言えば七十五年。私が川越中学へ入学したのは昭和十九年四月。あの太平洋戦争敗戦の前年であった。「私のゲートル時代」は一年四カ月半である。

私は昭和時代の終る五年程前、社用で中国出張があり、人民服の最後の頃の上海でその貧しさが日本の戦争直後に似ているのをはつきりと見た。それはたかだか三十年余りの才月が隔てた彼^我の国情の違いであったが愕然とした。このカルチャーショックから昭和時代六十年間に興味を抱いて少しばかり読んで調べたことがある。それまでは時代に流されるばかりで、ついぞ後を振返ることのなかった生活であったが、ここで少し自分が変わったような気がする。

私達の世代は、もの心ついた時にはすでに国は戦争に関わっていた。昭和六年産まれてすぐに満州事変、昭和十三年飯能第一尋常高等小学校入学その前年に支那事変。昭和十六

年校名が変った国民学校四年の冬に太平洋戦争、そして昭和二十年川越中学校二年の夏の敗戦まで、文字通り泥沼の戦争が続いた。亡き先輩赤田さんの遺作のような十五年戦争時代の申し子「軍国少年」であった。小学校六年生の卒業間近かに川越中学校入試の口頭試問の予備練習があったとき、将来の希望を問われて予め姉に教えられた通りに「医者になって困っている人を助けたい」と答えて叱られた記憶がある。時代はもうそんな悠長なものではなかった。川越中学といえば私の最も古い記憶は、国民学校六年一組の教室で、休み時間にノートに書いた川越中学の校章。それは私のすぐ後の席の高橋豊二郎君が教えてくれたものである。三本の初雁の羽根に「中」三つ。幾つも書いてみた。それはあの頃我が家は必ずしも中学進学にふさわしい余裕のある家庭ではなかったが、早く小学校を卒業したい私はまだ見ぬ川越中学校への進学に胸を弾ませた。

そして入学試験。今、手元にある昭和十九年二月二十六日の「読売報知」新聞に中学校の入試倍率が載っている。川越中学合格定員二〇〇名に志願者三〇〇名、丁度倍率一・五倍である。因みに、浦和中学が二五〇名に三二〇名、熊谷中学が二五〇名に三五六名、川越高女が二〇〇名に二八七名、飯能高女が一〇〇名に一九二名で中等学校が少なかったためか、意外に倍率が高い。この日の新聞には、内閣情報局発表の決戦非常措置要綱として

中等学校以上の学徒動員体制の徹底と学校校舎の軍用・非常用化、女子挺身隊の強制加入、疎開の促進徹底、旅行・興行・歓楽の自粛禁止などと暗雲がただよい、一面のトップはルオット、クエゼリン両島六五〇〇名の軍民玉碎と悲壮である。

入学試験は内申書が主で、身体検査と運動能力テストがあつた。百米走は菊池好太郎君と並んで走つた。鉄棒懸垂はズラリ並んで力のない奴から落ちるので歯を喰いしばつてがらばつた。回数は覚えていないが固くなった手の感触は忘れない。合格発表の日、誰かの父兄が川越まで見に行つてくれたとかで、これも誰と一緒にだつたか定かでないが飯能駅で待つていた。私の受験番号は四十二番で長姉が不吉だと心配していた。到着電車からは乗客に混つて白線一本の川中生も降りてきた。そのとき、背の高い生徒が改札口に寄つてきて私の胸の名札（大日本青少年団の胸章）を見てニッコリと「君は海野君か？合格してるよ」と吉報を教えてくれた。私もすっかりとその人の胸の名札を見た。その人は関谷昭先輩であつた。私にとって生涯有数の喜びの一つを手にした一瞬であつた。

当時の資料「入学に関する準備」には授業料月額四円五十銭、制服二十円、制帽二円八十銭、ゲートル二円五十銭などと記されている。制服だけは買おうにもすでに手に入らなかつた。

昭和十九年四月八日（土）川越中学校入学。改めて楠の大樹を仰ぎ見たのを覚えている。時代は子供ごろにも急迫しているのが判っていたが、これから何ものかに向って否応なく進んでゆく将来に希望も不安もあった。入学式の激励の言葉を一つだけ覚えている。「今日から君等は川中生だ。プライドを持って！」。英語は使いにくくなった時代にプライドという言葉を始めて知った。ABCより先に覚えた英語である。「隣の家へ行くのにも服装を整え、制帽をかぶり…」と言われて身が引きしまった。いよいよもう子供じゃないぞという気がした。一日置いて四月十日（月）から十五日（土）までの予定で新入生全員が始めるの「教練」合宿で富士の裾野へ出かけた。御殿場駅から歩いた。教練は服装、不動の姿勢、正常歩、かけ足、敬礼、教官室の入退室、行進などで、身のこなしの初歩を毎日毎日続けた。クラスは四分隊に分けられ、この年予科練に合格し入隊を間近かに控えた四年生が分隊長として面倒をみてくれた。夜中に全員叩き起されて持物検査があり、持込み禁止のおやつは泣く泣く早々とすべて取上げられた。ワラのような茎のついた菜の花が咲いている味のうすい味噌汁も仲間共通の思い出である。この御殿場の宿泊教練については、今年の六月九日、私達の同期会で五十六年ぶりに約四十名が参加でその地を再訪した。正確には板妻軍教廠舎といい、もとは地元玉穂村が建設した当時の修練施設、「富士休養学園」楽

山荘」であった。荒れた裾野の木造の建物はすでになく、現地は陸上自衛隊板妻駐屯地となっていた。

川越中学校の授業のテンポは早く、どの学科も少年の知識欲を十分に満たすものであった。私は中学一年の始めから帰宅後一日何を何時間勉強したかの表を残している。中間と学期末考査の時間割りも、そのための試験勉強時間も、何点位かの自己採点予想も書込である。まだこの頃、軍国少年としてまじめな一年生であった。しかし戦局は次第に陰くなりB・29の爆撃は日を追ってその間隔を縮めて拡大し、学校はそのうちに上級生が次々と動員で工場へ駆り出され、本川越駅からの四列整列駐足登校も隊伍を組めなくなった。やがて登校しても学校は一年生と二年生だけという寂しい状態になった。私達一年生も手不足の農家へ農作業の応援に出かけた。私達はその後二度と経験することのない田植えも麦刈りも実際に体験した。春の冷たい田んぼの水、小さいがしつこいヒル、大事にしてくれた農家の人達、空腹においしかったじゃがいものおやつ、あぜ道や畑の道を歌いながらの帰り道。こうして中学はもう授業だけでは済まされなくなった。一学期の末頃校内マラソン一万里があった。始めての経験で恐ろしい距離に思えたが無事完走できた。中学校に入って東洋史、西洋史と少し開きかけた目にもう世の中は見えず、ラジオ、新聞から

は景気のいい戦果は消え、次第に沈うつなニュースが増えていった。その頃、誰かが持ってきた新聞(?)に「四年目の神機」「学べ他山の石」などという記事があつてむさぼり読んだ。今思えば蔭の新聞だったのだろうか。むしろ敗戦の予告に感じとれた。とにかく日本は明らかに敗戦状態に入つていった。十三才ながらやがて必らず戦争に征く、国のためにあと数年の生命を自覚していた。幼年学校や陸士、海兵が話題になり、通学電車内では少し進んだ受験勉強もした。

昭和二十年二月十五日、私達はまだ二年生なのに年間を通しての工場応援いわゆる「通年動員」に駆り出された。そして敗戦の日までの丁度六カ月間、東上線上海岡駅にほど近い東京第一陸軍造兵廠第一工場川越製造所へ武器製造の応援に通つた。私達はそこを「火工廠」と呼んだ。ここはここで思い出が尽きない。棒地雷、導爆索、点火信管その他危険な作業に従事した。女学生達は落下傘を作つていたという。小さな火傷やケガはものともしなかつた。先輩には事故死も出て校葬もあつたが、火工廠のことは口止めされていた。登校は一週間に一日となり、文字通り国を挙げての臨戦態勢であつた。この勤労働員には報奨金が支払われたが、同期の友人がその計算伝票を保持している。それによると、昭和二十年六月分として交付金二十二円とある。ここから天引きの形で七月分の授業料の四円

五十銭、父兄会費一円五十銭、報国団費三円三十銭、特別会計繰入金一円五十銭が引かれ、本人には手渡金として十一円二十銭となっている。本人名義の貯金らはゼロとなっているから、この手渡金は実際に受取ったらしいが、私には記憶がない。要するに十三才の中学二年生はあの敗戦直前に一カ月大体二十二円から二十七円位働いていたのだ。この頃、この動員の行き帰りの電車・汽車は朝から或いは一日中の空襲で通うのもままならず、ときにはいつ来るとも知れぬ帰宅の列車を待つて農道に寝ころんで、空腹を抱え夕暮れ近い青い空に白く光るB29を数えていた。今でも飛行機雲を見ると思ひはこの頃に直結する。少年ながらこの戦争、この国、この私達はどうなるのかと人には言えず哀しかった。通学途中で空襲に遭い家の中や防空壕に入れてくれた人、機銃掃射の音にあわてて逃げ込んだ電車の下、一列になって渡る鉄橋、鹿山峠の線路を踏んでの歩いての帰宅、空を仰げばB29への豆つぶのような小さな戦闘機の体当り、落下傘でゆらゆら降下する米兵乗務員、どれをとつても今の平和の日々にはない場面である。そのうちに朝からの空襲で家を出ることもできない状態になった。

敗戦の日は自宅で聞きとりにくい聖音に耳を傾けた。後日、この日を「喜こんだ、嬉しかった」と新聞、ラジオ、テレビで沢山聞かされたが、戦争に敗けた瞬間を喜ぶほどま

だ大人ではなかった。ただ呆然として、やがて哀しみと不安に襲われた。どう反応してよいか判らない軍国少年であった。こうして「私のゲートル時代」は終った。この日を境にしたその後の川中、川高生活はゲートル時代とは言えないかも知れないが、心身ともしなやかな時代に世の中の混乱や生活苦などとは別な若い楽しい日々があった。川越に通った六年間は私の人間形成に大きな意味を持っている。

実はこの原稿はなかなか書き出せなくて困ったが、始めたら次々と思ひ浮かぶことがあって止まらなくなった。断片的なシーンが押寄せてくる。入学早々の部活動の勧誘、大人のような上級生で一年生の身体は固まった。「飯能出身は籠球部に入れ。」これは否も応もなかった。本川越駅からの隊列の指揮をとった打木さんのツギハギの見事な黒い服と落着きと威厳。飯能駅からの家路で配属将校海北中尉と五年生の入子さんの後を小さくなって歩いて歩いたこと。入子先輩は中尉と普通に話している。私も中尉に優しく声をかけられたが息が止まりそうであった。高麗川駅前で西島さんの壮途を祝った円陣の合唱。動員先の火工廠で名前のアイウエオ順に殴られた壕の中。それを途中で救ってくれた今は亡き五十嵐先輩。などなど。

紙数がオーバーしたので止めるが、あの短い期間に凝縮されたものは一体何であったの

か、しかしどれもこれも私にとって大事な一コマであったことは間違いない。

アンビリーバブル

及川湍夫

「ゲートル時代」それは戦争真っ只中の時代であり、現在の感覚では及びもつかない、全く異った価値感の存在した時代であった。

今、当時の我々と同年代の若者に、当時の出来事を話しても「信じられない」と言われる様な、アブノーマルな時代であった。

ではあったが、善悪は別として、我々は二度と得られない貴重な体験をしたと考えるべきであろう。当時の出来事から、思い出されるいくつかをお話したい。

一、空襲三題

その一、体当りの瞬間を見た。

当時、学徒動員で桜の花の形の中に学徒と記した胸章をつけて、上福岡の火工廠へ行っ

ていた。その途中の出来事で、B・29の来襲に遭遇した。空を見上げると大きなB・29が悠然と北へ向っていた。目をこらすと、豆粒ほどの小さな我が戦闘機が大きな機体の回りを飛び回っていた。必死で迎撃していたのだろう。

すると、やおら翼の右エンジン部分に体当りで突っ込んだのが見えた。やがて白い煙が流れ出し、それが大きくなり機体が傾き、パラシュートが二つ開き墜落した。「やった！」と小躍りして戦果に拍手した。

年は移り、戦後となり、私も親となって、戦争の話に及ぶことがあると、まっ先に当時のこの光景が鮮烈に蘇えって来て、涙をこらえることが出来ない。突っ込んだ若者の一途な気持、家族の気持が痛く思いやられてならない。

その二、敵編隊を一機で追いかけた

飯能駅の南にあるグンゼ製糸が国に接收され、大きな煙突のある軍需工場となっていた。そこが、P・51の編隊に襲撃された。私は一丁目のお稻荷様に向い側の飯能木材の建物の蔭からこのあり様を見ていた。数回の機銃掃射の後、一列に隊列を組み直し、八王子方面へ引き上げ始めた。その時、突如、バリバリというエンジン音と共に、たった一機追いかけて行った。高速で追いついた性能の良さに驚いたと同時に、たった一機で追いかけた

勇敢さに身ぶるいをした。矢風方面の山に陰れて結末はわからなかったが、どうなったの
であらうか。

その三、畑を必死で駆けぬけた

学校の帰途、西武線の南大塚と入間川との間の出来事であった。突如電車が急停車した。
空襲だ、それ逃げろということで、畑の向うに林があったので、それを目掛けて一目散
に走ったこと走ったこと、とに角必死で駆けぬけた。何の畑だったか、敵機が来たのか、
記憶がないが、走りに走ったことが妙に頭に残っている。

二、通学時の汽車・電車三題

その一、鹿山峠の出来事

八高線はよく遅れた、その時も高麗川駅で二時間遅れと表示板に書かれていた。歩いた
方が早く帰れると皆で線路を歩き出した。鹿山峠にさしかかった頃、後から貨物列車が喘
ぎながら登って来た。燃料の質が悪いのか、全くのノロノロであった。貨車のとっ手にぶ
ら下がり、ラクチンとばかりに引っ張って貰っていた。すると小用を催した。用を足して
も間に合うなと思ひ、手を放し線路脇で用を足し、ゴトゴトと前に進んで行った貨車に小
走りで追いつき、またぶら下った。何とも愉快であった。さすがに峠の下りになるとスピ

ードが急に早くなるのでタイミングよく手を放した。つつじが咲いており、花を口に喰えた記憶があるので初夏だったのだろう。

その二、友人が貨車から飛び降りた

帰途、入間川駅から稲荷山公園駅まで歩いた。接続時間を気にしなかったのか、時計を持つていなかったのか、適当に歩いていたが、駅が見える長い砂利道の直線を歩いていると、踏切のカンカンが鳴り出した。それとばかり一斉に駆け出した。乗れた時もあったが、乗れない時も結構あった。すると、その後、タイミングよく貨物が通過する時があった。その時にも来たので、やおら線路道を追いかけた。次の豊岡町（現入間市）駅で停車しているのに追いついた。無蓋貨車に乗ってやれやれと出発を待った。駅員からは何とも言われなかった。ガチャガチャガタンと動き出した。一緒の中に元加治から来ていた友人が居た。仏子を過ぎ、鉄橋を渡り、元加治駅に近づいた。前回は仏子駅通過の際はスピードを落し、元加治駅も同様で楽に飛び降りられた。実はこれで三回目。前回うまく行っただけで味をしめたのだが、今回は逆に速くなった。友人は、とも角飛び降りる体勢をとっていたのだがスピードアップしたので、一瞬躊躇したが飛び降りた。もんどり打って転げ回るのが見えた。心配したが次の日元気で出て来た。彼の名は新井隆治である。

その三、男女異輛

朝、ゲートル姿で稻荷山から入間川へ歩いた。駅の改札を入ると左側即ち本川越方面へ進んで電車を待った。来た車輛は二つ、前の車輛は男子生徒、後は女子生徒と分かれていた。たまに時間ぎりぎりですべり込む時は、改札口に近い後の車輛になるので、その時は目のやり場に困った。うつろなまま次の南大塚でわざわざ前の車輛に移るのであった。尤も中には意識して常に後に乗っていた者も居たが、お説教されたかどうかは知らない。

以上断片的で面白くも何ともない出来事であるが、時は戻らない。私にとってはその時代の貴重な体験なのである。先年野球を見る機会があった。試合開始の前に国旗掲揚と国家斉唱があるのだが、「ご起立の上……」とアナウンスで呼びかけているのにも拘らず、大多数の者は無関心であった。昔から言えば、テレビがあり、マイカーだ、パソコンだと物質的には信じられない一連の発展はあるが、昨今の新聞・テレビ等で報ぜられるニュースの中には、私にとってアンビリーバブルな事柄が沢山あるのだ。一人でブツブツ言っているが、これも頑固な年寄の仲間入りをしたせいなのだろうか。

稲荷山公園の思い出

小川 哲也

稲荷山公園は武蔵野線（現西武池袋線）稲荷山公園駅から西武線（現西武新宿線）の入間川駅（現狭山市駅）迄歩く途中にあるこれといった特徴のない並の公園であつたと思ひます。

私にとってはこの公園は中学四・五年のとき初恋を語つたところであり、悪餓鬼三人組の学校を「サボツ」て早飯を食べべたり、煙草を吸つたりした思い出のところでした。

そこで川柳とも短歌ともつかない愚作を書きましたので、

1 青春の淡き思い出／稲荷山／悪餓鬼時代／友よ何処に

2 リーダーと辞書を片手に／英会話／にわか教師の／進駐軍

尚悪餓鬼三人については名前を明かすのにしのびないのでご想像にまかせます。

「ゲートル事始」の地訪問記

菊池好太郎

○はじめに

学生時代先輩後輩の序列は厳しいものであるが、私の場合はそのままの人生である。

市役所にお世話になって驚いた。昭和十九年当時川中一年生だった私の上に、二年生の(故)赤田健一さん、三年生の宮岡昭治さん、四年生の町田成夫さんの諸先輩が居られ、そしてゲートル会発足の昭和五十一年当時は、皆さん課長で私はヒラであった。

さらに家の近くに関谷会長さん(同四年生)と加藤真三さん(同二年生)のお宅があつては決りである。以来二十数年ゲートル会の雑役として良く続いたものである。

○板妻への旅

昭和十九年四月川越中学一年に入学した私達(川中四十八回・川高二回卒)は、二日後

の四月十日から十五日迄の六日間軍事教練のため、富士山麓の陸軍板妻廠舎でゲートルの巻き方から教練の基本訓練を受けた。

このことについては、本橋藤治君の記憶と名文により『川高八十周年記念誌』と『飯能はつかり』第七号に「ゲートル事始」として、又川高百周年記念誌『くすの木』の昭和十九年度の欄にも「学校から生徒が消えた」として書かれているのでご覧頂く事にして、ここでは五十六年ぶりの板妻への旅を書くことにする。

昨年川高創立百周年同窓会祝賀会の時に今度は板妻へ行こうと話が出て、今年修学旅行以来五十年ぶりの日帰りバス旅行となった。

六月九日（雨）川越駅前集合のバスに飯能から本橋藤治君と海野武人君と私、東京から石井勝己君と名栗から浅見敬一君も参加した。

車中幹事の用意した当時の記念写真（私などはとつくにどこかへ行方不明！）を見て、私はどれでしょう？という始末だった。

御殿場市の（旧）陸軍板妻廠舎、現在の陸上自衛隊板妻駐屯地に到着した。その昔の木造兵舎の面影はなく、芝生の庭とマンションのような近代的基地に変わっていた。案内の井出広報官殿がバスの中で説明された。昔の静岡三十四連隊と同じ番号の三十四普通科連隊

がここで、全国でも珍しいとのこと。資料館に案内され、軍神橋周太中佐の遺品を始め旧陸軍から自衛隊までの展示品を見学し、昔の板妻の絵葉書を記念に頂いてお別れした。

東富士演習場を通って近くの「大野路」で昼食懇親会となり思い出話に花が咲き、盛り上った一時を過ごし帰路についた。バスの中でも軍歌から演歌までカラオケ大会で盛り上がった。

ところで、我々の宿舎だった楽山荘はどこで何だったのか不明のままの旅だった。

○ 楽山荘（らくざんそう）探訪記

板妻から帰ってから毎日雨も降り続くので頼まれもしないのに、宿舎の楽山荘について調べ始めたらしい事になった。

まず飯能市の郷土館と図書館で探したが見当らず、御殿場市役所に電話して聞いてみた所、若い人では楽山荘と言っても名前すら知らず、渡辺総務課長さんが出られて、「昔の玉穂村にあったが今は何もない、自動車学校の周辺である。図書館に資料がある。」とのこと。図書館に電話して聞いた所、調べて下さると言われ、何日かして、何冊かありましたとの事で「見せて下さい。お伺いします。」と言ってしまった以上、行かねばならぬ男の約束

と合い成った。

七月五日雨が止んだ。前回バスで行けなかった土屋保三君を誘って二人で車で出発した。御殿場市立図書館に到着し、係の池谷さんから楽山荘の記事のある資料三冊を見せて頂き、簡単な説明の後記事をコピーして頂いた。

資料と要旨次のとおり

『御殿場郷土史』下巻 勝間田二郎 著

『岳麓漫步』 仁藤祐治郎 著

『写真集・御殿場』 勝間田二郎 編

「楽山荘」は、東大教授の高楠順次郎博士が、(旧)玉穂村(昭和三十年御殿場市に合併)中畑地区に昭和三年に建設した仏教修養道場で、開館式には、清水寺の大西良慶、法隆寺の佐伯定胤ほか多数の高僧が参列した。仏教修養道場として仏教青年団を始め全国の男女青年団の研修会場としても使用され、又、土地の人々とも親しんで盆踊りなどにも使用され唄にも唄われた。

へ富士の裾野の楽山荘の鐘はよ

朝な夕なに鳴りひびく

それ 鳴りひびく

二階建ての道場は「富士休養園・楽山荘・苦行林」と呼び二階は宿泊室、一階は修養道場で講話堂と言った。

池の西には九州黒田侯別邸を移築し、平屋建てで「楽山荘・楽行林・梅の御殿」と呼び住居と来客宿泊用に使われた。

戦争中は、村で管理して学校教練宿泊所等に使用した。戦後は、解体して原形は止めない。現在の御殿場自動車学校の周辺である。

ということでは我々の教練の宿舎となっていたわけである。

そこで現地を訪ねることにした。

駅から富士山に向う道沿いに自動車学校があり、周辺は住宅街になって古い建物など全くない。そこから北へ少し行った所に玉穂小学校があり、木造校舎がコンクリートの立派な建物になっていて、いづれも古い記憶やイメージのかけらも湧いて来なかった。

地理的には、北から南へ小学校―楽山荘―板妻と並んでいて便利だったと考えられた。

それにしても、前回バスで来た時通ったR469号添いに並んでいたとは、事前に調べておけば良かったのにと後悔先に立たずの感。

お昼は又「大野路」でとって、再び板妻駐屯地へ。今回も井出広報官殿に「橘記念資料館」でご説明頂いた。特にゲートルは「巻脚絆」とあり、我々学生の代用品よりも厚く広くしつかりした物のようであった。

この日は雨も止み、富士山こそ見えなかったが橘大佐の銅像など写真をとって帰路にいった。

ガラ空きの中央道を走りながら、やっと一仕事終わった、これでゲートル会の宿題も、同窓会の報告書も出来そうだと安心して帰って来た。

○先輩の話

帰ってから、当時四年生で板妻へ同行された飯能地区の先輩は、細田久夫さん（校長先生）と（故）滝田輝夫さん（平岡工業）とお聞きしたので、細田さんのお宅へお邪魔して当時の思い出など伺った。

当時四年生（川中四十四回卒）で予科練などに合格していた人達が、一年生の各組に班長として面倒を見るために同行させられたもので、飯能からはやはりお二人であった。

板妻の写真のコピーを持参した所、私も持っている、と出して来られたのには恐れ入り

ました。(私のは行方不明！)

細田さんは三組担当で、滝田さんは見当らないとのこと、私の二組の四年生は、大久原秀雄さんで現在川越市の教育長さんであるとのことなど教えて頂いた。

我々一年生からはこわい先輩だったとの記憶しかなかったが、四年生は教官や先生と一年生の間に入ってご苦労されたようであり、楽山荘の狭い階段や、板妻で馬に乗ったエピソードなどの話を聞かせて頂いた。

いつになっても先輩は先輩、有り難いものである。

川越市駅の広場

岸 昭 夫

「紫匂う武蔵野の、天与も深き川越に・・」

白線の戦闘帽を被った二・三十名の川中生が日の丸の旗を襷にした一人の川中生を囲んで、輪になり、肩を組んで蛮声を張り上げ、また、彼の回りを円陣を組んで蛮カラ姿で知

っている限りの歌を唄い踊っていた。出かけて行く彼の為の壮行会である。その様子を電車に乗るため改札口までの数分間を、また、電車から降りて、それを見守る多くの大人や学生たち。

川越市駅の東側の広場の様子が今、五十五年を過ぎても昨日のように蘇ってくる。多分、西武線の本川越駅前でも行われたのではないだろうか。学業を半ばにして陸海軍のどちらに志願して行くのか分からないが、五年生か四年生の同期の学友の壮行会に度々遭遇した。まだ一・二年であったので参加はできなかつたが軍国少年であった川中一年の私にとっては、「これぞ川中生」という誇りがあつた。

その背景には、兄が五月に予科練に入隊していたのでその思いはなおさらであつた。この壮行会の様子を駅頭で見送つた大人たちはその時どう思つていたのであるか。

戦後、兄が予科練から復員してから、ふとしたことから兄の書簡を何気なく見ていた時、一通のはがきが目に留まつた。父から兄へのものである。「決して犬死にはするな」と言う文字である。親として子どもに対しての言葉にどんな意味があつたのか知る術も今は無い。父の思いと同じように、駅頭でこの様子を見送つた同じ年齢の子どもを持つ親たちの思いは様々であつたに違いない。

川越の駅前広場で壮行会を開いて参加していた当時の川中生、学徒動員で戦地へ行った人、また、戦後の日本の復興に尽くした人等様々であろう。特に不幸な戦争に若くして命を捧げて日本の礎になった先輩の人たちの無念さを私は忘れることはできない。

懐かしのゲートル時代

高橋豊二郎

私は、「ゲートル時代」この言葉に心から懐かしみを感じ、乱文ではございますが、書かせて頂きます。高橋豊二郎は、飯能ゲートル会の皆さんと、一年に一回お会い出来る事を楽しみにし、又心から喜んで居ります。私は現在生鮮食品販売と市場の経営をして居ります。私は昭和十九年四月に旧制川越中学校に入学致しました。入学と同時に直ぐに富士の裾野に集団合宿教練に行きました。その時、私の班の班長で来られた上級生が双柳の滝田輝夫さんでした。社会人となって、平岡工業株式会社に勤めていたので、何回か当時の思い出話をした事がありました。滝田さんが、後に若くして亡くなられた事を聞き驚いたわ

けです。始めて親元から離れて、見知らぬ土地で過すことの寂しき、不安さが、クラスの者とも打ち融けて話し合える仲間としての、自覚認識が徐々に出来て来て、だんだんと、楽しい毎日が過せたわけです。何といつても、一膳めしと、菜の花味噌汁、これには大変がっかりしたものでした。又、本川越の隣りにあった日清製粉へ勤労働員で行き、大豆の豆粕を仲間と食べすぎて、水を飲み、全員下痢をしてみました。又、上福岡の火工廠の思い出で、ひとつ、良い話があります。

私達と共に山村女子高の生徒も動員で来ていたわけです。或る日、私達が5名位で工場内の道路を歩いていたら、前方十米位を山村の女生徒を5名位引率していた女の先生が、突然「皆さん、ちょっと待っててね」と言って、右脇にあったトイレに入ったわけです。私達は後方から、何げなく歩いていたら、便所の方向から「ブーウ」と、大きなおならが聞こえて来たわけです。そして、先生が生徒の所に来て「皆さん、お待ちどう様。」と言って、女生徒の先頭にたつて歩いて行きました。その時は何とも思わなかったが、色々と仲間と話し合った結果、おならを我慢すると生理的に良くない、といって生徒の前でおならをしたら、えげつないということでは便所へ行っておならを気持ちよくしたのだと……戦時中に於いての、大和撫子としての礼節マナーというものを充分に感じたわけです。

私はクラブは籠球部でした。先輩には、原口幸雄さん、粕谷文雄さん、加藤勉さん、又、一年先輩には、加藤眞三さん、新井俊康さん、神田実さんと居りました。又、時々川越女子高や飯能女子高で、室内練習場を借りて練習をした事もありました。大体に於いて、川中の籠球部は飯能地区の者が大半でした。稻荷山公園の駅から入間川駅まで、雨の日も風の日も歩いて通った思い出は忘れられないで懐かしく思い出します。思い出は沢山ありますが、この位にして……、私の将来の第一志望は、軍人になる事でした。敗戦で、希望をなくして家業を継ぐ事になったわけです。飯能で生れ、飯能で育ち、飯能で家業を継ぎ、妻、子、嫁と孫二人と現在に至ったわけです。

我が人生、苦あり、楽あり。

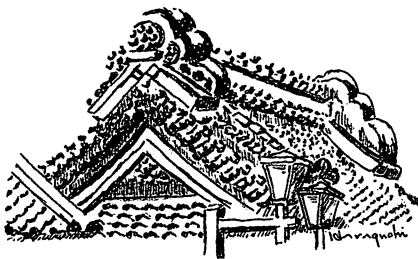
激動の人生でありしが

人生七拾年 一筋に

歩みし想いで……

愛ありて

妻、子、嫁、そして孫二人



明るき顔顔！

嬉しき、最高の人生なり

好きな俳句を何句か披露させて頂きます。

○春風が桃の香りをとばしけり
(小学校、五年の時校長から天の賞を頂いた句です)

○風鈴の音に混りて百合匂い

○墓参り桔梗の花に母想い

○屠蘇を待つ小猫柳の産ういし

○卓上に香り濃めしばら一輪

○風船が秋の祭りに迷ひけり

最後になりましたが、

飯能初雁ゲートル会の皆さんの益々のご発展と、ご健勝を祈念申し上げます。

「ゲートル街道」

土屋保三

「ゲートル街道」、旧武蔵野鉄道稻荷山公園駅から旧西武鉄道入間川駅（現狭山市駅）間の約一・八軒の道を私はそうよんでみた。昭和十九年四月川中へ入学、飯能から通学することとなった。「ゲートル街道」、それは少年時代「ゲートル」を巻き「戦闘帽」を被り将来航空隊の将校を夢見て颯爽と歩いた道、そして敗戦後しばらくは漠然とした虚脱感を抱いて歩いた道。今回この原稿を依頼されたことを契機に五十六年前を断片的に思い出してみた。そうしたら、私のその後の人生において偶然というか巡り合わせというか、これ程因縁の街道になっているとは。あらためてこれまでの人生を確認することができた。

当時の出来事をいくつか思い出してみた。入学してすぐ、「通学は武蔵野線の稻荷山公園駅で降り西武線の入間川駅迄往復とも歩くこと」、「所沢回りはまかりならん」、又「西武線は前部車両に乗ること」。「後部車両は女学生用なので絶対に乗ってはいかん」との訓示を

先輩から頂いた（当時は両線とも二両編成）と記憶している。中学校とはこのようなところかと思った。何故このような掟が出来たのか、又良かったか悪かったかは今だによくわからない。又この掟がいつ頃消滅したかとも思い出せない。本川越駅から整列して学校迄歩かされたり、時には駆け足させられた。思い出としては楽しいが時勢とは怖いものである。今の学生に話したらはたしてどう思うだろうか……。

数ヶ月後の下校時、本川越駅の近く迄来たとき、発車ベルが鳴ったので駆け足でホーム迄来た。ところが、空腹と疲れで倒れそうになった私は、とつさに後ろの車両に飛び乗った。そして次の南大塚駅で前の車両に乗り換えた。その翌日に校庭の隅に呼び出され、先輩から「貴様昨日後ろの車両に乗ったな」と問答無用でぶんなぐられ悔し泣きした記憶もある。また、この頃は「ゲートル街道」の中間にある滑走路の先端を歩く道すがら、当時数少なくなった飛行機と、純白のマフラーを首に巻き飛行服を着た格好いい航空将校にいつも見とれていた。二、三年先の少年飛行兵を夢見ていた。

当時の稲荷山公園駅は、駅前が扇形の広場になっていて、その中心に飛行場に入る門があった。駅の踏切に当時としては珍しい踏切警報機があった。同級生達と学校の帰りに入間川の方から歩いて来てその警報機が鳴り出すと、「それっ」と一斉に駆けて行く。ところ

が、この警報機が鳴り出した時点で、広場の角迄来ていなければ電車に間に合わない。その駆けつこが面白くて途中で時間を調節したりした。小学校の時遠足に来た稲荷山公園で遊んだり、終戦近くには米軍機が落とされた爆弾の穴が数ヶ所あったのにはたまげたりと、いくつか思い出した。ところがなぜか、「桜の花とつじの花」がきれいであったという記憶はない。余裕がなかったか、無粋であったか……。

終戦後の九月初めだと思うが前記の門に武装した米兵が二人立っていた。数人で歩いて来たら小銃を向けられ威嚇するようなしぐさをされた。あれはとても怖かった。それからしばらくたって、帰路に滑走路近くの道路工事をしていた所を通り過ぎた時、米軍のトラックが来て「ザー」と大きな音がした。そして誰かが振り向いて叫んだ。「あつトラックが立った」と、皆一斉に振り向いて驚いた。荷台が立ちあがって、砂利が撒かれていたのである。その時始めて「ダンプカー」なるものを見た。アメリカは凄い国だと感心したり複雑な思いもした。その当時日本にダンプカーが有ったか無かったかは定かではない。ゲートル街道以外で今でも記憶に残っていることを少し書いてみよう。

入学当初「一九学校通信第一号」（二四二頁参照）で新入生の躰、生活訓練と称し、軍事教練が行われた。五泊六日の日程で御殿場市西方の富士山麓玉穂村にある楽山荘という廠

舎に全員連れて行かれ、配属陸軍将校に大分しごかれた。そこでどんなことが行なわれたかほとんど思い出せないが、唯一小夜食と称して出された小さな饅頭一ヶがうまかったことだけははっきり記憶している。一年生全員が入学後すぐ突然消え、一週間後に全員現れた。こんなことは前代未聞であろうと思われる。

当時本川越駅―南大塚駅間には軍需工場があった。学校の帰りに、乗っていた電車が工場近く迄来た時、P・51戦闘機数機に襲われ、機銃掃射を受けた。バリバリッという轟音とともに電車は急停止した。乗客は近くの桑畑に逃げ込み、私は驚きと恐怖で震えが止まらなかった。

また、こんなこともあった。学徒動員で上福岡にあった陸軍造兵廠に通っていた頃、東上線川越市駅の待合室でB・29の空襲にあった。機関砲の玉が数発待合室の屋根を貫き、二米位前に落ちて来てからくも命拾いをした。又川越線南古谷駅近くで蒸気機関車が艦載機の攻撃を受けた。「かま罐」を数ヶ所ぶち貫かれて動けなくなり、川越まで歩いて帰ってきたこともあった。また、農家への動員もあった。秋に高萩村へサツマ堀りの手伝いに、翌春は南畑村へ田起こしの手伝いに行った。特に田起こしは初めてで、どんな具合に出来たのかわからないがそれでも男手の無い時なので大変喜ばれた。その日昼食に頂いた「真っ白

なおにぎり」のうまさとサツマイモのうまさが共にありがたかったことを今でも忘れない。非常に思い出深いことであった。

今、学生時代を振り返ってみると、「食うこと」と「恐ろしかった」という記憶が強く、学校内のことはほとんど覚えていない。何という時代であったか。そして父に戦死され、学校も中退した。私にとってはまったく悲惨な学生期であった。

「戦争」は大人ばかりではなく子供にも、そして家族にも災いが及ぶものである。「子子孫孫」に至る迄絶対にしてはならないと、次世代に伝えていく昨今である。

混乱期の終り頃の昭和二十七年、私は西武鉄道に入り、最初に入間川駅勤務となった。それから昭和四十五年に二度目の入間川駅勤務、更に定年近くに観光業務に変わり、平成二年狭山市駅（旧入間川駅）内にある観光案内所勤務となった。何と都合三回、始めと中間と終りに入間川駅に勤めた。この間「ゲートル街道」は通勤のため、ときどき歩いた。

どうして学生時代利用したこの駅に縁があったのか不思議である。

平成四年三月三十一日に定年退職、川越プリンスホテルでの記念パーティーに招待されたその帰途、狭山市駅に降りて職場に挨拶し、バスで帰ろうと思った。ところがこの日は、天気は快晴、駅前の桜が満開であった。せっかくなので花見をしながら稲荷山公園駅迄歩

こうと考え、同行した妻と歩き出した。中間の滑走路の所で自衛隊機が着陸して来た。その時ふと五十年前の今頃から戦闘帽を被り、ゲートルを巻き、時には防空頭巾なるものを肩に掛け、予科練生を夢見た少年が学校へ通った道だったなあと、当時を万感の想いで振り返った。道の両側に咲き誇っている桜花を楽しみながら、この思い出多き道を一步一歩たどりつつ稻荷山公園駅に着いた。八年前のことである。今、ゲートル時代のことを、何か書けとの「上官の命」により……駄文を書いていたら、夢多き少年が還暦を迎え、四十年間の職業を閉じた日に、糟糠の妻と共にこの道を歩いたことに気づいた。この時はことさら意識はしなかったが、こうして書いてみると「こんなに縁があった道とは」と改めて感じた。「ゲートル街道」と自称して感慨無量のものがある。

戦争による変革期

中島 一

私は、飯能町高麗横町の畳屋の長男として生まれ、飯能第一国民学校六年の昭和十八年

六月六日(日)(山本五十六元帥の国葬の日だったと思う)、親父が徴用のがれのため、伯父が経営している東京都城東区(今の江東区)南砂町二一六五五(株)中島鉄工所(当時は軍需工場で皇国二、六〇二工場と云われ、従業員約二百名、敷地約三千坪)の事務所二階へ家族全員で引越した。今から思えば逆疎開ですが、当時は、父が安定した収入が得られるので、何ひとつ疑問を感じる事なく、ついていった次第です。第一砂町国民学校に転校して、まずびっくりした事は、飯能の田舎言葉と東京の言葉使いの違いです。今ならテレビやラジオ等の情報網が発達して見聞き出来ませんが、当時は耳なれない言葉で一日も早く飯能弁を直す様努力しました。(例)俺↓僕 おめえ↓君 そうだんべえ↓そうだろう。

その次にびっくりしたのが学力差です。小学一年から小学五年まで、いつも優等賞と精勤賞を貰っていた私にとって、一学期末のテストでは上中下の下の上となり、「これでは中学(旧制)の入試は難しいぞ」と担任の先生に云われて、夏休みは一日中遊ぶことをせず、夢中で机に向かって勉強しました。また、担任の先生(当時二十五才位で独身)は、長野県佐久の出身で、先生の部屋に私一人だけが一週間泊りがけで合宿して教えて頂いた上、部屋の掃除は手伝ったものの、戦争中の食糧難時代にもかかわらず、長野の銀シャリ(米)だけのご飯を飯盒で炊いて頂き、一日三食、食べた味は格別なものでした。お蔭様で二学

期は上の下まで成績が上がり、その後も猛勉強を続けて三学期には上の中となり、話し合える友人が多数でき、今でも感謝の気持は忘れることはありません。この時のチャレンジ精神が私の人生に大きな力となっております。又、後日親父に聞いた所では、先生に御礼をしようとしたが受取らなかつたそうです。

昭和十九年秋、戦争が激しくなつたので、親父と私を残し、母と弟妹は、又、飯能へ戻りました。戦争中の空襲は、何度となく経験していますが、今でも心の片隅に焼きついて忘れる事の出来ないのが、東京下町の大空襲です。昭和二十年三月九日夜八時頃から、敵偵察機が一機来襲して、警戒警報が発令され、解除になり、暫くして、又、発令され、解除になると云うパターンは、よくある事でしたので、防空壕に入らず、布団の中でラジオを聞いていますと、突然、編隊の敵機が低空で来襲して焼夷弾の雨を降らせたため、ラジオでは、あわてて空襲警報を発令しました。急いで着替えをして防空壕に入りましたが、編隊の敵機が繰り返し、繰り返し返し、来襲して、向島、浅草、本所、深川、城東の各区一帯に雨あられの焼夷弾を降らせ、五十坪程度の敷地に十個以上落ちた事を記憶しています。火勢が強く、あたり一面火の海となり、親父の指示で、胸の動悸をおさえるため、水を一口飲んで、事務所の近くにある防空壕へ何回となく運び、満杯となつたので、まわりに燃

える物のない南側に鉄骨材置場の間を強風に飛ばされない様に一歩一歩、長尺物のアンクルにつかまり乍ら歩き、直径二米、高さ二・五米の円筒形の鉄管の中へ、工場の人や近所の数人と一緒に入りました。一面が火の海となつて燃え、火勢の強風でゴウゴウと云う騒音と、焦げ臭い煙の渦の中で生きた心地もなく過して助かつた次第です。翌朝、防空壕の中は燃えてしまいましたが、皆で運び出した業務用の配給米を、大釜で米を洗いもせず、ポーフラのいた防火用水の水で炊き出しをして、おにぎりを作って食べ、親父は残務整理で残るため、私は赤羽から通勤していた宿直の人に池袋迄、送って貰う事にして、二人で深川豊住町方面に向かつて歩き始めました。まもなく道路には、逃げられず衣服、髪の毛等が、すべて燃えて倒れている裸の人が二米に一人位の割合で見られ、片膝ついて両手を前後に振って走つたままの姿勢の人、乳幼児を抱いたまま倒れている母親、或は、川に腹をふくらませて浮いたまま死んでいる人、又、軒先には、焼けただれた状態で死臭を匂わせている人等、この時は約七萬五千人に及ぶ死亡者がいたと云う、まさに、この世の地獄絵図を見ている様な、悲惨な光景でした。この中を神田駅方面へ向かいましたが、山手線は止まっており、田端駅迄歩き、池袋経由で飯能へ戻つて参りました。本当に欲得なして、生命の有難さを痛感し、その時の事を思い出す時、「むごい事をする戦争は、徹底的にいや

だ」と終生忘れる事はありません。

後日、深川で罹災された人の話では、広い交差点で左右を見た時、右方面は真赤な炎に つつまれ、左方面は火の手がないので、親はその方向に行こうと、大勢の人がごったがえす中を左へ逃げて死亡し、その方は、右方向へ押され乍ら逃げて助かったと云う話を聞きました。真赤な炎につつまれている方向へ逃げた人は、やがて火勢が衰えて助かり、火の手の上がついていない方向は、それから火勢が強くなって死亡され、又、明治座（防火建造物）へ逃げ込んだ人は、シャッターを閉めて蒸し焼きにされた等、多くの人が犠牲になられ、小さい火事と大規模火災の状況判断が、いかに難しいかを痛切に感じた次第です。

四月の新学期より、旧制中学二年生として、川越中学校へ、大勢の人と一緒に転校したわけですが疎開の者と云うレッテルを張られて、今で云うイジメがありました。私は、小学校の同級生、同窓生、先輩等知人が多くいたため、その様な経験はありませんでしたが、転校生の話を聞くと殆どの人が多少経験しており、特に成績優秀な人程イジメに合ったと云う話を聞いています。その原因の一つに城下町特有の排他的思想（例、よそ者が入ってこない様、町の中心地に駅を作らない等）が、残っていたのかなと思っています。私が、小学六年の時、飯能から東京へ転校した折は先生始め、同級生、近所の人等より、田舎者

の馬鹿扱いななどのイジメの言動は一切なく、暖かく迎え入れられた事を思う時、疎開の者にも何故出来なかつたのか残念でなりません。

後年、私が福島県三春町（五萬石の城下町）に勤務しましたが、会津と同様、明治以後、排他主義の思想が強く経済発展を遅らせて、隣の宿場町だった郡山市に大きく遅れをとっていました。徳川三百年の士農工商の流れを変革出来ず、旧家でない者が頭をもたげるとモグラたたきがあり、人口二萬たらずの町で東大卒の人がいても他県に就職し、若い優秀な人材を町へ残せない等むずかしい土地柄でしたが、私が赴任した昭和四十年は、この町にも時代の変革が始まった時期で、工場誘致第一号として歓迎されました。明治維新後、他郷人、異邦人にも差別せず、一致協力して共存共栄を図ってきた都市は、交通網の発達と共に大きく経済発展をしています。

通年動員は「火工廠」

— 過酷な通学通廠事情 —

本橋藤治

粗末なノートに綴られた昭和十九年の四月からの日記がある。

十一月二十四日（金）晴 十一時警戒警報十分後に空襲警報、伊豆半島に高々度で侵入、七十機内外来襲。幾田という人が火工廠において死んだという。※名前が当て字である。

十二月十四日（木）晴 生田巖さんの学校葬。勉強なし。

この年の三月「決戦非常措置要綱ニ基ク学徒勤労動員実施要項」が発令され三年生以上の上級生は八月までに勤労動員が始まっていた。われわれもいつかはその時が来ると考えていた矢先であった。上福岡の東京第一陸軍造兵廠川越製造所（火工廠）が生田さんの動員先であった。数行の日記の中に三年生の死が記されていることは、当時のわれわれにとつて大きな衝撃であったものと思われる。細かいことは何もわからなかった。作業中に爆発があったということだけだった。

昭和二十年二月から一年生二〇〇名はこの「火工廠」に通年動員が決定したのであった。
『火工廠物語』吉田竹雄著（一九九五刊）

「鎮魂」動員学徒の死—— による驚くべき事実。

「昼食時近くになってから、私たちは配属現場に戻った。先刻あった爆発はどここの工室なのか何が爆発したのか誰もが一刻も早く知りたかったので、大急ぎで駆け足で各自の配

属現場に戻っていった。

私たちが戻った頃はもう現場はいちおう落ちつきを取りもどしていて、爆発の様子を聞くと「爆発したのは、一棟おいた道路をへだてている北側の五八〇号家だ」といつていた。負傷者は全員大火傷をしていたそうで、まだ爆発現場には行かない方がいいと言われたので、その時は見にいかなかったが後になって死亡した者の中に、名前を聞いたことのある学徒がいた事を知ったのである。」

そして吉田さんの正確な記述から生田さんの死亡は十一月二十二日である。そして詳細な事故の状況は五十数年間知ることもなかった。続いてその記述は

「日時・昭和十九年（一九四四）十一月二十一日、午前九時五十五分ころ

所属・第二工場第二工区（区隊長川端中尉）五八〇号家（田村分隊長・西村班長・野村副班長）

作業名・航空機用二十ミリ機関砲、爆薬筒（記号マ 二〇二）の焼夷剤填実作業

被害の状況

死亡者・九名（男子五名、女子四名）

負傷者 六名（男子三名、女子三名）

事故の原因（推定）と状況

加薬（焼夷剤）充填作業中に填実用プレスの杵が、何らかの原因で触れて弾薬筒のふちにあたり、この時の摩擦で発火したものが漏れていた加薬に点火し、これが一瞬にして凶量器リョウキに補充したばかりの焼夷剤約五十キログラムが連爆した。そのため全室火の海となり、室内温度千二百度となって作業者全員が全身火達磨になった。」

※記号マ二〇二はB・29攻撃のため改良された秘密の弾丸であったという。

「たまたまこの日に限ってこの仕事の手伝いに来ていたのは、負傷した加藤さんと亡くなった学徒の生田さんの二名だった。この五八〇号家も他の工室同様に、周囲が六メートル余りのコンクリートの防爆壁に囲まれた鉄筋コンクリート製の建物で、中廊下をはさんで左右にそれぞれ六室あり、各部屋ごとに作業内容は異なっていた。」

「生田さんのお父さんは火工廠の西隣にある「国際無線株式会社」（現KDD）に勤めていて、会社の社宅から「福岡小学校」に通学し、この附近で遊んだことがあり、川越中学校に入学の頃は川越に住み、三年生になって八月から配属されていた。そして希望の陸軍予科士官学校に入学が予定されていた。この日火薬の計量作業の手伝いのため選抜されて就業中、爆発事故に会い全身に大火傷を負い、翌日になって十五歳の若い命を閉じたので

ある。」と記されている。長くなつたが引用させていただいた。胸がつまつた。五十六年前の私の日記はこの大事故をただの一行で済ませている。これを調べてくださった筆者に頭が下つた。戦争とはこういうことなのだと痛切に思った。時と共に風化し、茫漠としたあの時代を検証しなければという責任も感じた。

日記は連日空襲のこと、教練のことが記され、十一月二十七日には父親の出征のこともあつた。銃後も戦場も区別のない状況である。

この年昭和十九年四月六日から豊岡町黒須の恩師坂口幸男先生の宅に泊めていただく。通学は入間川駅まで自転車、原田外科の旧姓小室さん、井ヶ田さん、深井さん、石川さん、桑田さん、滝沢さん、平田君、水野君等と翌年三月までこの道を通つた。休日の前夜は自転車で原市場の自宅に帰り、休日の大部分は、畑の手伝いなどして、翌朝は五時起床、砂利道の県道を十軒、更に元加治・仏子と進み、豊岡に立寄り旧道を鶴ノ木から入間川駅、七時十三分に乗車することが繰り返された。

通年動員の話は年が變つて一月二十四日に記してあり、そのため翌日から試験が始まり何と二月七日まで続いている。一月三十日通年動員のうわさ濃くなる。二月二日には雪が降り雨に變る。八日から上福岡の火工廠ということである。米英撃滅のためなら喜んで行

く、と記している。二月四日母の手によってその後常時肩から下げていた防空頭巾が完成。

二月六日（火）八日の動員延期となる。

二月十三日（火）晴 記念すべき初動員の日である。我等も製造の庭におもむくことになった。こんな喜びはない。川越駅八時五十分の東上線。東京第一陸軍造兵廠川越製造所である。身体検査、ツ反、血沈検査。

※工場についての何の不满も記されない。

二月十四日（水）晴 入所式、所長の訓示あり、いよいよやるぞと心を固める。諸注意に続いて工場見学。僕等は第一工場六十号家石川分隊、松本班長殿の下で働くことになる。作業 九九式破甲爆雷の組立。軽戦車一輛を一発で擱座する威力がある。円形で四方に磁石、中に八箇の火薬を並べ一本の信管がついている。これの磁石をネジで取りつける作業と箱詰め作業ということであった。帰りは四時。

※日記には破甲爆雷の絵がある。

二月十五日（木）指示通りの仕事、案外やさしい仕事ではあるが油断してはならない。午前中十二箇を仕上げる。午後退避壕掘りをした。疲れた。腹が減った。

二月十六日（金）曇 朝七時より一日中警戒警報と空襲警報、空母よりグラマン艦上戦

闘機の襲来、空中戦を初めて見る。工場では仕事せず防空壕の修理をする。一度退避命令。

※空襲は作業能率を低下させていく。

二月十七日（土）各自弁当箱を提出。名前を書いていただき、昼食はこれでいただくらしい。今日も空襲があつた。水富に味方の飛行機が墜落し、搭乗員が落下傘で降下したと聞く。明日休日、自宅まで自転車、七時過ぎに着く。

※休日は食糧増産のため作物の作れるところはすべて耕した。麦の土入れなどした。

二月十九日（月）五時起床五時四十五分自転車で出発、豊岡六時四十五分着、入間川駅まで自転車、七時十三分に乗車。本川越駅から川越駅更に上福岡駅、これより徒歩。今日始めて昼食が出た。おいしかった。午後空襲、B・29の大編隊を見る。退避時間長い。

※食糧事情は悪く、この頃は工場の方がよかつた。

二月二十日（火）曇 敵は硫黄島に十九日上陸という。一万名という。小笠原方面も空襲という報道である。

二月二十一日（水）晴 今朝も敵機飛来、工場では大井倉庫に荷物を運ぶ、約一里の道を大八車の大きいものを引っぱり交替で後から押す。十二時頃着く、疲れた。しかし、頑張った。その後食事、血液型検査はA型である。

二月二十二日（木）雪 帰りは、上福岡駅より徒歩、本川越駅より入間川駅まで電車、入間川駅より豊岡まで徒歩、疲れた。濡れた。明朝も徒歩だ。

二月二十三日（金）今朝は晴れる。入間川駅まで徒歩。あと電車動く、電車は機関車が引っ張って走った。

二月二十四日（土）今日は自転車、栗まんじゅうが一箇配給になった。一人で食べてしまった。一箇四銭であった。明日も工場である。家には帰れない。

※月々火水木金々の日が多いが空襲警報のため通廠できない日もあった。

二月二十五日（日）曇 朝から機動部隊接近、川越まで行き戻る。電車が入間川駅に着と同時に高萩方面より飛来の十三機の編隊が機銃掃射を加えてくる。ものすごい音、必死で駅の近くの雪の積った壕に滑り込む。畜生と思った。敵機はポートシコルスキーF-4Uであった。搭乗の米兵の顔も見える高度であったが、目標は航空士官学校であった。

二月二十六日（月）晴 電車遅れ十二時到着、石川分隊から吉沢分隊に移る。九八式電気雷管の一部作業、数日間の予定。今日も上福岡と川越間徒歩。

二月二十七日（火）BCG注射、九八式の作業、ベルつけと紙を巻く作業。硫黄島で今使用しているものだという。火薬に装着し、乾電池一個の電流を流すだけで爆発する。導

火薬を発火させるのは白金線で結ばれた短い導線が二本出ていて、大きさは小指程のものである。爆薬さえあれば使用できる。米軍上陸に備えてのものという。

※電管の絵がある。ベルとは茶色の接着剤のこと。

三月六日（火）学徒激励大会、演説を聞く、

三月七日（水）朝から陸軍の映画を観る。午後防空壕掘り。

三月八日（木）晴 蛸壺の一人用防空壕完成。工室の前の庭である。板をのせて土をか
け、一部を持ち上げて入り、中から板を閉じる。今日はマルフ（風船爆弾）の完成日という。

三月十日（土）陸軍記念日、敵は早朝百三十機をもって東京を襲った。今までで一番す
ごいもので煙は東の空に入道雲のように立ちこめた。駅で罹災者を見掛る。

三月十二日（月）登校、勉強した、学校が一番よい所だ。

三月十七日（土）曇 今日で六日間、学校、午前中勉強、午後作業など学校に出ても作
業がある。今日が一年の最後の勉強、明日は作業だけ。

三月十九日（月）晴 家より工場へ。昨日は畠を耕した。食事当番であった。作業は、
薬填めであった。

三月二十日（火）新入生入学試験。航空士官学校五九期生卒業式で卒業生が二人豊岡の

家に見えた。山口県出身の人と横須賀の人である。横須賀の人は優等生で時計を戴いたという。陸軍幼年学校は二年生でもう一度受験できるが、四年生で予科士官学校に入る道があるとのことであった。この道しかないと思った。

三月二十七日（火）春休はない。工場、箱詰め作業、明日卒業式。

三月二十八日（水）卒業式 四十三回五年生、四十四回四年生が同時に卒業。平岡仙之助さんが一番であった。午後一年お世話になった坂口先生の家を去る。御世話になった。

山崎さんがリヤカーで荷物を運んでくれる。

三月二十九日（木）家から工場への通廠となる。元気が出る。

三月三十一日（土）終業式、石井茂、水野、赤星が優等生であった。

四月一日（日）今日より二年生、休みはない、四月一日よりさらに二十一年の三月三十一日まで通年動員ということ。

四月八日（日）始業式、登校する。

四月九日（火）入学式、午後一時より

四月十日（水）新入生が来た。敬礼の仕方が面白い。二年生の実感が湧いてくる。

空襲ますます激しい。工場へは飯能・吾野方面の仲間と東飯能駅から通うことになる。

遠距離ということでも吾野の吉田君、大野君、久保君と小生は三時に帰ってよいことになった。片道三時間近い行程であつたらう。

原市場の自宅から砂利道を十軒、東飯能駅前親戚に自転車を置き大飯線で川越駅の先の「なんこや」と呼んだ田圃の中の南古谷駅で下車、これから二軒程の田圃道を歩いて火工廠の乾門から六一号家に入った。帰りは門を出ると上福岡駅へ歩き東上線で川越駅下車。線路伝いに本川越駅へ。これから入間川駅で下車、稲荷山公園駅まで砂利道を歩き、また走りなどして乗車、飯能駅で下車、自転車という強行軍であつた。実労働時間は幾らでもないし、空襲もあり、出勤を途中で中止したりという変則的な通廠が八月十五日まで続いたのであつた。

工場の記憶も薄れたが各道路に沿って頭上に黒い管がめぐらされていた。火薬工場であるからすべてスチームであつた。窓ガラスに民家同様に和紙を格子状に貼つて爆風によるガラスの飛散を防止していた。作業台の上には高さ四十糎のコの字型の厚い鉛の衝立があり、この中で火薬を扱つた。白い粉末をこすると発火するというので慎重に扱つた。この衝立では爆発しても煙や炎は上に行つて前や横には飛散しないためのものであつた。工舎は二米以上のセメントの部厚い壁で隣の工舎と区切られていた。また高い土塁で囲まれ、ト

ンネル状の入口を胸には厚い真綿入りの座布団のような胴当てをつけ、担荷で重病人を運ぶように静かに何かを運び入れる様子を見かけることがあった。危険な火薬を運ぶ作業だという。建物は爆発の時には天井が抜ける構造だと聞いた。不思議なことに各号家を行き来して同級生と談笑した記憶がない。食事は第一会所に集合し、食事当番が配膳した。南東の凹地では時々爆発音が轟いていた。発火試験場であると聞いた。防護隊対空陣地が設けられP・51の来襲の時に機銃の高い発射音が聞かれた。考えてみれば、蛸壺の壕にしても対空陣地にしても、爆弾一発で全工場が木端微塵に吹き飛んでもおかしくない火薬の山の中にいるような危険な兵器工場であったことがわかる。あらゆるところに赤スタンプの「軍事機密」を押し、木箱に詰める作業が続いた。当時工場や作業内容を口にするのは禁じられていた。それでも「マルフ」という風船爆弾について、今後の期待のもてる爆弾というようなことは誰からともなく伝わった。軍直結の工場であるから憲兵の分駐所もあり、憲兵の腕章をつけた兵隊が自転車で往き来するのを見掛けた。

コンクリート塀に囲まれた工場の門は正門・西門・乾門とあり、出入りする時は、守衛に敬礼し通過した。身辺の検査もあった。

火工廠の話が出ると「あの水槽塔はどうしたか」との声が出る。この下の広場で予科練

に入隊する人達の壮行会が開かれ環になって「ダンチヨネ」節を歌った記憶がある。

すべてが五十五年も前のことであり、当時のことを問い直す方法もない。学校訪問ということで何度かこの上福岡駅にも降り立った。当時迷彩のほどこされた水槽塔もひっそりと建っていた、軍国少年の夢の跡などと考えてもみたがすっかり住宅地や工場に変ったその辺りには、もはや過去を問いかけるのにふさわしい老人もいなかった。「銃後」ということばが使われ、「銃後を護る少国民」などといわれ、「一億一心火の玉だ」と歯を喰いしばって遠距離を通ったその頃の記憶だけが鮮明である。

当時の定期券が残っている（二四一頁参照）。20・3・28発行の上福岡——東飯能20・9・30迄59円90銭、20・4・24発行南古谷——川越20・10・23迄18円10銭、20・6・6発行本川越——入間川20・9・5迄18円90銭、飯能——稲荷山20・9・8迄15円20銭のものだ。八月十五日以降も有効である日付を見ると何とも空しく、残念であるが、私の通年動員の軌跡を示す品である。

報償金計算票には四月分 交付金26円・内訳 授業料四・五月分9円 父兄会費四・五月分3円 報国団費6円 手渡金6円50銭、特別会計繰入金1円50銭とある。

一部は授業料に当てられていたのだった。

同期の玉之内淳君はこの「計算票」から始まって「合格通知書」「入学生徒心得」、更に「一九学校通信第一号」、「新入一年当初ノ宿泊訓練ニ関する件」のいわゆる富士山麓宿泊訓練の実施についての目的・期日・場所・参加者・経費・食糧等の正確な文書を提供してくれている。

また、昭和十九年の小遣帳も残されていて今後の検証に極めて有効な資料と考えるが、今回は参考までに何件かについて記しておきたい。昭和十九年に川中入学試験料2円・各人の名前と焼印の校章の入った門標札(まだそのまま掲げてある) 15銭・戦闘帽3円92銭・徽章・白線30銭・宿泊訓練費(五泊六日) 12円85銭・自転車パンク代50銭等当時の物価を知ることができる。

昭和二十年八月十五日で通年動員は終る。敗戦に向って急角度で悪化していった戦況。激しい空襲と食糧の極度の不足の記憶だけがある。

ゲートル世代といわれる期間、学年相応の視点で戦争を見詰め、その渦中に生きたそれぞれの思いは深い。純粹培養された軍国少年の理想像が丁度われわれともいえるのではない。ひたすら国家のために滅私奉公の自己犠牲を惜しまず突進した姿があった。何か得体の知れぬ時代の風圧に押し流されたようでもあるが、人間の適応力、信じ難い程の振幅

の大きさにも耐えた姿に感動する。古稀を超えた人、古稀に迫るゲートル世代そのものが一つのドラマであるように見えるのは、その経過した時間のためであるか。年齢のしからしむるところであろうか。何はともあれ、語るべきことの多さにたじろぐ自分を感じるのである。

あの日、あの時

八 鍬 幸 彦

万朶の桜か襟の色、万朶の桜か襟の色、花は吉野に嵐吹く、花は吉野に嵐吹く、歩調とれ、誰だ同じ方の手と足を一緒に出すのは、右手を出したら、左足を出せ、ざくざくざくざく。

僕は昭和十九年四月七日、埼玉県立川越中学校に入学、その三日後の四月十日から四月十五日まで僕達新入一年生は、富士の裾野の板妻軍教廠舎楽山荘での集団教練に参加する様、栗岡亀治校長名で通達があり、経費十三円と米一升二合持参すべしとのことでした。

この集団教練は川越中学校始まって以来、後にも先にもたった一回実施されただけでした。

新しく支給された戦闘帽にカーキ色の制服、編上靴にゲートルを巻き、水筒に雑嚢を肩から交差してかけ、校庭に集合、配属将校の海北、飯島、木村、大野の各陸軍中尉と学年主任の柔道の前田先生、それに四年生の先輩数名に引率され、川越駅から特別列車での参加でした。

緒戦優勢だった日本軍も昭和十七年六月にはミッドウエー海戦で手痛い打撃を受け、多数の優秀な海軍パイロットと共に、多数の航空機、及び大型空母赤城、加賀、蒼竜、飛竜の四隻を失い、又、ガダルカナルの激戦で次第に劣勢に立たされてしまいました。

昭和十九年に入り、太平洋戦争は増々激化の一途をたどり、連合国軍の反撃の為、ニューギニア、ソロモン、マーシャル、マリアナの各諸島は進攻され、ラバウル航空基地は補給路を断たれ孤立。又、インパール作戦の失敗、サイパン、グアムが陥落。この結果、アメリカが日本本土爆撃用に開発した大型爆撃機B-29の基地がサイパン島に建設され、昭和十九年十一月二十四日、東京はB-29百機の空襲を受けました。

この様な状況の中、僕達一年生も学校での勉強どころではなく、荒川の堤防の草刈作業、

南古谷方面の農家への勤勞奉仕と、忙しい毎日が続きました。南古谷一帯は地下水脈が比較的浅い所にある為か、湧き水に恵まれ一面の田んぼで、農家の人は股引きをはき、それなりの支度で農作業をしていましたが、僕達素人は、素足でズボンを膝上までまくり田んぼに入つて作業した為、多数の蛭の攻撃を受け、防戦に大変な思いでした。当時は食糧難でしたので農家へ手伝いに行くと、うまい物を腹一杯食べさせてくれるし、昼休みは田んぼの畔でエビガニ釣りなど結構楽しんだと思います。又農家の庭先にあつた赤トウガラシ、赤いトマトが非常に印象的でした。

昭和二十年アメリカは日本本土爆撃を容易にする為、邪魔な硫黄島を攻撃、摺鉢山に星条旗を立てられました。その後は本格的な日本本土空襲となり、延べ三万三千機を数えたそうです。

昭和二十年四月一日、アメリカ軍主力は沖縄上陸作戦を敢行。戦闘は激烈を極め、日本軍は、特攻機や戦艦大和等を投入し防戦しました。

昭和二十年二月十三日、僕達一年生と先輩の三年生は通年動員で、上福岡の東京第一陸軍造兵廠第一工場（工場長は神田正憲陸軍大佐）で働くことになり、学校へ行くのは週一日になりました。

東飯能駅から同期生と一緒に大飯線で川越駅に行き、東上線に乗り換え、上福岡まで通いました。当時、大飯線はC11型の汽車が走っており、鹿山峠をあえぎながら登っていました。

工場は弾薬等を製造している関係で、広い敷地内は、小分けされた多数の作業場の棟が建っており、その各棟は屋根が隠れるぐらいの高さで土手で囲まれ、万一事故があっても、その棟だけでおさまる様になっていました。僕達はその中の三〇六号家に配属され、毎日、電気雷管の信管部分のヤスリ掛けで、時々木箱に入った弾薬を大八車に乗せ、松林の中の壕へ運んでいきました。昼食は食堂で食べるわけですが、ご飯は量を多くする為に、大根の葉や茎、鮫の肉等の入ったものが多かったと思います。それでもたまに食事当番が回って来ると少し余計に食べられる為、喜んだものです。

当時、工場からもらった報償金計算書を見ると月に交付金が一人二十六円で、そこから授業料四円五十銭、父兄会費一円五十銭、特別会計繰入金一円五十銭が差し引かれ、残りが手渡金だった様です。

昭和二十年四月になると、四年生になった先輩から予科練に志願する人がぼちぼち出て来ました。

この工場も時々アメリカのグラマン戦闘機の機銃掃射を受ける様になり、その為それぞれ一人用の小さなタコ壺式防空壕を掘る様に言われ、空襲の時はその中に避難しました。

終戦の数ヶ月前、母は病気の為、慈恵医大東京病院へ入院。手術を受けた晩、東京大空襲で東京が焼野原になったと言うことを聞き、すぐに父と二人で池袋まで電車で行った所、省線電車は動いていないので、仕方なく一面の焼野原を伝通院から春日町、飯田橋、有楽町と歩き、新橋まで行くと、焼野原の為、見晴らしが良く、ぽつんと慈恵医大のビルが立っついて迷わずに着きました。幸い母は医大の地下に避難していました。「お母ちゃん、夕べは空襲で大変だったね。心配したけど、無事でよかったね。」「お父ちゃんも幸ちゃんも遠くから直ぐ来てくれてありがとう。元気だから大丈夫だよ。飯能は変わらない。」「うん、みんな元気だよ。」病院での話によりまずと、東京病院が空襲で焼失した為、母が手術を受けた最後の患者さんだったそうです。

その後、父にも召集令状（自宅待機）が来た為、母は山形県の親戚のある新庄の病院へ入院しました。その後しばらくの間、山形県の新庄から手伝いに来てくれていた従姉妹の美代ちゃんと二人での留守番でしたが、「今夜あたり空襲がありそうだから、幸ちゃん洋服を着たまま寝た方がいいよ。枕もとに防空頭巾と雑嚢も忘れないでね。」、とよく言われま

したが、その予感が又よく当り、夜中に空襲警報のサイレンが鳴ると、もう近くをゴーゴ―と銀色の大きなB・29の編隊が飛んでいるのが見え、それに向かって地上から数本のサーチライトの光が交叉。ドンドンと言う高射砲の音。それにしてもきれいだなあ、なんて呑気な事を言っていると、早く防空壕に入る様、美代ちゃんにせかされ、急いで防空壕に飛び込みました。

それから暫くして、僕と美代ちゃんは新庄の親戚の家へ疎開することになり、夕方隣りのおばさんに、「では行つて来ます。後はお願ひします。」と挨拶に行くと、「これ饞別。うちで採れたきゅうり、一本きりないけど途中で食べて行つて。」と渡してくれました。「ありがとうおばさん。」出がけに父に、「お父ちゃん一人で大丈夫かなあ。」と言うと、「大丈夫、それよりお母ちゃんたのんだよ。」「うん、わかった。」「じゃあ行つてくるよ。」「気を付けてな。」

上野駅に行くとき夜なのに空襲に備えての灯火管制で駅は真つ暗、やつとの思いで列車に乗り込むと、もう先に兵隊さんが一杯乗っていて座席は満員で座る所などありません。そろそろきゅうりを食べようということになり、美代ちゃんと半分ずつ何も付けずに立ったまま食べてしまい、やつと新庄に到着。

新庄の伯父は材木工場の工場長をしていた為、僕は工場の事務所内の和室で寝起きすることになり、毎日掃除など手伝ったり、暇になると、「お母ちゃん何か用事はない。」と病院に会いに行ったり、頼まれて農家へ買い出しに行ったり、又暑いと最上川の支流で泳いだりの生活でした。田舎の農家の人は親切で買い出しに行くと、よく水かけご飯でも食べに行けと声をかけてくれ、ご馳走になりました。「冷たい水かけご飯はうまいなあ。おぼさんありがとう、ご馳走様でした。」「又来いな。」「うん。」

新聞やラジオや人からの話で、ソ連参戦、広島、長崎に新型爆弾が落ちたことを聞き、だんだん大変なことになって来たなと思っていると、昭和二十年八月十五日、天皇陛下の重大放送があるので皆起立して聞く様にとふれがあり、母の入院している病院の庭で聞きました。

あちこちに、ひまわりの花が咲き、すごく暑い日でした。これでやっと戦争が終った。これから日本はどうなるのかなあと、ぼーっとしていると、伯父が、「幸彦、日本は敗けたんだ、これからどうなるかわからんから、ここに残って百姓になれ。」「えー。百姓になるのはいやだ。飯能へ帰る。」「そうか、幸彦がいなくなると又寂しくなるなあ。お土産に食べる物用意するから、うんと持って行け。」「うん、伯父さんありがとう。それからお母ち

やんのことお願いします。」「大丈夫だ。安心して飯能へ帰れ。」

重いリュックサックに大きな風呂敷包み一杯のお土産を両手に持ち、上野行の列車にやつのことでも乗り込んだら、もう座席は勿論、通路から車内のトイレまで満員、その上綱棚も一杯、身動きが出来ない上、トイレから流れ出た水で通路はびしょびしょで荷物を下に置くことも出来ず、仕方なく両手に大きな風呂敷包みを提げたまま十数時間が経ちました。「大宮、大宮。」「すみません。降ります。」ああ、やっと帰って来た。「お父ちゃん、ただ今。」

遠い空に入道雲、真夏の太陽がぎらぎらと照りつけていました。

カラムシ採り

山口 恭 男

「山口、頑張ったな。よくこんなに沢山採ったもんだ。それに、皮をむいて干してある。本当は、ここまでやるものだ。えらい……」

ゲタさん（関口文雄先生）にみんなの前ではめられ、わたしはキョトンとした。ゲタには、おこられたことこそあれ、ほめられたのは、前にも後にもこの時がはじめてであった。嬉しくもあるが、少々面映ゆかった。

カラムシは、虫の類たぐいではない。れつきとした植物である。しのに似て、太さは五ミリ程度、高さは一〜二米、茎には、桑の葉大の葉が交互についている。世界大百科事典（平凡社）によれば、イラクサ科の植物で、茎から勒皮をとり、布を織るとある。古くから、日本・中国などの温帯に多く生えているという。

戦争末期の昭和十九年（川中一年）われわれにも、休み中の宿題としてカラムシを採ることが課せられた。カラムシのせいで軍服を作るのだという。

飯能付近のカラムシは、山地の湿地帯や崖下などに群生し、ヤブ蚊・マムシも多く、これを採るには多くの危険を伴った。命がけといっても過言ではない。

わたしは、カラムシ採りを飯能一小六年の時にも経験したが、長ズボンにゲートルを巻き、手に鎌を持ち、班毎に別れて行動したのだった。そんな体験から、中学生のカラムシ採りなんて……と、タカをくくっていたが、休みが残り少なくなるにつれ、次第に心細くなってきた。カラムシを採った場所すら定かでなくなり、一人で探すことへの不安はつ

るばかりであった。

こんな時ふと頭に浮かんだのは、ばあやのことだった。二才で母を失ったわたしは、ばあやに育てられた。

彼女は、わたしを育てる役目のほか、実家の病院の患者の血やうみのついた包帯やガーゼの洗濯をする仕事も担当した。洗濯機や乾燥機もない昔のこと、仕事は激職だった。作業は全くの手洗いで、身を切るように冷たい真冬も一日として休むことなく続けられた。

こんなばあやの乳をまさぐりながら育ったわたしにとつて、彼女の存在は、終生母親以上のものだった。実子のない彼女にとつても同じ思いであったにちがいない。小四の時、家の都合で辞めた彼女は、原市場へ帰ったが時々病院には顔を出していた。

そうした機会に思い切つてカラムシのことを相談してみた。彼女は、「自分は知らないが、父ちゃんならある所知つているよ。心配することないよ」と、なぐさめてくれた。

何日かして、彼女の家をおとずれたわたしは驚いた。家の庭一面にカラムシの皮が、ていねいに干されてあつた。わたしはそれを見てまた心配になつた。普通、カラムシは、皮つきの棒のまま提出することになつているのに皮だけになつていたからだ。

「これじゃ、先生におこられちゃうよ」と、へそをまげた。

旦那は、「ちがうよ。カラムシは皮だけが役に立つんだよ。棒のまんまじゃいくらも持てないよ。」と、自信をもって言ってくれた。

かくして、ゲタさんは、わたしの分は棒の目方も適当に加えて記入し、無事に提出は終った。

ばあやの夫は、若い時の事故で、実家の病院で片足を切断し、終生、松葉杖の生活であったが、身障者にもかかわらず、普通の人と同じようによく働き、全くハンデは感じさせなかつた。

それにしても、松葉杖での急な山道の登り下り、沢山のカラムシを背負うことの苦しさは、並大抵のものではなかつた筈である。

わたしは、何もせず、みんな人にやらせてろくに礼も言わずに帰つたことのおろかさ、今ならそれなりのお返しもするのにと、今の今も反省の念でいっぱいである。

ばあやの夫は、わらじ作り、縄ない、たきぎ採り、まきわり等で日銭を稼ぐのに精一杯ばあやは、病院へ泊り込み。貧しいくらしを絵にかいたような生活だったが、二人共、死ぬまで誠実に働き続けた。

だから、戦争というと、カラムシのこと、ばあや夫婦のことがまっ先に浮ぶのである。

でも、カラムシは、当時の庶民の苦々しいくらしぶりの遺物としか写らない。だから、知らなくてもいいのかもしれない。

二度と、こんなことで、児童・生徒を危険な目にさらし、一旦、事故でも起きれば、「国のために命までなげ出し……」とか、「自分の不注意で……」……のひと言で片付けてしまふような、無慈悲で、お粗末な時代にひきもどしてはならないと思う。

想　い　出

—今は亡き赤田先輩のことなど—

吉 田 稔 美

想いをめぐらせば尽きることはない。五十六年も前のおよそ忘却の彼方に霞んだと思われるさまざまな体験や思いが綺羅星のように甦ってくる。

ゲートル時代の道は

吾等二人歩みし道よ

懐かしの道よ

……

と、テニスの歌う詩的な道ではなく、砂利道の、凸凹の、土埃りの、乾いた灰色のものであったが、また、桜が咲き誇る航空士官学校の道であり、さつき咲き、雲雀のあがる報国に燃える少年時代の懐かしい道でもあった。

何よりも前方を歩く赤田さん、小山さんたちの戦闘帽姿があつた。新人生にとって輝くほどの存在であつた。

敷島の大和心を人問はば

朝日に匂ふ山桜花

と、道すがら教えてもらったのは、私の姉が赤田さんのお姉さんの飯能高女の先輩であつた誼みであつたのかもしれない。入学当初からいつも私に温かかつた。また多くのことを教えていただいた。

幕末の志士清河八郎の

魁^{さきが}けてまたさきがけん死出の山

迷ひはすまじすめらぎの道

国家、民族のために命を惜しまず生きようという思いを私に語られたのも当時のわれわれ

軍国少年にふさわしい。稻荷山の往復での赤田さんの豊富な学識と熱い志をとおして学ぶことが多かった。

颯爽とした戦闘帽、輝く瞳、アルバムに赤田さんと撮った一枚の写真がある。微笑した姿の中に「旒檀は二葉より芳し」のことばどおりのものがある。

P・51の士官学校機銃掃射の思い出がある。入間川駅から稻荷山公園駅へ向う十数人の群れがあった。突如爆音とすさまじい機銃の音に戸惑ったとたん、超低空で襲いかかるP51の機影。攻撃を避けようと赤松の林に駆け込み太い幹の回りをめぐるようにしているわれわれ下級生に、「土手に伏せろ」と腹這いに伏せて、大声で命令された沈着冷静なあの時の行動も心に焼きついて離れない。

毎朝五時に起床、吾野駅まで自転車、川越までの二時間半をかけての通学、一時間に一本という吾野線では、次の電車では遅刻してしまう。学校には一時間も前に着いてしまい、剣道場の脇でコンサイスを引き、数学の公式を暗記し、寒い時には校庭を何周もしたこともあった。お蔭で強健な体力をもって青梅駅伝や各種マラソンで優秀な成績を挙げることができた。精神と肉体の両面を鍛えるのにこの通学が役立つたのであろう。

通用門を右に折れた川商通りに吾野出身のおきぬさんの営む「浮島館」という下宿があ

った。ご主人は野口米三郎さん、川中の応援団長で大のファンであったがこの二階の一間に下宿することになった。この部屋の隣りには、当時三年生の先輩で原市場出身の山川保夫（現・清水）さんが居られてあれこれと学校のことを教えてもらったが、望郷の思いは通学の苦しみを超えて、たちまち自宅通学にもどった。山川先輩は青梅に住まわれ、青梅美術家協会々長として活躍され、今でも昵懇にさせていただきご指導をいただいている。この下宿では卒業間近の半年程本橋君が過している。

敗戦の年の二月からの「火工廠」への通年動員では当番長、連絡係を命じられた。川越線（大飯線）で南古谷駅へ、ここから「火工廠」へ、帰りは東上線で川越を回るといふ通い方であった。赤田さんは朝霞の「被服廠」ということでお会いすることもまれであった。食糧難の時代でもあり、体調を崩された赤田さんにご指導をいただいたのは、大学の講師であったその途中からの思いもよらぬ市議会議員の道を選んだ時、氏が役所に居られ、再びご指導を願ったことであった。

「ポーランド懐古」を歌い、軍歌を歌った軍国少年の日々は鮮明に私の心の中に息づき、赤田さんをはじめとする諸先輩のご指導の数々が、私の精神形成の原点にあることを痛感している。

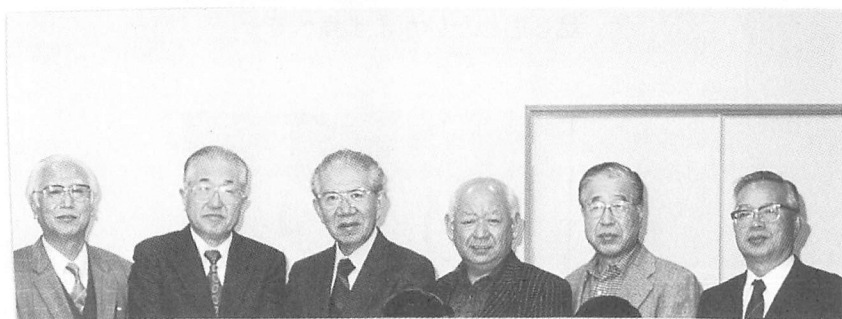
第六章 おーい楠の木よ

—高三回—

幼き心今いずこ



〈S. 20 川中入学時〉



揃った揃った…同期の桜（楠の木か）



どうだい、俺たち仲間は



話もしたいがまず食べて



よお！〇〇の方はどうだい

半年の体験

浅見茂男

昭和二十年四月に埼玉県立川越中学校に入学した同期の友が、川越高校第三期生還暦の記念文集「おい楠の木よ」を発刊したのは平成六年三月。その記念誌に私の拙文「ゲートル会」なるテーマでゲートル（戦中は外来語は使用禁止、巻脚絆と言った）巻いての稲荷山公園での苦い思い出と「飯能ゲートル会」について触れご紹介いたしましたのであるが、今般「懐かしのゲートル時代」の体験を仲間の記事として冊子にまとめて戴くことになった。今回は戦中の「同期生」の文集でなく「同窓」の文集として、それぞれの世代の体験談が発表されることは真に意義があり大いに期待するものである。

我々同期の仲間は戦中、戦後の六年間、中高時代をひとつの校舎で学んだ。戦中をゲートルを巻いて行動した時代と意義付けるならば戦後はゲートルから解放された時代であり我々同期の仲間も半年ぐらい戦中を体験したことにより戦中の人間として評価されよう。

戦中の新入生の服装は白線入りの戦闘帽、改造軍服、足にはゲートルそして軍靴、鞆は背囊という、いでたちであった。教室での勉強の覚えは殆んどなく、専ら教練、体育、作業で、勤労働員で近隣の農家に農作業に行った記憶がある。矢張り一番大変だったのは通学であった。毎朝五時に起床、六時前に家を出て武蔵野線（西武秩父線）の吾野駅から稲荷山公園駅で下車、二キロ歩いて入間川駅へ、再び本川越駅まで電車に乗り、駅から学校まで二キロ、毎日往復八キロの道程を歩き、走り、整列行進をした。体力のない中学一年生のゲートル巻きと軍靴は負担は重く先輩の後を追いついて行くのが精一杯で、先輩達に大変迷惑をかけたり、お世話になった思いで一杯である。

当時の吾野谷からの仲間、風影から加藤康夫君、南川から岡部良一郎君が入学されたが加藤君は一ヶ月足らずで所沢の親戚に寄宿し岡部君は転校してしまった。電車の便が悪く、遠距離通学も原因となっていたのであろう。

しからは現在の我々の仲間はどうだろう。戦中の貴重な体験や半年間のゲートルとのお付き合いによって、巻脚絆の如く長く堅く結ばれ、六年間に培われた結束とエネルギーがあるように還暦の文集となって上梓したものと思われる。また川中二〇（フタマル）会のゴルフコンペは昭和四十七年に発足し今年の九月二十九日に開催されるコンペは実に百十六

回の大会となっている。それ以外に同窓会、ハイキングの会、俳句の会、美術同好会など多彩な行事が毎年計画されている。

最後に地元での行事を紹介しておこう。前述の加藤康夫君が経営している顔振峠の富士見茶屋の離れを川高第三期生の山荘として借用し常時仲間が気軽に利用している。又毎年一回ミニ同窓会が開催され一泊の場合は加藤君の生家を宿に借用している。又他地域においても、このようなグループ活動が盛んに行なわれ新しい集団が誕生していると聞いている。

飯能初雁ゲートル会におかれても、文集の発刊を機に同窓の輪が、より拡がって行くことを期待します。

B | 29の空

内 沼 一 雄

私が川中に入ったのは敗戦の年で、稻荷山公園の道を毎日歩きました。その後何年生の

ときか覚えていませんが、所沢まわりに変わりました。それでも帰りには稻荷山や、たまには入曾から武蔵藤沢まで歩いたり、最後の頃には入間川から豊岡行のバスに乗りました。稻荷山の道は入学当時は桜並木の道できれいな花が咲いていました。進駐軍がくると、道幅を広げるためでしょう、桜の木は切られ、ブルドーザーという初めて見る機械でほじくられて殺風景になってしまいました。

当時の通学では国民学校も中学校も隊列を組んでいました。特にひどかったのが敗戦直後で陸士がえりだったか、海兵がえりだった上級生の命令で、本川越から川中まで駆け足をやらされました。幸いにして稻荷山の道ではそういうことはありませんでした。列も組んでいかなかったような気がしますが、1年生同士でふざけながら歩いていても上級生から恐い目にあわされることはありませんでした。

学校では上級生がやたらに威張っていて、お説教と称してつまらない理由をつけては下級生をしぼったり、なぐったりしていました。そういうときにも飯能出身の仲間意識は働いていたようで、五十嵐さんからなにか手加減してもらったことがあります。

当時は教科書が手に入らず、私は小山さんと飯実に通っていた従兄弟から借りていました。英語の教科書は筆写したような記憶もあります。小山さんから借りたうちの一冊は歴

史の教科書でしたが、タイトルのページを鉛筆書きの立派な文章で埋めつくしてあって、とても真似できないと感心しました。小山さんにはその後もたくさん本を貸してもらいました。日当たりのよい縁側で話をして、次の本を借りてくるといふ具合の定例訪問が何年も続いたのです。感激していたのは、「旅愁」、「天の夕顔」、「銀の匙」などでした。

川中に加治国民学校から一緒に入学したのは岡田君でした。彼は6年のとき疎開してきて、戦争が終わるとすぐ引き上げてしまい、以来まったく消息を知りません。印象に残っているのは、貨物車降り事件です。たまたま来た無蓋の貨物車に乗ったのはよいのですが、元加治の駅で止まらないのです。何人か大人が飛びおりに続いて、彼も飛び降りしました。見ているほうは一瞬息がとまりましたが、幸い転んだだけでした。

岡田君と一緒に国民学校のクラスを訪ねたこともよく覚えています。みんな学校ではなく、松根油をつくる作業に出ていました。場所は加治橋のたもとだったと思います。炭焼場のようなところで、松の根を乾留していたのでしょうか、話もろくにできないくらい、真つ黒になって仕事をしていました。戦争もここまで来たかと感じたのでしょうか、さすがに暗い気分ではいっぱいでした。なお松の根を掘るのは隣組の婦人たちの役割でした。しかし、B・29の爆撃で石油精製工場はほぼ全滅していましたから、せっかく作った松根油か

らのガソリンはおそらく半製品のまま8月15日を迎えたのでしよう。この頃華やかなものといえは航空士官学校の生徒が首に巻いている原色のマフラーだけでした。彼らは特攻にいったのでしょうか。

戦争の思い出を一つだけ挙げるとすればB・29です。最初に来たときはただ1機の偵察で、こちらの戦闘機はどうしてかかつかないのかとショックでした。まもなく富士山から東に向きを変える大編隊がやってきて、青い空は飛行機雲だらけになりました。凄かったのは3月9日夜の東京大空襲です。屋根からみると東の空が一面赤くなって、まさに世も末の光景でした。翌日の登校時には東京は焼野原になって、飯能にも大勢着のみ着のままの人が避難してきたという噂でもちきりでした。飯能でもB・29の爆撃があるとデマがとんだのでしよう、ある日の夕方町中から六道のほうへ避難する人たちがみられました。川中に入った頃はすでに艦載機のF・4Fがわがもの顔で飛びまわっていました。電車が不通になるので、川中からよく線路を歩いて帰ったものです。これも飛行場の横を通るのですから今から考えると危険なことをしていました。

川中では防空壕のタコツボ掘りをやらされているときに、そのときは君塚君が一緒にいました。硫黄島からきたP・51が東南のほうで次から次と急降下攻撃です。2年生と4

年生が動員されている火工廠がやられているという人もいて心配しました。

8月15日の天皇放送では、ソ連への宣戦布告ではないかとか姉達と予想していましたが、父はなぜか黙っていました。天皇の放送はチンプンカンプンでしたが、その後の政府声明を聞いているうちに負けたらしいと気がつき、力が抜けてしまいました。

終戦になって進駐軍がくると、こわごわながら物珍しさで稲荷山の道をジープに乗せてもらったり、キャラメルをもらったりしました。一度電車の中で帽子をとられてしまいました。面白がつてやっているだけなのですが、返してくれるまでは気が気ではありませんでした。このときは豊岡の柳澤君が一緒でした。

なにしろ大変な時代で、辛くもあり、またなつかしさもひとしおです。しかし原爆の完成がわずか半年遅れていたら、日本本土は地上戦の戦場になってしまい、なつかしいとは到底いえなくなっていたのではないのでしょうか。当時は大東亜共栄圏などと美名をかかげていましたが、実態が段々わかってみると、日本はアジアを侵略しつづけ、あげくの果てはヒトラーのお先棒をかついで世界戦争に突入したのです。あの戦争による死者は日本人が約310万人、その他のアジア人が約2000万人だそうですから、侵略された国々の人たちは日本人よりはるかにひどいめにあわされたのです。それを忘れるのは許されない

ことだと思えます。

戦後は野球が盛んになり、所沢や入間川の連中がチームをつくったので、武蔵野線も飯能から豊岡、三ヶ島まで一緒になってチームをつくりました。試合は何回やったのでしょうか、勝った記憶はゼロです。私は打つほうはさっぱり、守るほうも失点に貢献するばかりで、迷惑をかけました。チームの名前はユニオンスだったと思います。クラスの中の対抗でアンパイアに引っぱりだされたこともありましたが、ボールとストライクの判定が不安定で、悪評さくさく、1試合でお払い箱になりました。

中学のときは郷土班にいました。私が歴史に興味をもったきっかけは、加治小の通学路から六道のほうへ寄り道する途中にあった庚申塚です。自然石の大きい碑で、裏に高麗郡と彫ってあり、昔から入間郡だったのではないことを知りました。郷土班では秩父や日光へ旅行したり、名栗で合宿したりで、楽しい思い出がいっぱいです。

アーボーこと原田先生が指導者で、年も近くて親しみがありました。飯能にも来られて、中着田を歩いたり、阿須の山が上がったりされ、私もお供しました。最近川越の松村君などからまた郷土班ごっこをやるうという話があつて、昨春秋先生宅にお邪魔しました。そのときはお元気だったのですが、3月に急逝されました。ご冥福をお祈りする次第です。

思い出すままに

十二〜三才の頃

赤 田 康 二

昭和二十年B・29による本土空襲がますます激しくなった三月、川中入学試験が近づいてきた。三月十日の東京大空襲は、まだ明けやらぬ東の空が赤く染まっているのをじっと見つめていた記憶があるがその時の心境が思い出せない。兄の『ぼくの軍国少年期』によるとその十日後の三月二十日弟の入学考査とある。入試の記憶は、体力テストとして鉄棒で懸垂を何回もして逆上り、そして短距離を走り、短棒の投擲であった。比較的得意としていたのでそんなに苦もなかった。次の口頭試問は那須大輔先生と数人の先生方の『尊敬する人物』の問いに大楠公楠木正成と答えた。そして三月二十三日合格発表と記されているので僅か三日間で入学が許可された。そうして三月二十九日小学校から移行された国民学校初等科修了証書とともに、われら大日本青少年団の旗に別れ、あらためて川中生へ思いを馳せた。

そして入学

川中通学が始まったが一年生の仲間の記憶のみでほとんど上級生への記憶がない。二年生以上は学徒動員に駆り出され登校日以外は来られなかったためだろう。服装は国防色のカーキ色にきめられ、『からむし』で織られたような目の粗い生地のものが配給され、学帽は各自調達となり私は祖父の中折れ帽子を改良した分厚い生地の戦闘帽があこがれの白線帽のスタートとなった。ゲートル（教官は脚絆といった）の巻き方から始った教練、配給されたゲートルもスフといわれた光つてすべりやすい生地で、すぐよれよれになり、しっかり巻いたつもりでもじきにずっこける代物で一日の間に何度も巻き返さなければならなかった。兄の巻いているのはちよつといい生地でかっこうもよく見えた。

空襲も日増しに多くなり激しさを加えてきた。通学電車がしばしば運休となった。帰路所沢より二回、稻荷山公園駅より数回線路伝いに歩き元加治の鉄橋など小さな体で這いつくばって渡った。ある時は疎開する人が大荷物を持ったまま電車が止まり途方に暮れている老人の荷物を渡辺謙君と二人で棒を通して担ぎ、仏子の駅まで運ぶ手伝いをした。老人に感謝されそのお礼は爆弾あられの小袋だったが、食物のないとき精一杯のお礼だったのだろう。翌日横田先生からお褒めをいただいた。

また稻荷山で空襲警報が発令され、艦載機P・51の襲来にちょうど居合わせた兵隊の一団といっしょに避難命令が出て公園の松林に逃げこんだ。松林の中には蛸壺と称する直径、深さも一、二メートルぐらいの穴が幾つも掘ってあり兵隊に誘導され穴に飛び込んだ。これは防空壕ほどの安全性はなく上から攻撃されたら一溜まりもないが横からの爆風を避けるものであった。往帰路数回蛸壺に避難した記憶があるが林の中だったので直接攻撃をうけず、機銃掃射の音を士官学校の離れたところに聞いただけだったのは幸いであった。帰路運休により歩いたのは覚えているが往路運休時歩いて登校した覚えがないのは、多分空襲警報発令の際は自宅学習待機が認められていたのだろうと思う。

この時期、私は釣りが好きだった。空襲等で学校が休みになると峰岸（現瀉沼）稔君と誘い合い山の中は安全ということで山道伝いに宮沢の貯水池に出掛けた。大きな鮒が目的であったが遊泳禁止であったかもしれないが静かな貯水池で泳ぐのも楽しみの一つだった。六尺禪で池の西側部分のくびれて狭くなっているところを向う岸へ泳いだ。ある時泳ぎながら潜りをしたら、途中から水が急に冷たくなり、目の前が辺り一面水苔などの浮遊物で暗くなり流れがあるように思えた。慌てて浮び上がり岸に戻ったが、急に変化する水温等が水の事故をもたらすことを感じ以後貯水池での泳ぎを止めた。ちょうど終戦の頃ではな

かっつらうか。

私たちは農家への勤勞奉仕、荒川べりの農場作業、製粉工場の作業手伝い等で軍需工場への動員の経験はない。終戦まで通常授業も多くあつたのではないかと思う。一四〇センチにもみたくないような体で身の丈よりはるかに高い木銃に、何を託して教練の時間を真剣にうけていたのだろうか。

米兵二題

その一

空襲が解除された休み時間、二階の教室の窓から正門楠の木の方をみると目隠しされた二人の大男が上半身のシャツが破けはだけて両手は後ろ手に縛られ、三人の憲兵に守られて入って来た。とつさに今日の空襲で撃墜されたB・29の搭乗員であると察しがついた。

『日本はこんなデツカイ人と戦争をしているのか』『こんなデツカイのと戦つて勝てるのか』はじめて見た米兵にとつともない恐怖を感じた。護衛の憲兵が米兵の肩にもとどかずあまりにも小さく見えたからだ。校長室に入れられ鍵をかけられたが怖くてその近くに寄れなかつた。日頃よく教えてくれる英語の先生が通訳に当ることになつたと聞き、うまくやつ

て下さいと少年心にしきりに心配をした。『レーダー』という言葉をその席で初めて聞いたと後に知った。

その二 英語が通じた

終戦、そして米軍に接収された陸軍士官学校はジョンソン基地となつて、その通用門は武装した米兵によつて固められた。まだ殺伐とした警戒心は互いに切り切れずなかなか近寄りあえなかつた。恐る恐る門の反対側を米兵と距離を置いて通学した。駅構内でパンのへりや、たばこの吸いながらを線路に投げ捨てる米兵、それを拾い取り合う日本人の姿は今も脳裏に残っている。

ある日、一人の米兵が稲荷山駅構内で数人の我々学生に向かつて『ヘイ、ボーイ』といつてチュウインガムを一枚づつ出してくれた。見上げる大男の青い目の中に優しい笑みがあつたように思えるが、突然のことと欲しさがこんがらかつて声も出なかつた。しかしうまかつた。それから米兵に対する警戒心が解け始め、何時しか通学时、門衛の米兵と目と目を合わせられるようになった。こうなるとチュウインガム等の欲しさも手伝い、習った英語を試そうということになった。そして笑顔の守衛の米兵に『Can you spe

ak Japanese?』『No』と返ってきた。初めて英語が通じた喜びだった。そして『English?』の問いに『オー・イヤー』の答えで、学校で教わった“Yes”ではなかった。次は手を上げてジープを止め『Get on Please』これも通じて稲荷山駅までジープに乗せてもらったのはうれしく得意だった。

こうして米兵のやさしさを知り、豊かな米兵から分けてもらったチョコレート等の美味さを知った以上に心が温まった。

懐かしのゲートル時代

～初雁少年青春の一コマ～

角 谷 文 昭

いただいたテーマからいえば、私の場合、まったく書くことに該当しないと思われます。なぜなら、私は昭和二四年四月から昭和二六年三月まで、高校二年と三年の二年間しか川越高校に在籍していなかったからです。

しかし、せつかくの機会ですので、テーマから外れますが、その当時のことを少し振り

返ってみたいと思います。

昭和一九年八月、東京都杉並区立方南国民学校六年生だった私は、国策により学童集団疎開をすることになりました。杉並区の疎開先は長野県でありました。

昭和二〇年三月、中学受験のため、六年生は東京に帰ることになりました。

家族は、東京都電気局（現在の東京都交通局）に勤務していた父を除いて、母の実家がある山形県の庄内地方に疎開していました。

私も家族と一緒に山形県に疎開するか、父と二人で東京に残るかどちらかを選択しなければなりませんでした。

受験の結果をみて、判断することにしました。合格したら東京に残ることにしました。受験の結果、東京高等師範付属中学校に合格しました。

京王線の代田橋から新宿、大塚を通って学校まで一時間弱の電車通学でしたが、空襲があると電車の運転が中止されました。その時はよく電車の線路を歩いて家に帰りました。

昭和二〇年五月、既に山形に疎開していた姉が東京に残してきた教科書を取りにきました。父は女一人ではと姉を送って山形へいきました。父の留守中は私一人の生活でした。

前日に弁当を作り、時間割をそろえて、非常持出の衣料等を入れたリックサックを枕許

に準備して生活していました。

昭和二〇年五月二十五日（金）夜、B・29による空襲があり、杉並の自宅が焼失しました。私は隣組の人と安全な場所をもとめて避難しました。途中でリックサックに火がつき、リックサックを捨てて逃げました。

翌朝、家に戻ると全焼でした。

罹災した人々は、家から十分位の焼け残った隣保館で一時生活することになりました。父に電報を打ちましたが、いろいろな部署が混乱していてなかなか連絡がつきませんでした。

父が東京に戻ってから、これからどうするかを相談し、私も父も山形に疎開することにしました。

私は、山形県立鶴岡中学校に転校しました。

家から羽越線余目駅まで歩いて三〇分、汽車で鶴岡駅まで三〇分、鶴岡駅から学校まで三〇分、通学するために毎日二時間歩いたことになりました。

冬には吹雪の中を、今から考えるとよく通ったものだと思います。終戦後しばらくは通学定期は発売されず、毎日切符を買って通学しました。

昭和二三年夏、飯能に住んでいた知人の紹介で父の仕事が見つかり、飯能に転居することになりました。

私は学年の途中のため、高校の一年が終るまで、鶴岡の親戚の家から学校に通うことになりました。

昭和二四年四月、埼玉県立川越高校二年に転校しました。

鶴岡も川越も城下町であり、学校の敷地も城跡であり、駅から遠いことなどでもかなり共通点があります。街並みも落ち着いており人情も細やかで生活するにも適しているとよくよく似ていると思います。このような環境からなのか、転校についてもあまり違和感がなく、卒業するまでの二年間、先生や同級生に大変お世話になりました。

心から感謝しております。

私の青春時代も戦争によって多大の被害を受けました。

戦争のない平和な時代を子孫に残すためにも残された人生を悔いのないように過ごしたいと思います。

ゲートルの思い出

加藤 博

直接戦争に巻き込まれた先輩達に比べればはるかに恵まれていたが、懐しのゲートルを捲いて通学した最後の学年である。

戦争も末期を迎え敗戦の様相が色こくといっても、子供心にはそんなことを知る由もなく必勝を信ずるのみだった。この年、昭和20年、飯能一小から県立川越中学校へ合格したのは7名であった。うち3名が疎開児童だから、東京の学力レベルは相当開きがあったように思われる。

渡辺謙君の親父さんにドイツ製のカメラで合格の記念写真を撮ってもらった。ゲートルを捲いた7名の写真がアルバムに残っている。

その時、謙君の家にはスキーの板があった。

ある晩、疎開の友人宅に数人で遊びにいった。テラスがあつて三脚つきの天体望遠鏡が

セットされていたのにはびっくりした。残念ながら曇ってしまい、あのリングの美しい土星の観測は出来なかったが、天体望遠鏡にしろ、カメラにしろ、スキーの板に至っては、今流に言えばカルチャーショックを受けた覚えがある。

ゲートルといえば、登下校よく歩いたものである。短期間であったが、国鉄川越線を利用したことがある。高麗川駅で乗り換えるわけだが、朝の連絡はまあまあであったが、帰りは一時間も待たされることがあり、しゃくだというので鹿山峠を歩いて帰ったことなど珍しくなかった。

主な通学路は、武蔵野線を利用して稲荷山公園歩きが多かった。片道4キロだから、往復でゴルフのワンハーフ近く、毎日歩いていたことになる。電車はモーターがよく焼けてしまつて、運休など当り前であった。

多分、体育の授業で、川中名物めがね橋折り返しの持久走があった日だったと思う。稲荷山公園歩きは止めて、所沢まわりで帰ることになった。所沢駅の階段を足を引きずりながら昇つて、ようやく電車に乗ることができた。なかなか発車しない、いつものことだからとたかをくくっていたら、変電所にアメリカの飛行機が撃墜されて、復旧のめどはたないという案内があった。(後で歩きながら見たら、撃墜されたのは日本の飛行機だったの

だが、線路伝いに歩けば一番近いし、もし復旧すればすぐ乗れるかもしれないし、はるか飯能めざして歩き始めた。

第一関門は藤沢駅と稲荷山公園駅の間にある、陸軍航空士官学校の基地で、線路伝いに歩くことはまかりならぬということだった。

はるか遠回りをして豊岡駅まで迂回しなければならなかった。

豊岡駅を過ぎるとすぐに鉄橋がある。これを渡るのは短いらしいことはなかった。

第二関門は仏子駅と元加治駅の間に掛っている鉄橋にはまいった。長いし高いし、多分靴を脱いで、這うようにして渡ったように思う。稲荷山公園歩きで帰れば、距離も半分ですんだのに、とんだくたびれ儲けの一件であった。

半世紀も遡って、通学の苦勞を思い出してみたが、よくも歩いたものである。

懐かしのゲートル時代

君塚 功

昭和十六年十二月八日勃発した太平洋戦争で、日本の敗色が濃厚になってきた昭和二十年四月、川越中学に入学した。

この時の入学試験は内申書が主で筆記試験がなされず、口頭試問のみ行われた。敵機B・29は何人乗りで、そのうち何機を撃墜したら何人敵を殺せるかと、質問されたのを、今でも覚えている。

通学には、ゲートルを巻き、飯能駅発六時か六時三〇分の、当時武蔵野線（現在の西武池袋線）といった電車で、稲荷山公園で降り、入間川駅（現在の狭山市駅）まで約二〇分歩いた。当時、吾野より通っていた生物の横田先生も一緒に歩いたように思う。怒ると怖い先生だが、我々にはやさしかった。

入間川駅より、西武線（現在の西武新宿線）に乗り本川越駅で下車、当時は二両連結の電車で、前は男子学生、後は女子学生が乗ることになっていた。

本川越駅からは、上級生に指揮され、整列して学校まで約二〇分かかって歩いた。

当時は上級生といっても一年上のクラスの人達で、その上のクラスの人達は、工場に動員されていた。

当時の学校の先生で恐い先生がいた。教練の先生が木銃で学生の頭を突いたのには、驚

いた。入学してから敵機の来襲が頻繁になり、授業中警報が鳴ると、帰宅させられた。

帰宅途中、南大塚駅付近で敵機の来襲にあり、電車から全員降ろされて畑の中に避難した事があったり、入間川駅より、稻荷山公園駅まで歩行中、空襲にあり、公園の樹木の中に逃げたりした。

またある時は、空襲で電車が不通になり、川越から高萩を通過して飯能まで歩いて帰った事もあった。学校では、防空壕を終戦前に、先生に怒鳴られながら掘らされ、今度は終戦後埋めさせられた。

終戦後は、授業に落ち着きを取り戻し、先生も恐くなくなり、優しくなってきた。ただ予科練帰りの上級生は恐く、よく怒られたが一年くらいでおとなしくなった。

三年間の併設中学時代が終わり、自動的に川越高校一年生となり、三年間比較的平穏な学生生活で卒業した。

今、振り返ると、なつかしい思い出である。

回想

双木貞夫

飯能初雁ゲートル会も、開催を重ねること10回以上となり、当然の成り行きとして今般「懐しのゲートル時代、思い出集」を刊行するはこびとなった。

私の場合入学が終戦の年であった為、ゲートル（当時は巻脚絆と称していたと記憶している）を着用しての通学期間は短かったものの、全てが物不足の時代でゲートルの入手が大変困難であった。そして母が大切にしていた帯を一本犠牲にして帯芯で手作りのゲートルを作ってくれた記憶がある。

そして毎朝そのゲートルを巻いて家を出るのであるが、生まれて初めての経験故、なかなかうまく巻けず、最後の止め紐が足の脇に揃わず、又強く巻き過ぎれば歩行中ふくらはぎが張ってしまい、逆にゆるく巻けば途中でゆるみほどこけてしまうなど、朝の忙しい時間に、イライラして何度も巻き直した思い出がある。その苦勞の種のゲートル着用も終戦と共に、

程なく解消され、その後は戦斗帽から学帽に変わり、朴齒下駄、黒マントの旧制高校名残りのスタイルで通学した思い出がある。

母に無理を言つて買つてもらつた学帽をワザワザ破り、がっかりしている母親にミシンをかけてもらい更にポマードを塗りたくつてかぶるのをヨシとした——恐らく幣衣破帽をもつてヨシとした旧制高校伝統のパフォーマンスの最終ランナーであつたらう。

そのように硬派を氣どつている反面、通学電車の後部車輻に乗りたくてワザワザ遅く乗車したり（前の車輻は男子生徒、後の車輻は女子生徒という不文律があつた）して先輩にお説教をくらつたのもほろ苦い思い出の一こまである。

授業中エスケープして買つて来て空腹をいやしたあのコケツケの美味しさ、下校途中に寄る伊勢屋でのアイスクャンデーの甘さ等青春の思い出はつきない。

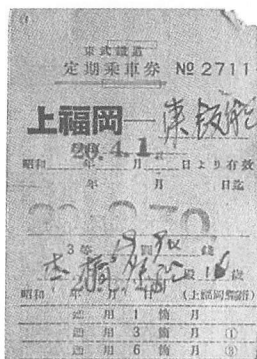
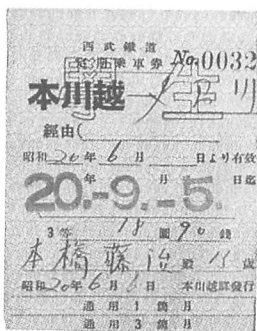
当時六十才の老人をみて、なんと年をとつたジイサマなのだろうと思つたその年令に自分も到つた今——感慨一人のものがある。

年をとるといふことは年令ではなく、心に、気持ちに若さと情熱を失つた時、はじめて人は老いるのだといふことを聞いたことがある。正にそのとおりで実感する。

中学校での相談員として、日々孫の年令の生徒達と接していると彼等のものの考え方と

〈P198関連〉

自分とのちがいの大きさに驚ろきと共にカルチャーショックの連続の毎日であり、それが年を忘れさせ、老いを防止することに役立っていることを痛感する今日此頃である。

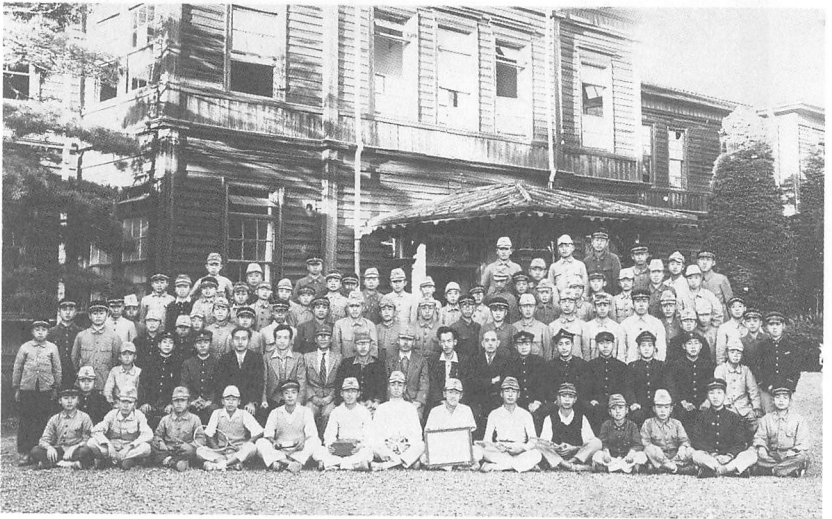


定期券S20.4.1 (本橋藤治氏提供)

第七章

最後の川中生

— 高四回 —



文武両道なんでもござれ（テニス部県下制覇記念写真）

(S. 21)



〈学界派〉 浅野光明 大浦一郎

〈H11.12〉



〈スポーツ派〉 1956年(S.31)メルボルン・オリンピック代表選手
(No. 12が斉藤博)

奥武蔵駅伝追想

浅野 光明

四十九回続いた奥武蔵駅伝も、このところの交通事情から、存続出来ないことになってしまった。

振り返れば、昭和二十七年一月二十七日に開催された、第一回奥武蔵駅伝の様子がはっきりと目に浮かんで来る。

昭和二十六年年度の川高陸上競技部は、春の学徒総合大会、秋の県民体育大会、冬の駅伝と、県下すべてのタイトルを総なめにして、まさに川高黄金時代の幕を開けた年であった。駅伝に限ってみても、

青梅駅伝（十二月二日）——第二位：三区木村（一年） 区間新記録

全国駅伝（十二月二十六日 大阪）——第六位：三区二杉（三年） 区間新記録

川越・松山駅伝（一月五日）——優勝。

埼玉駅伝（一月二十日熊谷―浦和間）——優勝、と赫赫たるものであった。

全国駅伝については、翌年三位となり、数年前、埼玉栄が優勝するまで、これは四十年間にわたり県下の最高記録であった。

このような連戦の疲れを残しながらも、一区木村（一年）、二区野口（二年）、三区三上（二年）、四区米山（二年）、五区東島（二年）、六区二杉（三年）のメンバーで、第一回興武蔵駅伝に参加したのである。

試合は、終始、日大二高、大宮工業に先行をゆるしたが、約七百米差でタスキを受けたアンカー二杉が、高校生活最後の走りとはばかりに猛追。天覧山下踏切で大宮工業を、ゴール前二百米で日大二高を抜き去り、トップでゴールした。最終結果は二位大宮工、三位松山高であった。二位でゴールした日大二高は、無資格選手の存在が判明して失格したのである。

ちなみに、この時の記録、二時間二十八分十五秒は、全出場チーム中最高で、大学の部で優勝した中大よりも一分以上速く、一年生主体で参加した川高Bチームの十二位と共に、大いに意気の揚った大会であった。

木下元男君（槍投げ）と、私（跳躍）の二人は、全コースを自転車に伴走したが、砂利

道のうえ、急な上り坂が多く、選手に置いて行かれることもたびたびで、終わってみれば選手よりも疲れきっていた。

第一回大会は大会関係者以外の方々の協力も多く、前日は小中学生が総出で吾野・東吾野地区の砂利道を整備したり、各中継所では地元婦人会が選手を労り接待するなど、地域を挙げての大会であったことを思えば、時代とは云え、奥武蔵駅伝が幕をおろすと云うことは淋しいかぎりである。

そして又、過去に、鈴木聞多という世界的に活躍した名選手を生んで以来、低迷していた川中陸上競技部に光を投げかけ、昭和二十一年より、生徒と一体になって、走り、跳び、投げて、御指導下さり、遂に川高黄金時代を築かれた松本利雄先生が、私達の企画した米寿の祝いを目前に急逝されてしまったことと併せて考える時、私の青春から続いてきた一つの時代に区切りをつけられてしまったような思いがして残念でならない。

呪縛の世界

伊 藤 継 善

終戦の年の暮に、学童疎開先の群馬県のお寺から東吾野小学校六年に再度疎開転入しました。卒業までの一学期だけお世話になったのですが、今でも同級会には声を掛けて下さるのが、とても嬉しい。当人は川中に行くのは、当り前と思っていました。そうでもないらしい。ごく限られた村の偉い人の子弟が行くところだと、後で分かりました。

子供の話題の中にも、例えばまんじゅうの数で、村の資産家の財産を示すようなことがありました。きっと親たちがいつも口にしていくからでしょう。資産家は、自らのランク意識に準じて村社会の費用を負担する。クラスの級長なども、男女とも大きな山持ちの子女でした。金持ちは家の手伝いをしなくて済むから勉強ができる、というよりもやはり子供心にも、そうあるべきだと思わせられる何かがあるからでしょう。日本の社会はエーテルの濃密さが特色だと思えますが、当時の山村はその典型でありました。

これは英国流の「貴族の義務」などというスマートなものではなく、また「人間関係におけるインフォーマルなルール」と規定するだけでは、味気ない気がします。今思うともっと土俗的な匂いのある一種の「呪縛」が、山村の社会を支配していたように思います。

「川越中学生」のプライドもまた、この呪縛の中に存在します。川中では吾野線通学者は遅刻が許されていました。よく「吾野は秩父郡か」と真面目に聞かれたものです。「入間郡」がそんなに重い歴史のある所とは知りませんが、とにかく僻地の観があつたらしい。電車は窓が板張りで、よく脱線しました。車軸が折れても砂利にめり込む位でびっくりしませんでした。スピードがないですから。

飯能で乗り継いで、稻荷山で降り入間川駅まで砂利道を急ぎ歩く。上級生でないと所沢経由を利用してはならない。誰に言われたことでもないのに、こんな乱暴なルールが厳存していたのですからすごい。まさに呪縛の世界です。途中で雨になると基地からの水があふれる低地があり、ズボンを脱いでジャブジャブと進みました。寒さの記憶よりも、貧しい下着に恥ずかしい思いをしたことのほうが鮮明です。電車は中学生と女学生とは車両が別でした。帰りに本川越駅でしばしば乗り遅れたのはそのためです。改札口に近い方が女学生の箱でした。本当に誰が決めたのでしょうか。時に悔しい思いをしましたが、不合理だ

という発想はありません。「川中生はかくあるべきだ」という妙な美学でしょうか。いや、やはり「呪縛のなせる業」ととつた方がぴんときます。

学校の正門からは入れず、通用門があつたのは、これはフォーマル・ルールだったのかもしれませんが。帰りの通用門の所に一言、「西武線残れ」と書いてあると、もうダメです。上級生の「お説教」が延々と続くのに耐えなければならぬ。講堂の板の間に正座させられていて、突然「起立」の声があり、よろめいたところを殴られました。「たるんでいる」といわれましたが、脚がたるんでしまうのはどうしようもなかったのです。それでも「残れ」という掲示を無視し帰ろうなどは、ゆめ思わなかつたのですから。私は五年生の桑田裕さん（46回、所沢）に似ていて「弟だろう」と言われていました。おかげで殴られる方はだいぶ助かつたはずです（昭和46年、三井銀行が埼玉第一号の店を所沢駅前に関店したとき、当時ムシプロの常務さんだった桑田さんが、人気漫画の原画を沢山寄付して下さい、お客様に喜ばれました。）

中学では横田稻吉先生や、先生と同じ坂石の大野正男さん（東洋大教授）の影響で生物部に入りました。大野さんの家には蝶の標本の箱がたくさんありました。いちど八丈島に採集にいかないと誘われましたが無理でした。おカネがありません。横田先生は教室で

は怖い先生でした。話している内に、自分の言葉で段々怒りが増してくる様なところがありましたね。個人的に接すると口数は多くないけれども、優しい思いやりのある人でした。私は高校三年の最後の学期を休んで御茶の水の予備校に通いだしました。すこし焦ったのです。通学の朝、先生と所沢の駅で別れることがよくありました。先生は黙認してくれました。今、手元には先生のご著書『武蔵野の植物』が残るだけです。それには先生の大好きな万葉の歌が書かれておりますが、昔の黒板の字とは少し違うような気がします。

ご著書といえば、松田蘭風先生の『蘭風逍遙』を頂きました。「君のことだよ」と短歌に赤丸が付けてありました。「宮城野の萩の根届けし ゆかしさをいかで忘れん 大卒記念の」。光栄であります。松田先生は私が浪人しているときに、飯能一中の先生にお誘いくださいました。三年生の担任もさせてもらいました。私はこの仕事に精魂を込めたと言い切れることに誇りを持っています。子供たちも応えてくれました。そのかげに高麗澄雄さん、海野武人さん、加藤眞三さん、故駒井恒次さんなど川中の先輩先生の助けがありました。あの頃を思い出すと今でも胸がうずきます。

浪人の一年間を、予備校にでも通った方が、受験には有利のはずです。何を好んで激務の中に没入していったのか、自分でもよく分かりません。一つには村の人たちの目を意識

したのは確かです。高校卒で町の中学の先生になるといふ。先生の仕事がこんなに面白いものだとは思わなかつた面もあります。肩身の狭い思いで予備校へ通うのはかつこうが悪いといふ気持ちもあつた。来年の受験の方は何とかなるといふ甘い判断もあつた。いろいろ入り交じつて決めたことですが、教員の経験がむだであつたとは思いません。むしろ法律を学ぶ上で、社会を少しでも知つてゐることは有利でしたし、何よりもその後の長いサラリーマン生活を通じて、「最後にはもう一度教室に戻ろう」といふ郷愁みたいなものを胸の内に植え付けてくれただけでもありがたいことでした。六十七才の今、大学の教壇に立ち、その夢が実現してゐます。昭和一ケタ生まれの生きざまを若い人に伝えることに生きがいを感じてゐます。

あの頃から半世紀が過ぎて、皆、金持ち（の気持ち）になりました。皮肉にもその分だけ、「呪縛の世界」は雪解けをしていきました。小学校の同窓会では、「内孫がない」といふ嘆きを聞きます。まんじゅうの数の多い家ほど、息子に嫁さんが来ないのだそうです。日本人の行動は世間にたいする恥の意識に基づいてゐます。「各人が自分にふさわしい位置をしめるといふ意識と行為が、社会関係の基本にある」（ルス・ベネディクト）。呪縛の雪解けは、その限りでは結構なことです。しかしその行き先に、例えば西欧のような「罪を

基調とする文化」が存在しないとなると、どうなるのでしょうか。こんなことを心配するのも年を取った証拠かもしれません。

川越中学校入学前後のあれこれ

(旧姓 武田)

大 浦 一 郎

(一) 小学生のゲートル

本書のテーマは「懐かしのゲートル時代」である。しかし、私の場合、ゲートル時代は飯能第一小学校の六年生の時となる。すなわち、私たちが県立川越中学に入学したのは昭和二十一年の四月で、敗戦後のことであつた。当時は小学校（国民学校）の生徒までが少国民として本土防衛の一翼を担うよう訓練されており、高等科の生徒達は戦車への肉薄攻撃のまね事だろうか、首に爆薬に似せた箱をくくりつけて、校庭を這いずり回っていたのである。私たち六年生はそこまではしなかつたが、「武道」の授業では、木刀を振るったり、柔道に似た実戦的な取っ組み合いを、毎時間やっていた。

昭和二十年に入ると、予想される米軍の上陸に備えて、決戦師団の重砲部隊が飯能の市街地周辺の山々に展開し、兵士達も町内の各所に駐留した。第一国民学校の校舎の半分も兵舎として使用される事になり、校門には衛兵所が設けられて、常時十人位の兵士が詰めていた。私たち生徒も、通学班ごとに隊列を組んで登校する訳であるが、校門に入る時には班長の六年生が「歩調をとれ！かしらあ、右！」と大声をあげ、全員大きく両手を振り、足を高く揚げて兵隊さんの前を通過していたのである。「よし、よく出来た。」などという誉め言葉を衛兵所からかけられて、班長の私は恥ずかしいような、晴がましいような気持ちで毎朝校門をくぐったものであった。その時、足につけていたのが、ゲートル（脚絆、キャハン）である。

だが、ゲートルをきちんと足に巻き付けるのは難しかった。細い、棒のような私の足の場合、よほど上手に巻かないとずり落ちてしまう。家で何度も練習して、どうやらうまく巻けるようになった。ゲートルを巻き、戦闘帽をかぶると、何となく大人になったような気がしたものだ。

さて、敗戦後の昭和二十年の末頃か、あるいは二十一年に入った頃であろうか。担任の小林五郎先生が私のクラス「六年男子二組」の中で、県立川越中学校を受験する者四名を毎日のように放課後の教室に残し、受験勉強を指導して下さったのである。

一歳で母親に死に別れ、父とは事情があつて別に暮らしていた私は（父に会つたのは二十三歳、大学院に入つてからであつたが）、中学に行くことになるのか否かも定かでなかつた。母方の祖父母の家で育てられ、祖父母、叔父、叔母達の大人の中で可愛がられて育つたが、決して豊かではなかつた。働き手の叔父は兵隊から帰つたばかりだし、家業（酒類販売業）はまだ営業できなかつた。それで、どういう事情で私が川中を受けることになつたのか、はつきりしないのだが、大人達の間で決まつたのだらう、小林先生の特訓を受けて、準備を行うことになつた。ご自身が川中の出身である小林先生は、ある日曜日に四名を川越に連れていき、学校と市街を案内して下さつたのである。明文堂では参考書をいろいろと指示して下さりもした。この本屋の息子と四月から同級生になるとは、この時には知る由もなかつた。

自宅では受験勉強らしきものは一切しなかつたが、小林先生の特訓のお陰か、無事に川中に合格でき、白線帽を被ることができた。県立川中の白線の一本入った学帽は、やはり

被りがいのある帽子であった。本人もそうだが、家族がなによりも喜んでくれたのが、うれしかった。当時は埼玉県西部の県立中学校は川越の他には松山しかなかったと思う。後は工業学校、商業学校、農業学校などであった。もつとも、この年に飯能町立の飯能中学校ができて、私のクラスからもかなりの生徒が進学したのであるが、一年間だけで学制改革となり、飯能高等女学校と合併して県立の飯能高校となり、今日に至っている。飯能第一小学校から川中へ進んだ者は、この年七名であった。

(三) 白線帽

一年生の夏、七月十五日の祭りで賑わう飯能町を、私は白線帽を被って歩いてきた。小路にさしかかった時、前方から小学校時代の同級生のK君がこちらに近付いてくるのが見えた。K君はクラスでも知られた乱暴者の一人で、彼を見た瞬間、嫌な予感が胸をかすめたのだが、私の真前に立つや「いよー、格好いい帽子をかぶっているじゃねーか。」と声をかけ、その瞬間さっと手を伸ばして私の学帽をひったくった。

「返せよ。」と迫る私をからかうように、右に左にあるいは後に、帽子を動かして笑っている。体中の血が逆流する思いの私は「あの大人しかった小学時代とは人間が違うぞ。」と

心中で叫びながら、夢中でK君の体にとびかかったのである。組み打ちとなり、たちまち周辺に人だかりができるのが分かった。私の攻撃はK君には予想外のことだったらしい。半年前の私であれば、黙って彼が帽子を返してくれるまで待つていたかもしれない。だが、その時は違っていた。川中生の誇りがそれを許さなかった。体が小さく、気も小さくて、喧嘩一つしたことのなかった私だから、とても彼に勝てるとは思わなかったが、勝ち負けは頭になかった。ただ必死に彼の体にむしゃぶり付いていただけであった。

急に、K君の力が弛んだと思ったら、「おい、止めよう。」と耳元でいう。「皆が見ているから、他の場所でやるべえ。」ズボンの土ほこりを払って、返された帽子を被り直すと、先を行く彼の後を私も歩き出した。賑やかな表通りを避け、裏道をたどって、二人は観音寺の墓地を抜けて天覧山下グラウンドに通ずる、木立に囲まれた真つ暗な細道を下っていった。その間、何も考えなかったわけではない。どのように闘おうか。彼はどう考えているんだろう。怪我して帰ったら、家で叱られるだろうな、等々の思いが頭をよぎったが、逃げ帰ろうとはまったく考えなかったのである。臆病な私をそこまで変えさせたのは、川中の白線帽の威力であった。

突然、前に行く彼の足が止まると、くるりと向きを変え、私を真つ正面に見据えて、「武

田（旧姓）、度胸あるじゃねーか。．．．もう帰んべー。」と云う。お祭りの囃子や賑わいの音が、私の耳に急に大きく響いてきた。

その後、半世紀、K君は私の小学校の同級生の中でも随一の好人物に変わっている。

（四） P・51ムスタング

川越までの往復は西武線を利用した。稲荷山公園駅で降りて入間川駅まで歩き、新宿線につなぐコースである。十五分間位の両駅間の徒步行は、また様々な経験や語らいを与えてくれるものであった。公園の林の中で煙草を吸う数人の上級生を目撃したり、途中で喧嘩となり、路上で取っ組み合いになった二人の友に困ったり、ジョンソン基地（現在の入間基地）に離着陸する、米軍戦闘機の俊敏そうな姿に見惚れたりしたものである。

ある日の帰り路、例によって戦闘機のP・51ムスタング三機が西側、水富村の方向から、編隊を組んで滑走路の上に突っ込んできた。私たちの前方を、先の尖った精悍な機体をきらめかせながら、機影が右から左へかすめ去った。ジュラルミン製の銀色の鼻の部分には、あたかも鮫であるかのような絵柄で洒落た彩色のほどこしてある飛行機もある。

数秒後、急に爆音が高まったかと思うと、一番機が急角度で東の空を上昇していくのが

見えた。機は大きく上空で垂直方向に弧を描くと、軽いプロペラ音と共に再び私達の眼前をかすめて滑走路の方向に消えていった。鮮やかな曲技的着陸である。つづいて二番機が同じコースを通って滑走路上に消えていった。そして三番機。「あつ、弧が小さい。」と感じた瞬間、機体は斜めに地面に突きささるように入間川ゴムの工場の屋根の陰に消えた。「どーん。」と重い衝撃音が耳に入るか入らない内に、私たちは一斉に走り出していた。

息急き切って飛行場の金網の際まで駆け付けた時には、滑走路の西端で紅蓮の炎を上げて燃える機体と、速くも周辺に群がって消火活動に励む兵士や赤い車両が目に入った。皆、前方を凝視したままで、会話が交わされる。

「死んだな。」

「うん、死んだ。」

晴れ上がった青空を背景に、鮮やかな赤色の炎が、消防車の放出する消火剤の白いラインの交錯する中で揺れ動いていた。私たちは肩からぶら下げた雑囊（旧日本軍で兵士が用いた物入れであるが、当時は通学用カバンとして広く使われていた。紐を長く伸ばし、腰の下に物入れの部分がかかるように、だらしなく下げるのが格好良いものとされていた。）の紐がずり落ちてくるのを時折ずり上げながら、いつまでも眺めていた。

(五) 様々な恩師

敗戦後の混乱期、猛烈なインフレーションで貨幣価値は下がり、食料も十分になく、一家を支えていくのは大変な事であつたろうことは、十分に推測できる。特に、インフレ時には給与所得者は不利であるし、とりわけ公務員は、ともすれば物価の上昇に合わせた給与の引き上げが遅れるので、川中の先生方もご苦労されたことが多かつたであろうことは、今になってみれば察せられる。

当時の先生方の服装は、私たちと同じ兵隊服に兵隊靴が多かつた。少し高級な将校服を着ていた先生もおられたが、中には常に三つ組みの背広を着用して授業に臨まれる、私たちの目からみていかにも教師らしい先生もおられた。年配の先生方であつたように思う。たとえば、数学の忍田先生や英語の木島先生がそうであつた。とりわけ水富村に住まわれ、西武線の電車ではしばしば一緒になつた木島先生の風格のある姿は、印象に残っている。先生の授業の、スマートでやや気障なししゃべり方も魅力があつたが、細身のズボンの背広姿が大柄な先生によく似合つていた。

あれは二年生の時ではなかつたかと思う。担任の社会科担当のY先生が私を呼び出した。職員室に行くと、ずんぐりした姿を兵隊服に包んだ先生は私を連れ出して小使室脇の井戸

端へ移動し、いがくり頭に眼鏡の顔で私をのぞきこむように話しかけてきた。

「君の家は飯能だったね。」

「そうです。」

「飯能は山の近くだけれど、炭は手に入らないだろうか。」

「炭って、燃える炭ですか。」

「そう、悪いけれど君の家の人に言つて、炭が何俵か手に入らないか聞いてみてくれないか。もし手に入れば貨車一台でもいいんだが。東飯能の駅まで貨車を送るよ。・・頼むよ。」

「分かりました。聞いてみます。」

その日、家に帰つて話すと、もちろん不可能とのこと。翌日、さつそくY先生に報告した。「あっそう。ご苦労さん。」とあっさりしたものであったが、友人たちの話によれば、先生は他の者にも同様の事を頼んでおり、どうやら「駄目もと」の精神で闇屋的な行動をされていたらしかった。恩師の中にも変わった方がおられたものである。大学の教員生活を三十五年間も続けてきた今になって、初めて当時の先生方のご苦労がしのばれるのである。

私のオリンピックピックと飯能

齊藤 博

メルボルン・オリンピックは、日本バスケット・ボール界にとって戦後初めてアジア圏を出ての国際試合であった。

開会式の当日、日本選手団の最前列に立った私はそれ迄に経験し得なかつた感動に足が震えた。スタジアムは満員、私達の入場行進がはじまりスタジアムに足を一步踏み入れた瞬間、地鳴りのような大歓声が聞える。これがオリンピックかと感激した。

試合は幸いなことに優勝候補ナンバー・ワンの米国と対戦できた。生まれて初めて見る彼等のダンク・シュートに度胆を抜かれた。当時、私達は「ダンク」という言葉さえ知らなかつたほど。二米を越す長身の米国選手が軽やかにプレーする姿を見ては、ただただ驚嘆するばかりだった。

強い米国と対戦しただけで舞い上がっていた私も、四年後の昭和三十五年のローマ・オ

リンピックではようやく地に足をつけてコートに立つことができた。それにしても当時、米国史上最強と云われただけあって、彼等の全てのプレー、特にディフェンス力には目を見張るものがあった。教科書通りの素晴らしい守りだった。こうして二度にわたり私達は、米国チームからバスケットの本質とは何かを学んだ。それが昭和三十九年の東京オリンピックで生かされる。

ローマ大会後、私はコーチとして全日本チームに残ることとなり、それからの四年間、指導者として東京オリンピックへと邁進して行った。幸いにも日本バスケット史上最高位の十位（十六ヶ国参加）を獲得することができた。メルボルン・ローマと二度にわたるオリンピックは、選手時代の私に数多くの感動を与えてくれたと共に、コーチとして臨んだこの東京大会も、バスケット人生最高の喜びとして忘れられない檜舞台であった。

私は終戦の翌年、昭和二十一年に川越中学（旧制の最後）に入学した。出身の飯能から片道二時間の通学。その上食料事情が最悪の時代である。そんな環境のもと二年生からバスケットを始めた。理由は簡単だ。飯能地区から通学する先輩の多くがバスケット部にいたからだ。オリンピック出場時は一八四センチであったが、当時すでに一八〇センチのノ

ツポでどこにいても目立つ。先輩達の目に止まらないはずはない。誘われるまま何も解らずに入部。これが私の人生を決めたと言っても過言ではない。やがてその魅力の虜に。どんなに辛い時でもバスケットを止めようと思つたことはなかった。今思えば、天が私に与えてくれたスポーツだったかも知れない。バスケット部入りを勧めてくれた諸先輩に感謝と同時に、私のオリンピックは飯能からスタートしたと今も信じている。

川越中・高時代一度も全国大会へ出場する機会のないまま、昭和二十七年に立教大学に入学。入学と同時に、その頃日本でトップクラスのバスケット部に入部。さすが名門運動部だけあって上級生の多くは全日本級。同期生はとみると、そのほとんどが高校時代全国で名の知られた者ばかりで、その上巨漢揃い。埼玉県の川越という地方区出身の私には誰も関心を示してくれなかった。

貧乏所帯をなんとかやりくりして大学まで送りだしてくれた両親のことを思うと、今更乍らシツポを巻いて引き下がるわけにもいかず、ひたすら猛練習に耐えるしかなかった。当時の立教はスパルタ練習で有名で、非常に厳しかった。特に三週間に及ぶ夏合宿は、高校を出たばかりのフレッシュ・マンにとってはまさに地獄の特訓だった。合宿が終わつていよいよ秋のシーズンに入ると、同期生の間で入学時から続いた無理がたたって故障者が

続出し、櫛の歯が抜けるように退部する者が相次いだ。

かくしてサバイバル一回戦になんとか生き残れた。改めて丈夫な身体に生んでくれた親に大いに感謝した。また、辛かったが足腰をしつかり鍛えてくれた飯能からの遠距離通学、そして体育の時間になると陸上部顔負けなほど走らされた川越中・高時代に感謝感謝であった。発育盛りにつくられた基礎体力が大学で大いに役立つことになったわけだ。

一年生の後半に一軍入りをはたした私は、密かにある計画をたてた。一軍のベンチに入った以上は何としても試合に出る。試合に出場した以上は主力のレギュラーになる。レギュラーになった以上は全日本チームの一員に選ばれたい。そして最終目標は全日本の中心選手になることだった。高校時代に一度も全国大会に出場した経験のない者にとっては大それた考えであったが、二年生の秋にそのチャンスが到来した。

その年の春、優秀な最上級生が卒業したチームにとっては早急に若手を育成して、そのギャップを埋める必要があつた。そこでコーチ陣の目にとまったのが私である。若手が徹底的にしごかれるなか、特に私はさらに輪をかけてしごかれる毎日であった。伸び盛りの時にガンガンと鍛えられたのがよかつたらしい。故障もなくよくもちこたえたものだといながら感心している。

翌年の一月の全日本総合選手権ではチームの得点頭になっていた。この大会で立教は、二年生主体のチームで天皇杯を獲得。この記録は決して破られないだろう。うれしくて涙が止まらなかつたことを今でも鮮明におぼえている。やがて私達は日本バスケット史上最強の一つに数えられる常勝チームに成長して行った。

振り返ってみるとサバイバル計画で自分に誓った夢を一つ一つ実現できたのは、大きな故障をしなかつたこと、これは若いうちに私の身体の基礎をつくってくれた飯能・川越時代ののおかげと信じている。と同時にその頃から素晴らしい先輩・同輩に恵まれたことを大変有難く思っている。

それにしても心底からバスケットが好きだったんだろう。どんなに厳しい練習でも一途に打ち込んできた。不器用だったからできたのかも知れない。バスケットで培った私のモットー、「何事も全力で」の精神は今でも私の大きな支えとなっている。

第二部 — 恩師・級友を偲んで —

在りし日の松田先生



在りし日の横田先生



在りし日の赤田さん



松田先生を偲ぶ

新井照三

マツダランプという言葉は、今も東芝の照明器具に用いられていると思うが、戦前は電気器具屋の店頭に、看板として大きく掲げられていたのを覚えている。

だからマツダと言えばランプに連想が及ぶのは、我々の世代のものにとっては自然であり、別に松田先生のあだ名のために特別に考えたものではないのだが……………。

松田先生が川越中学に着任したのは、昭和十九年の末か昭和二十年の初めで、五年生の学年主任である牧野徹夫先生が、北海道札幌の女学校に転任になった後任として、粕壁中学から来られたのだった。

戦争の最後の頃だったから、四年生と五年生は朝霞の被服廠に勤労働員で行っていた。戦争は今思えば敗色が濃くて、昭和十九年の秋には毎日のように、B 29が飛行機雲を引き

ながら高い空を飛んで、偵察写真を撮っていた。

松田先生の着任後あまり日が経っていない頃のことだった。冬だから日の落ちるのが早く作業が少し遅くなるともう暗くなって、倉庫や道路に電灯がともるようになった。作業は軍用の毛布を束ねたものや、木箱に入った服装や靴などをトロツコに積んで、倉庫に運び込んで積み上げたり、運び出して貨車に積み込んだりするのが主だった。

その日も作業が遅くなったのだが、若いとは言え馴れない肉体労働なので、毎日相当に疲れるものだった。

ちようどその現場へ学生班の事務所から松田先生が巡視に見えた。「ヤアご苦労様」ぐらいのことは言ったと思うが、詳しいことはおぼえていない。とにかく作業が終ったので我々の一隊と松田先生が、倉庫から学生班の事務所へ向かってゾロゾロと引き上げた。

暗やみにまぎれて誰かが、「ランプが居るから明るいヤ」と言った。疲れてやり切れない気分が言わせたのだろう……我々の仲間は声の調子から関根善三郎君が言ったのだということはわかったが、着任早々の先生にはわからなかつたろう。

そのときは何ということもなかったが、事務所に着いてみんな帰り支度を始めたところ

へ、松田先生がツカツカと寄って来て、「さっき誰かが、ランプが居るから明るいやと言つたが面白くないネ。ボクは仕事が遅くなつてご苦労様だと思ふから、残つてワザワザ諸君のところへ行つたんだヨ。それをランプが居るから明るいやとは何だ！」と言われた。我々は黙つてうつむいて居た。先生はひとしきり不愉快の弁を投げかけて、それでも犯人の洗い出しなどはせずにケリがついた。

戦後できたての新制中学である飯能一中の校長として、松田先生が赴任して来たのは昭和二十四年春のことだと記憶する。その時点で松田先生が蘭風という号を名のつていたかどうかは、記憶がハッキリしない。

しかし被服廠の頃にはあれだけ「ランプ」と言われるのに腹を立てたのだが、その後自ら蘭風と号するようになったというのは、先生のお人柄に余裕ができたということになるのだろう。アッパレと言つては失礼になるだろうが……………。

我々川越中学の四十三回は、先生着任時の五年生で被服廠の思い出があるためか、先生

には特に目をかけていただいた。四十三回の毎年の会合には、先生お得意の漢詩からの引用で「如雪会」と名付けていただき、毎年ご臨席を賜った。

ゲートル会にも同じように思い出からご臨席をいただいたのだと思う。

担任 横田稻吉先生

加 藤 眞 三

昭和十八年四月、晴れて川越中学に入学した私たち新入生二百十余名は四クラス編成となり、私は一年四組に配属された。私たちの教室は正面校門の左側に位置し学校の象徴ともいえる楠の木を中心に、さまざま木立に囲まれた独立棟で静かなたたずまいであった。ただドア一つで生物教室に通じており、渡り廊下を隔てて職員室が最も近い距離にあった。

入学式後緊張の面接で教室に待機する私たち五十一名の前に、突然教室内の右側のドアが開き出席簿を片手にした先生がつかつかと教壇に立った。長身。少し瘦躯、髪は黒く、

若干右肩下り、黒ぶちの眼鏡、眼光鋭く、声はドスがきいていたと記憶する。——横田稲吉先生一年四組の担任として、私たちがまじまじと拝顔した一瞬でした。今にして思えば先生は川中赴任後一年目のバリバリ教師であった。専門は生物（特に植物）とのこと、しかも生物教室主任ゆえいつも私たち一年四組は、ドアひとつ隔てて絶えず担任監視の下におかれていたのである。

出席簿の名前を読みあげていた途中で、急に声がとまった。先生が立上る。後の席の方に進んだ。思わず前列二列目の私は後をふり向くと先生の一寸甲高い怒り声が入った。「二人共立て、何をしゃべっているんだ」いきなり先生の平手打ちが二人の生徒の顔面に炸裂した。後は往復ビンタ。入学早々あまりの驚愕する出来事であった。少し目がつり上り顔面蒼白気味の姿は私たち新入生にとって、それは「怖い先生」のイメージを焼きつけるのに十分であった。以来クラスの面々は戦々恐々。先生の挙動には絶えず注意を払うようになつて行つた。以後「ゲジさん」の異名を聞くが、その意味は判然としないが何んとなく分るような気もした。

さてその先生、実は吾野にお住いで私たちと通学路は一緒だったので。飯能方面より

通学する生徒は先生と行動を共にする機会も多く、稲荷山の道を一緒に歩くこともしばしばでした。弱わたたな。怖い先生しかも担任私は内心心配でした。しかし先生の素顔が徐々に分つて来ました。

学校では怖い先生と言われていましたが、反面先生の教え方は非常に熱心で、優れた指導技術は定評があつたのです。怖いのが教え方はうまい。これは先輩諸氏が異口同音に言われていたことでした。加えて私たち飯能組にとっては非常に優しい、暖かい態度を示してくれました。吾野から毎朝五時に起きて稲荷山を生徒と一緒に歩く姿。時には「おはよう、元氣か、頑張れよ。」と笑顔で声をかけてくれたり、励ましてくれたり、時にはからかい半分の態度で接してくれたり本当に私たち新入生にとっては嬉しく、有難く、そして他の通学路の人たちに対してはある種の優越感さえ持たせてくれた事は生涯忘れぬ思い出であります。愛情あふれる先生の姿を見る時、授業時のあの怖いビンタのイメージは、とりもなおさず教育熱心の余りになせるわざと解釈せざるを得ないのです。事のよしあしは別として……………。

さて私たちは先生の戦闘帽にゲートルを巻いた姿に接したのは一年間で、その後各工場、飛行場へと動員され、各学年各組とも分散され、仲々先生とご一緒する機会は少なくなつて

しまいました。しかし先生の稲荷山を歩く足は速足^{はやあし}、少し身体を前かがみにして歩く姿は、今もなつかしく思い出されてなりません。

先生は約二十年間の川中川高時代を経て、飯能高校定時制教頭、昭和四十一年狭山高校校長をご退職まで教職四十一年の長きに亘り教育界に数多くの功績を残されました。

そしてその後は地元飯能市での活躍がはじまりました。退職後三年間は私立高校講師、昭和五十年飯能市社会教育指導員、文化財保護委員、図書館協議委員、そして社会教育委員代表として市史資料編「飯能の植物」を責任編集、文化財編と共に先生の博識を存分に発揮し得難い存在として活躍されました。

又公民館講座、自然探訪、山野草・草木染講座は殊にご婦人層に人気があり、野外教室では年令を忘れる程の健脚ぶり、一同を引張って行ったと言われています。一説では力強いご婦人たちの後押しがあつたとも言われておりますが、見ていないのでその真実は定かではありません。只ゲートル時代稲荷山を歩いたお陰が十分役立っていたと勝手に想像する次第です。

晩年先生は植物研究の集大成として「奥武蔵の植物」を出版され、当ゲートル会でも平成四年十一月二十二日梅そばに先生をお迎えして盛大な出版記念のお祝い会を開催致しま

した。又先生にはゲートル会発会后年一回の集いには、松田先生共々ご出席を賜わり教え子たちと昔話に花を咲かせたり、時には暖かいご指導も頂いて居りました。しかし先生の優しい、時には厳しい姿も今は見ることが出来ません。平成六年四月八十三年の生涯を閉じられました。

飯能市吾野、法光寺に眠ります。

今も教え子たちの動向を見守りながら……。

赤田さんのこと

海野 武人

ゲートル時代といえは私達にとっては軍国少年時代、教育とは恐ろしいもので、敗れつつある日が続けば子供ながら一途に国を憂う日々であった。今回、また赤田さんの遺作「ぼくの軍国少年期」を読んでみた。小学校時代の元気なお姿とその後の病と闘かうお姿の違

いが私には信じられない。軍国少年期の続編を書いていると言われた電話のお声が忘れられない。赤田さんは誰もが知っている弧高の歌人である。私はたびたび歌集を頂いた。素人が生意気な感想を申上げても笑って聞いてくれた。とにかく私には高く大きく難解な短歌が多かった。歌作をすすめられたが、当時私は理工系分野の研究室生活で文芸の書を読む気持もいとまもなく、海外出張のひとときに少しばかり楽しむ程度であった。今、ほぼ職を終えてから時には心がそちらを向く。

そこで、今回はこれは甚だ僭越で、地下の赤田さんに叱られるのを覚悟で赤田さんのゲートル時代の歌を選ばせて頂くことにした。赤田さん、勝手なまねをお許し下さい。

次の五首は赤田さんが昭和五十三年三月、第九回埼玉文芸賞を歌集「榛野」（はりの）で受賞されたときのものです、そのうちの「夏の視野」その他に載っている。なお、五首目は戦後の歌で、融昇とは赤田さんの学友、私達も尊敬していた服部融昇先輩のことである。今頃は二人で談笑しているのであろうか。

反転し墜ちゆける機の火を噴くは

音失ひし夏の視野なり

檻らん褻る着て林を帰る学徒なりき

空襲果てし夕肩組み

ゲートルを巻くわれの背に朝な朝な

来て坐りしが母言はざりき

この谷を出でて戦に死す多し

山辺に古き墓はみな兵

嗚咽おえつすら床に吸はれつ置かれてゐて

言わぬ融昇の頬のかげりよ



あとがき

☒ 漸く完成しました。寄稿された方々、編集に携わった方々の努力と汗の結晶が実り、ここに「遙かなる日々」が陽の目をみる事が出来ました。本当に有難うございました。

二十世紀前半の戦時下体験を二十一世紀に伝える意味は深いと思います。二十一世紀の平和に向けて二度と繰返してはならない戦時体験を、私共一人一人の記憶を仲間の記録に置換え、記念誌として残す意義は極めて価値あるものと思います。
(加藤眞三)

☒ 戦中に青春時代を過ごした思い出は様々あって語り尽くせない。昭和の歴史と共に必死に生きて来た道、取分けゲートル時代の回想集が刊行されることは意義深いものがある。これを契機に初雁同窓生としての絆を強め友情を深めて行きたい。
(入子祐三)

☒ ゲートルを巻いて通学した中学四年間の記憶も、半世紀以上を経過すると可成り風化して来る。友の原稿に目を通していると、私の脳裏から脱落していた往時のあれこれが、スポットライトを浴びた様に鮮明に蘇って来て感慨も一入。——一人よがりだったかな？

(佐野陽太郎)

☒ 私達「中47回／高1回」は、還暦を迎えて記念誌を発行した。今年古稀が来たら今度は「ゲートル会」で文集を編むという。節目の年に、一回とも本を作ることが出来るとは何という幸運……。関谷会長や、加藤眞三兄に大感謝。しかも大勢の方々が、みんなで協力して各自の負担がとでも少なくて済んだと思う。「類を見ない記念誌になるのでは……」とのこと。年末のゲートル会が楽しみ。

(西澤 孝)

☒ 「一旦緩急有れば」、「身を鴻毛の軽しとして」と、「滅私奉公」を求められた少年たちの体験と真実は野晒しのままに浮遊し、埋没し、風化し果てようとして五十余年、時宜を得てその魂は蘇生した。多忙の中真情を吐露してくださった諸兄に万感の思いをこめて感謝を申し上げるのみ。

(本橋藤治)

☒ 『喉元過ぎれば……』よく使われる言葉ですが、平和の今、戦時中の物のない耐乏生活を「お国の為に」とみんなで協力し、励ましあいながら過ごしました當時を振り返ってみますと改めて教育の怖さを感じさせられます。次から次と浮かんできます思い出を何時の間にか語り草として書き記したくなるような年になってしまいました。

(赤田康二)

☒ 私達高校四回卒業組は、足にゲートルを巻いて川中に通学した訳ではないので、厳密に言えば、「ゲートル会」の対象ではないかも知れない。しかし、旧制中学の最後の学年で

あり、高校二年になるまで四年間も後輩は現われず、戦中、戦前の伝統を色濃く残した学校生活を初雁城址の古色蒼然たる校舎で六年間も送った点では、高校五回卒業以降の学年とは一線を画している。

そんな事情で、書きにくいところもあったのだが、三人の旧友は快く引き受けてくれて、先輩諸氏の学年と歩調を揃えられたことに編集委員の一人として感謝している。

(大浦一郎)

☒ 飯能初雁ゲートル会記念文集の編集に参画し諸氏の原稿を拜読して感じたことは、会員各位の生きてきた夫々の時代なりの楽しく夢多い青春時代が鮮かに描写されていることである。暗い戦時中にも拘らず明るさを忘れない強い友情に結ばれた青春の思い出。又戦後の混乱期に青春時代を過ごし、軍国主義から民主主義へと価値観が一八〇度転換した激動期の「生き証人」として熱い思いがひしひしと胸を打つ。そして昔の思い出は忘却の彼方にうすれ行く運命にあるが、それがあたかも昨日の出来事の如く迫ってくる場がゲートル会であろう。

(双木貞夫)

☒ 編集委員の一員として同期生の方々の原稿を読ませていただきましたが、多くの方があの戦争末期の生々しい体験を語られていて、半ば忘れかけていた当時のことを否応なく

思い起こされました。

差し迫る戦局の重大さから、もう一刻も猶予ならないという焦りに駆られて両親や学校に内緒で少年飛行兵に志願しました。十二月に入隊と決まり、密かに身辺整理を始めていたときに八月十五日を迎えたのでした。

できれば忘却の深淵に沈めておきたいことです。

(伊藤 豊)

☒ 原稿依頼の時点では正直どの位の人が応募して頂けるか不安もあったが、締切が近くにつれ続々と原稿が届けられ、しかも原稿用紙も平均四〜五枚程度にふえていった。内容も興味津々、びっくり仰天するもの等、盛沢山な情報が臨場感をもって記述されていた。作業は予想以上に大変だった。原稿を集めて写真を添えて出版元にもって行く。そうすれば文集綴り程度より一寸よいものが出来るだろうと素人考えで取組んだ誤算は大きかった。多数の素晴らしい原稿の前に、急遽関谷会長さんを中心に編集委員会をつくる。しかし所詮は素人集団、右も左も分らずじまい。

ああこんな時、赤田健一さんが存命ならばと今更ながら彼の偉大な存在を知らされた次第。しかし幸いなるかな神は我を見捨てず、その道のベテラン入子祐三先輩及び西澤孝氏を与えてくれた。お陰で作業は軌道に乗り順調に推移した。一同両氏に深謝すること頻り。

さてご期待にそえたものが出来たかどうか、只管諸兄のご判断に待つより他なし。
ただやるだけやったの満足感。一同これのみ……。

最後に出版一切お世話いただいた文化新聞社の皆様に深甚なる感謝を捧げる次第である。

(編集委員一同)

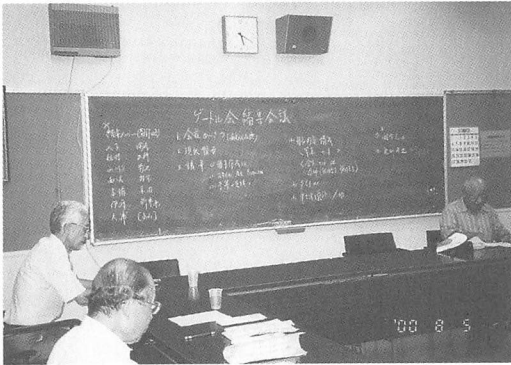
編集委員

入子祐三	佐野陽太郎
関谷 昭	山川健夫
小山誠三	西澤 孝
新井幸一	加藤眞三
伊藤 豊	菊池好太郎
本橋藤治	赤田康二
双木貞夫	大浦一郎

編集風景（アルバム）



会長自ら陣頭指揮で



中央公民館にて



夏の暑さにもめげず

あれから五十年…

活躍するゲートル会の面々…



松田、横田、両先生を中心に



宴の後は校歌斉唱で



童顔よみがえる



笑顔と共に



貴様と俺は肩組んで



談笑のひとつき



話は尽きず、延々と…



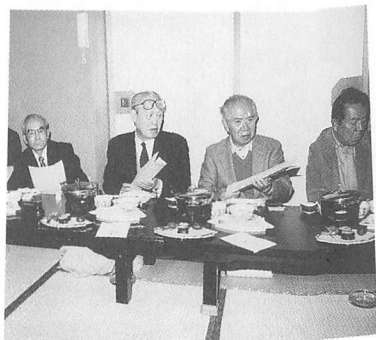
酒くみ合せて



昔は…こうだった



おい 元気かい



医者同士仲よく



先輩どうですか



先輩元気ですね



皆さん…幹事さんは大変です



いつも元気です



市長も同窓会長も毎回精勤



幹事さんご苦労様です



私たち同級生です



大口あけて…年はとっても気は若い

遙かなる日々

——初雁健児ゲートル時代の回想——

頒 価 二五〇〇円

発 行 二〇〇〇年十二月八日

飯能初雁ゲートル会

会長 関谷 昭

〒357-0033

飯能市八幡町十九-五

TEL 〇四二九-七三一六四八二

編 集 飯能初雁ゲートル会記念誌

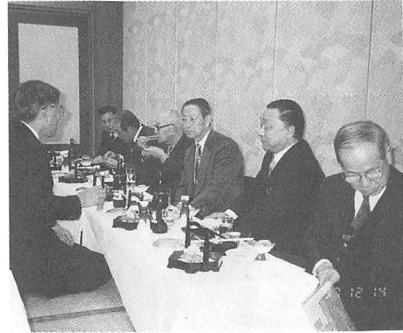
編集委員会

印 刷 株式会社 文化新聞社

埼玉県飯能市柳町十二-十



いつも元気です



市長も同窓会長も毎回精勤



幹事さんご苦労様です



私たち同級生です



大口あけて…年はとっても気は若い



おい 元気かい



医者同士仲よく



先輩どうですか



先輩元気ですね



皆さん…幹事さんは大変です